



名古屋外国語大学大学院
国際コミュニケーション研究科
博士前期課程・博士後期課程

2026

Nagoya University of Foreign Studies Graduate School

(2027年度入試用資料)

NUFS
Graduate School of International Studies

NUFS

Graduate School of International Studies

学問の理想を追求する
大学院の生活がここにあります。

目次

I 国際コミュニケーション研究科の概要	2
名称・定員・学位等	2
修了要件	3
特色	4
博士前期課程	4
1. 英語・英語教育コース(英語・英語教育プログラム)	
2. 英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)	
3. 日本語・日本語教育コース	
4. グローバルコミュニケーションコース	
博士後期課程	6
1. 英語学・英語教育学分野	
2. 日本語学・日本語教育学分野	
3. グローバルコミュニケーション分野	
II 大学院学生の奨学援助について	7
III 教育職員免許状について	8
免許状の種類、教科及び必要単位数	8
IV 海外留学について	8
大学院学生海外留学制度	8
V 授業科目	9
博士前期課程	9
博士後期課程	10
VI 教員略歴一覧	11
専任教員略歴	11
兼任講師(非常勤教員)略歴	16
コース別教員一覧	20
VII 授業科目の概要	21
博士前期課程	21



名古屋外国語大学長

亀山 郁夫



私たちはいま、大きな不安に満ちた時代を生きています。ロシアによるウクライナ侵攻に端を発する世界の分断、自然災害への恐怖、AIテクノロジーの不気味な進化。グローバル社会の姿は大きく様変わりし、日本社会もまた、他の国々と等しく、これまでとは異なる《競争》と《共存》の二つのベクトルが交差する厳しい状況のなかでの戦いを迫られています。思うに、この状況が、私たちに語りかけているのは、「原点に戻れ」の精神です。「原点に戻れ」とは、私たち人類にとっての「理想」とは何なのかを、改めて見直せ、のサインです。しかし、時代がどう変わろうとも、つねに理想とされる人材があります。それこそは、高い教養と、優れたコミュニケーション能力を備えた創造的な個性です。また、どんな困難にも耐えていける強い精神力、強いリーダーシップと共感力も大切でしょう。むしろ、これらを一度に身に着けることは困難ですが、私たちが何を学んでいくにせよ、こうした究極的目標を見失わない心がけが大切です。

他方、日本の学術研究にもまた、大きな変化のきざしが現われています。領域を問わず、「研究のための研究」という態度は通用しにくくなりました。むしろ、社会が身近に抱える矛盾や課題を解決し、地域の人々の生活に広く貢献できる研究が求められているのです。「人間教育と実学」を建学の精神とする本学の大学院が理想とするのも、まさに世界に通用する実学的な研究であり、リアルな

問題意識に裏付けられたリアルなテーマの発掘です。今後の私たちの学問の将来を占う指標の一つとして、生成AIがあります。生成AIの創造的な活用によって、人類とテクノロジーの調和的關係から生まれる新しいテーマの発掘を祈らざるをえません。

さて、私たちの名古屋外国語大学では、2020年4月に、新たな時代の要請に即して改革に踏み切りました。前期課程では、英語・英語教育コース、日本語・日本語教育コース、グローバルコミュニケーションコースの、従来よりもはるかに明確化された3コース制をとり、同じかたちを後期課程につなげる改革です。それぞれのコース、分野は、現代の日本社会に役立つ高度な学識を修得させるカリキュラムの構成を持ち、学生ひとり一人を大切に温かい指導体制を誇りとしています。私たちは、この改革をとおして、本学における大学院教育が、より鮮明にアピールできると同時に、これまで以上に専門性の高い教育を実現できるものと確信します。

最後に、創造性にあふれるテーマの発見と実りある研究生活を心より祈念し、学長の挨拶と致します。



国際コミュニケーション研究科長

早津 恵美子

大学院での学修の最大の特徴は、自分が探求したいテーマを自ら探し、その研究を深め、独創的な研究成果をうみだすことです。

学部生あるいは社会人として身につけた知識や経験をもとに、最新の研究成果に数多く触れ、自身の研究課題を明確にし、その探求に努めることが肝要です。研究を深めるためには、研究書や研究論文を数多く読むことが基本ですが、批判的に読むことが大切です。研究を深める中で、教員や他の大学院生と議論を重ね、自分の研究成果を精緻化し、それをわかりやすく他者に発信することも必要です。

本学の学位授与方針では、学修成果として、高い教養、優れたコミュニケーション能力、学際的で豊かな専門性、確かな研究能力を提示しています。本学大学院で学びを究め、文理の枠を超えた広い視野で、グローバル教養人として世界で活躍することを期待しております。

入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

大学院国際コミュニケーション研究科

国際コミュニケーション研究科では、学園の建学の精神である「人間教育と実学」に立ち、言語を中心にすえて、国際理解に必要な知識・技能を総合的に研究・教授する機関として、研究者養成とともに、現代国際社会で活躍する高度な専門知識を持った職業人の育成を目的としています。

このため、入学者の受け入れについては、本学大学院での学修についての関心、意欲とともに、入学後の学修に必要な資質・能力を有する人を求めます。そのための選考方法は、書類審査、本学大学院での研究計画等についての口頭試問を基本として、課程、試験種に応じた選考方法を実施します。

■博士前期課程

博士前期課程では、外国語や日本語の運用能力、専門分野の基礎的な知識、研究能力の基礎とともに、研究意欲を持ち、研究者、高度専門職業人を目指し、広い視野に立って研究をとおして国際社会で貢献しようとする人を求めます。

このため、入学者の受け入れについては、本学博士前期課程での学修についての関心、意欲とともに、入学後の学修に必要な資質・能力を有する人を求めます。そのための選考方法は、書類審査、研究計画等についての口頭試問とともに、試験種によっては外国語、専門科目の筆記試験を実施します。ただし、英語教授法（TESOL）プログラムについては、書類審査とともに、英語による口頭試問、小論文（英文）及び研究計画書に関する試問を行います。

■博士後期課程

博士後期課程では、外国語や日本語の高度な運用能力、専門分野の高度な知識とともに、高い目標意識、豊かな研究能力、強い研究意欲を持ち、教育や研究で指導的立場に立ち、世界を相手に活躍できる研究者、高度専門職業人を目指し、研究をとおして国際社会で十分に貢献しようとする人を求めます。

このため、入学者の受け入れについては、本学博士後期課程での学修についての関心、意欲とともに、入学後の学修に必要な資質・能力を有する人を求めます。そのための選考方法は、書類審査とともに、研究計画書、修士学位論文等についての口頭試問を実施します。

I 国際コミュニケーション研究科の概要

名称 定員 学位 等

研究科名称……………国際コミュニケーション研究科

専攻名称……………国際コミュニケーション専攻

課程と入学定員……………博士前期課程／2年／入学定員20名
博士後期課程／3年／入学定員5名

学位

■博士前期課程

- ◆ 英語・英語教育コース……………修士（英語・英語教育）
（英語・英語教育プログラム）
- ◆ 英語・英語教育コース……………修士（英語・英語教育） ※現職英語教員対象
（英語教授法（TESOL）プログラム）
- ◆ 日本語・日本語教育コース……………修士（日本語・日本語教育）
- ◆ グローバルコミュニケーションコース…修士（国際文化）

■博士後期課程

- ◆ 英語学・英語教育学分野……………博士（英語学・英語教育学）
- ◆ 日本語学・日本語教育学分野……………博士（日本語学・日本語教育学）
- ◆ グローバルコミュニケーション分野…博士（国際文化）





修了要件

■ 博士前期課程

【英語・英語教育コース(英語・英語教育プログラム)、日本語・日本語教育コース、グローバルコミュニケーションコースの各コース】

前期課程に2年以上在学し、コース共通科目から8単位以上、専門教育科目(自コース)から10単位以上の計30単位以上を修得し、修士論文または課題研究の審査及び試験に合格した者に対して修士の学位を授与します。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、前期課程に1年以上在学すれば修了を認定することができます。

【英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)】

前期課程に2年以上在学し、本プログラムの専門教育科目から30単位以上を修得し、修士論文または課題研究の審査及び試験に合格した者に対して修士の学位を授与します。

〈長期履修学生制度〉

長期履修学生制度とは、職業等に従事しながら、個人の事情に応じて、柔軟に標準修業年限の2年を超えて履修し学位等を取得できるようにする制度です。長期履修学生として認められた場合は、修業年限は最長4年で、授業料は2年分のみ納付します(教育充実費は規定どおり納付します)。長期履修を希望する者は、入学時または1年次2月の所定の期日までに「長期履修申請書」等必要書類を提出しなければなりません。本制度が適用される対象は、社会人を対象とする特別入試により入学または在学する者及び英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)に入学または在学する者で、長期履修申請が認められた者となります。

■ 博士後期課程

【英語学・英語教育学、日本語学・日本語教育学、グローバルコミュニケーションの各分野】

後期課程に3年以上在学し、所定の授業科目を履修・修得し、必要な研究指導を受け、かつ、博士候補資格を取得した上、博士論文の審査及び最終試験に合格した者に博士の学位を授与します。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については後期課程に1年以上在学すれば修了を認定することができます。

〈博士候補資格〉

博士候補資格とは、博士後期課程における円滑な学位授与を促進するため、学位取得プロセスにおいて学生が一定レベルに達し、学位取得の見込みがあると認められる場合、そのことを明らかにする資格であり、博士論文を提出するためには、博士候補資格の認定を受けなければなりません。なお、本候補資格者は、標準修業年限3年(休学期間を除く)を超えて引き続き在学する場合、授業料、教育充実費は免除されます(学費として指導料(30,000円/年)を納付します)。

博士前期課程

前期課程は本学外国語学部、現代国際学部、世界共生学部及び世界教養学部にまたがる修士課程として設置しています。

カリキュラムは、学部の学習課程を考慮して、英語・日本語及びグローバルコミュニケーションと広範な分野に亘っていますが、研究志向及び就職分野をより明確にすることを意図して、専攻に下記の3コース2プログラムを設け、高い教養と優れたコミュニケーション能力に基づいた学際的で豊かな研究能力を備えた人材育成を目的としています。

なお、大学院独自の奨学金制度や授業料減免制度、大学院生のための共同研究室など、大学院生を支援する制度、施設が充実しています。(詳しくはp.7参照)

英語・英語教育コース (英語・英語教育プログラム)

本プログラムには、英語学、英語圏文化・文学、英語教育の3つの領域があります。最初の英語学は、音声学・音韻論、統語論、意味論、語用論、語彙論等、現代理論言語学の主な領域をカバーし、英語圏文化・文学は、英語圏文学の作品研究や作家研究、またそれらが背景とする社会や文化の研究を含みます。そして英語教育は、英語教育の方法論、指導論や評価論、さらに第二言語習得研究等の応用言語学分野を含みます。

本プログラムでは、英語学、英語圏文化・文学および英語教育学(コミュニケーション論を含む)を専門とする研究者、広い視野と深い学識を備えた高度職業人専門家、卓越した専門性をもつ語学教師を育てることを目指しています。

英語・英語教育コース (英語教授法(TESOL)プログラム)

英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)は、中学校、高等学校、英会話学校(個人教授を除く)などの英語教師(外国人教師・ALTを含む)を対象とする社会人向けプログラムです。理論と実践の両面を学びながら、英語教育に関する専門性を高めることを目的としています。

このプログラムでは、教育現場の状況や教室で学ぶ学習者に応じた指導のあり方を、理論的・実践的に深める講義科目を開講しており、授業は英語で行われます。また、年間を通して行われるアクション・リサーチ(実践研究)や研究発表会などを通じて、院生や教員と研究交流を行う機会も豊富に設けられています。なお、社会人を対象としているため、土曜日や夏季休暇中の集中講義、オンラインによる個別指導など、現職教師が学びやすい環境を整えています。さらに、Hawaii Pacific University(米国)、University of Newcastle(オーストラリア)、Griffith University(オーストラリア)の大学院TESOLコースへの1年間の交換留学制度も設けられており、留学費用全額支援制度の対象となります。

Master's programs

◆ 日本語・日本語教育コース

日本語学、日本語教育学、日本文学・日本文化学の3領域に関する幅広い知識をもとに、グローバル社会や多文化共生社会に貢献できることと文化の専門家を育成し、同時に、日本語教育の高度専門職業人養成という社会の要請に応えることを目指します。

日本語学領域においては、日本語の様々な諸領域（文法、音声、談話、語用など）を客観的に観察、分析します。日本語教育学の領域では、学習者の多様性に応じた日本語教育実践、第二言語としての日本語の習得研究、日本語の評価法などを研究します。日本文学・日本文化学領域においては、文化の要素、日本文化の位置づけ、文化の接触・受容・変容・進化等についての知見を得て、日本文化学ならびに日本文学研究の意義を見出します。

◆ グローバルコミュニケーションコース

国際社会で活躍する専門的知見を有するグローバル職業人の育成を目指します。世界の言語・文化・社会・情報などについて文理の枠を超えた視点からグローバル教養を修得し、多様な文化的背景をもつ人々との相互理解を図る多文化理解力を涵養するとともに、世界に向けて情報発信を的確に行う高度なコミュニケーション能力を養成します。外務省職員、国際公務員、国連職員、国際ジャーナリスト等への就職を念頭に、外交官、外務省在外公館専門調査員などの各種資格試験にも積極的にチャレンジするコースです。

Doctoral programs

■ 博士後期課程

博士後期課程には、「英語学・英語教育学」、「日本語学・日本語教育学」、「グローバルコミュニケーション」の3つの専門分野があり、徹底した個別の研究指導を通して高度な専門的職業人、教育者、あるいは研究者を養成することを目的としています。本研究科の特色である総合性、学際性を重視し、前期課程で養われた幅広い視野をさらに深めるとともに、各自の専門領域について高度な研究能力を身につけ、その知識と能力を実社会での実践に生かすことを目指します。

博士後期課程の大学院生を支援する体制も整備されています。博士後期課程に一定期間在籍し、博士候補資格が認められた大学院生は、標準修業年限3年を超えて引き続き在学する場合には、授業料と教育充実費が免除されます。この他にも、大学院独自の充実した奨学金制度と授業料減免制度があり、大学院生のための共同研究室などの施設設備も完備しています。(詳しくはp.7参照)

◆ 英語学・英語教育学分野

英語学や英語教育学の分野を涉猟し、先行研究を批判的に吟味し、有意義な課題を自分で設定、調査、考察し、その成果を博士論文として書くことを通して、自立した研究者や高度な専門職者を育てることを目指します。

この分野には文学(社会論を含む)も密接に関係するので、英語の文学研究も奨励します。

◆ グローバルコミュニケーション分野

言語・文化・社会・政治・情報・ビジネスなどについて文理の枠を超えたグローバル教養の修得に力を入れます。具体的には、1)世界に向けた的確な情報発信、並びに共感を生むコミュニケーション能力の涵養、2)多様な文化的背景をもつ人々との総合理解を図る多文化理解力の向上、3)持続可能な社会発展に向けた問題解決能力やプロデュース力の養成を図ります。博士論文の執筆については、自ら研究課題を設定し、高度な外国語運用能力を駆使して情報を収集し、緻密な分析力と深い洞察力を身につけるよう徹底した研究指導を行います。

◆ 日本語学・日本語教育学分野

国内・海外の高等教育機関で日本語研究、日本語教育研究に従事し、日本語教員の養成に携わることができる高度専門家を育成することによって世界の日本語教育に貢献することを目指しています。具体的には、博士論文の執筆を通して学術研究の能力を伸ばすことに加えて、言語および言語教育一般に関する幅広い知識と深い洞察力、さらには実践的な日本語教育能力を身につけるよう指導します。



II 大学院学生の奨学援助について

本大学院では、次のような奨学援助制度があり、学費への援助、大学院学生の就学環境全般にわたる総合的な支援を行っています。

1. 奨学金制度

(1) 名古屋外国語大学大学院奨学金

本大学院に在学する学生(但し、外国人留学生を除く)の奨学金で、「名古屋外国語大学大学院奨学金規程」の定めるところによります。本奨学金制度の種別は、特別給付奨学金、一般給付奨学金、貸与奨学金、利息補給奨学金の4種別です。給付奨学金の採用に漏れた場合、貸与奨学金が受給できるよう同時申請が可能です。

(2) 名古屋外国語大学大学院学内推薦入学生奨学金

本大学院学内推薦入学試験により博士前期課程に入学した学生に給付される奨学金で、「名古屋外国語大学大学院学内推薦入学生奨学金規程」の定めるところによります。

種 別	奨学金の金額	採用人員
一般給付奨学金	授業料及び教育充実費の合計の1/2の額	若干名
特別給付奨学金	授業料及び教育充実費の合計額	若干名
貸 与 奨 学 金	授業料及び教育充実費の合計額	若干名
利息補給奨学金	教育ローンの年利息の1/2の額	若干名
学内推薦入学生奨学金	授業料及び教育充実費の合計の1/2の額	該当者 全 員

※採用は、博士前期課程生は在学期間中4回、博士後期課程生は在学期間中6回に限られます。

※英語教授法 (TESOL) プログラム入試により入学した者は上記の奨学金を受給できませんが、全員、授業料は25%の減免、教育充実費は50%の減免を受けられます。(在学中4回に限る)

2. 研究援助制度

本大学院学生の研究を奨励・援助するため、「名古屋外国語大学大学院学生の研究費補助に関する規程」により研究費を補助する制度と、本大学院学生の研究活動を奨励し、学修成果をあげるため、「名古屋外国語大学大学院学生の研究旅費補助に関する内規」に

より、国内又は国外で開催される学会等において研究発表を行うための研究旅費を補助する制度があります。

3. 私費外国人留学生奨学金制度

本大学院に在学する私費外国人留学生の奨学金制度で、「名古屋外国語大学大学院私費外国人留学生奨学金規程」の定めるところによります。

4. 私費外国人留学生の授業料減免制度

本大学院に在学する私費外国人留学生の経済的負担を軽減し、かつ安心して勉学に専念できるように援助するための授業料減免に関する制度で、「名古屋外国語大学私費外国人留学生の授業料減免に関する規程」の定めるところによります。

5. 長期履修学生制度

長期履修学生制度とは、職業等に従事しながら、個人の事情に応じて、柔軟に標準修業年限の2年を超えて履修し学位等を取得できるようにする制度です。長期履修学生として認められた場合は、修業年限は最長4年で、授業料は2年分のみ納付します(教育充実費は規定どおり納付します)。長期履修を希望する者は、入学時または1年次2月の所定の期日までに「長期履修申請書」等必要書類を提出しなければなりません。本制度が適用される対象は、社会人を対象とする特別入試により入学または在学する者及び英語・英語教育コース(英語教授法 (TESOL) プログラム)に入学または在学する者で、長期履修申請が認められた者となります。

6. T.A. (ティーチング・アシスタント) 制度

本大学院学生に教育指導のトレーニングの機会を提供するための制度で、「名古屋外国語大学大学院ティーチング・アシスタント実施要項」の定めるところにより、主に学部授業の教育補助業務を行うことができ、手当が支給されます。

詳しくは右記からご参照ください。 <https://www.nufs.ac.jp/faculties/graduate-school/regulations/rule/>



III

教育職員免許状について ―免許状の種類、教科及び必要単位数―

本学大学院前期課程の開講科目のうち、教育職員免許状の教科及び教科の指導法に関する科目または教育の基礎的理解に関する科目を履修することにより、**中学校教諭専修免許状**及び**高等学校教諭**

専修免許状を取得することができます。教育職員免許状授与の所要資格を取得できる教育職員免許状の種類、免許教科及び単位数は次のとおりです。

教育職員免許状の種類	免許教科	必要単位数
中学校教諭専修免許状 高等学校教諭専修免許状	英語	教科及び教科の指導法に関する科目 または教育の基礎的理解に関する科目 から24単位
	国語	

IV

海外留学について ―大学院学生海外留学制度―

本学の大学院生は、留学にかかる費用を本学が全額負担する「TESS（I・II）留学」を始め、交換留学や認定留学といったプログラムを利用できます。以下、各留学制度について解説します。

1. TESS I（ダブルディグリー）留学

本学と学位取得に関する協定を交わした協定校で留学をすることにより、本学および当該大学の双方から学位を取得する制度です。下の表のとおり、留学にかかる費用は本学からの奨学金でほとんど賄うことができます。なお留学先は天津外国語大学大学院及び大連大学大学院に限られます（2026年2月現在）。

2. TESS II（スタンダード）留学

本学と学生交流協定を締結している外国の大学の大学院課程に、本学の推薦を得て留学する制度です。協定校とは双方が学生を派遣しあうことで築かれた厚い信頼関係があり、安心して学べる環境が

確保されています。下の表の通り留学にかかる費用は本学からの奨学金でほとんど賄うことが出来ます。

3. 交換留学

交換留学とは、学生交流協定を締結している外国の大学の大学院課程に、本学の推薦を得て留学する制度です。留学先の授業料は先方より免除、または本学から支給されます。また下の表の通り規定の奨学金が支給されます。

4. 認定留学

外国の正規の大学院に本学の許可を得て留学する制度です。この制度の最も大きな利点は、学生が留学先をある程度自由に決められることです。留学先大学の学費は自己負担です。下の表の通り規定の奨学金が支給されます。

◇留学制度比較表

名古屋外国語大学留学制度比較表（大学院） ※2026年度募集・2027年度出発用

制度	項目	留学先教育機関	学籍	留学対象学年	単位認定	留学期間	支給対象項目 / 年額奨学金 ※注4)	留学先大学授業料	留学中の本学への学費
TESS 留学 ※注1)	I（ダブルディグリー）	本学とダブルディグリー協定を交わした協定校	在学	2年次 1期以降	15単位 まで ※注5)	1年	居住費、渡航費、保険料、教科書代、ビザ申請料 ※注3)	留学先大学より免除または本学支給	全額納入
	II（スタンダード）	本学と学生交流協定を締結している大学				半年 または 1年			
交換留学		本学と学生交流協定を締結している大学					◇奨学金 北中米・ヨーロッパ・オセアニア地域 20万円 アジア地域 10万円 ◇海外旅行傷害保険料	留学先大学より免除または本学支給	
認定留学		海外の学位授与資格のある教育機関、およびその附属機関					年額20万円～60万円（地域による） ◇海外旅行傷害保険料	自己負担	
私費留学 ※注2)		問わない	休学	問わない	なし	休学期間内	なし	自己負担	不要

注1）TESSとはTotal Expenses Support System（費用全額支援）の略

注2）「私費留学」は、本学の留学制度ではないが比較対象のため掲載した。

注3）居住費：各留学先大学それぞれの標準的な宿舍費を見積もり、支給する。

渡航費：旅行代理店を通して現物支給する。

保険料：海外旅行傷害保険料のほか留学先大学が強制するものや留学ビザ取得に加入が必要なものを支給する。

教科書代：国別の標準金額を支給する。

注4）これら奨学金の財源の一部は、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度奨学金による。

注5）2020年度以前の入学者は10単位まで認定

V

授業科目

博士前期課程

英語・英語教育コース（英語・英語教育プログラム）、日本語・日本語教育コース、グローバルコミュニケーションコース

授 業 科 目 名					サ ブ タ イ ト ル		単 位 数
コ ー ス 共 通 科 目	総 合 研 究 I	研 究 方 法 論			2		
	総 合 研 究 II	量 的 研 究 法			2		
	総 合 研 究 III	質 的 研 究 法			2		
	総 合 研 究 IV	アカデミック・プレゼンテーション			2		
	総 合 研 究 V	比 較 教 育 社 会 学			2		
	総 合 研 究 VI	比 較 文 化			2		
	総 合 研 究 VII	情 報 発 信 の ス キ ル			2		
	外国語コミュニケーションI	アカデミック・イングリッシュ			2		
	外国語コミュニケーションII	アカデミック・フレンチ			2		
	外国語コミュニケーションIII	アカデミック・チャイニーズ			2		
	外国語コミュニケーションIV	アカデミック・ジャパニーズ			2		
	外国語コミュニケーションV	英 語 通 訳			2		
	外国語コミュニケーションVI	英 語 翻 訳			2		
	言 語 文 化 研 究 I	文 学 批 評			2		
	言 語 文 化 研 究 II	言 語 文 化 史			2		
	言 語 文 化 研 究 III	対 照 言 語 学			2		
	言 語 文 化 研 究 IV	応 用 言 語 学			2		
専 門 教 育 科 目	英 語 学 研 究 I	音 声 学 ・ 音 韻 論			2		
	英 語 学 研 究 II	音 声 学 ・ 音 韻 論			2		
	英 語 学 研 究 III	統 語 論			2		
	英 語 学 研 究 IV	統 語 論			2		
	英 語 学 研 究 V	意 味 論 ・ 語 用 論			2		
	英 語 学 研 究 VI	意 味 論 ・ 語 用 論			2		
	英 語 学 研 究 VII	心 理 言 語 学			2		
	英 語 学 研 究 VIII	社 会 言 語 学			2		
	英 語 教 育 法 研 究 I	言 語 習 得 論			2		
	英 語 教 育 法 研 究 II	教 育 方 法 論			2		
	英 語 教 育 法 研 究 III	外 国 語 学 習 理 論 1			2		
	英 語 教 育 法 研 究 IV	外 国 語 学 習 理 論 2			2		
	英 語 教 育 法 研 究 V	英語教育と異文化間コミュニケーション			2		
	英 語 教 育 法 研 究 VI	英語教育と異文化間コミュニケーション			2		
	英 語 圏 文 化 研 究 I	ア メ リ カ の 小 説 と 文 化			2		
	英 語 圏 文 化 研 究 II	ア メ リ カ の 小 説 と 文 化			2		
	英 語 圏 文 化 研 究 III	イ ギ リ ス 文 化 論			2		
	英 語 圏 文 化 研 究 IV	イ ギ リ ス 文 化 論			2		
	英 語 圏 文 化 研 究 V	ニ ュ ー ジ ー ラ ン ド 文 化 論			2		
	英 語 圏 文 化 研 究 VI	ニ ュ ー ジ ー ラ ン ド 文 化 論			2		
	日 本 語 学 研 究 I	日 本 語 学 概 論			2		

授 業 科 目 名		サ ブ タ イ ト ル	単 位 数
専 門 教 育 科 目	日 本 語 学 研 究 Ⅱ	日 本 語 談 話 研 究	2
	日 本 語 学 研 究 Ⅲ	日 本 語 音 声 学 ・ 音 韻 論	2
	日 本 語 学 研 究 Ⅳ	日 本 語 音 声 学 ・ 音 韻 論	2
	日 本 語 学 研 究 Ⅴ	日 本 語 学 特 論	2
	日 本 語 学 研 究 Ⅵ	日 本 語 文 法 論	2
	日 本 語 学 研 究 Ⅶ	日 本 語 文 法 論	2
	日 本 語 学 研 究 Ⅷ	日 本 語 語 彙 論	2
	日 本 語 学 研 究 Ⅸ	日 本 語 語 彙 論	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 Ⅰ	第 二 言 語 習 得 論	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 Ⅱ	第 二 言 語 習 得 論	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 Ⅲ	日 本 語 教 育 評 価 法	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 Ⅳ	日 本 語 教 育 評 価 法	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 Ⅴ	日 本 語 教 育 実 践 研 究	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 Ⅵ	日 本 語 教 育 実 践 研 究	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 Ⅶ	デ ー タ 分 析 法	2
	日 本 文 化 研 究 Ⅰ	日 本 文 化 論	2
	日 本 文 化 研 究 Ⅱ	日 本 文 化 論	2
	日 本 文 化 研 究 Ⅲ	日 本 文 学 研 究	2
	日 本 文 化 研 究 Ⅳ	日 本 文 学 研 究	2
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ 研 究 Ⅰ	国 際 関 係 と 外 交	2
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ 研 究 Ⅱ	国 際 マ ク ロ 経 済 と グ ロー バ ル ビ ジ ネ ス	2
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ 研 究 Ⅲ	国 際 政 治 ・ 紛 争 ・ 平 和 構 築	2
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ 研 究 Ⅳ	公 共 政 策 と ガ バ ナ ン ス	2
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ 研 究 Ⅴ	国 際 社 会 と 国 際 法	2
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ 研 究 Ⅵ	開 発 と グ ロー バ ル イ シ ュ ー	2
	ワ ー ル ド ヒ ュ マ ニ テ ィ ズ 研 究 Ⅰ	グ ロー バ ル ヒ ス ト リ ー 研 究	2
	ワ ー ル ド ヒ ュ マ ニ テ ィ ィ ズ 研 究 Ⅱ	多 言 語 多 文 化 研 究	2
	ワ ー ル ド ヒ ュ マ ニ テ ィ ィ ズ 研 究 Ⅲ	宗 教 ・ 民 族 ・ エ ス ニ シ テ ィ	2
	ワ ー ル ド ヒ ュ マ ニ テ ィ ィ ズ 研 究 Ⅳ	世 界 文 化 と 表 象	2
	ワ ー ル ド ヒ ュ マ ニ テ ィ ィ ズ 研 究 Ⅴ	世 界 文 学 と 批 評	2
	ワ ー ル ド ヒ ュ マ ニ テ ィ ィ ズ 研 究 Ⅵ	ト ラ ン ス レ ー シ ョ ン 研 究	2
	ワ ー ル ド ヒ ュ マ ニ テ ィ ィ ズ 研 究 Ⅶ	世 界 の 宗 教 と 文 化	2
	情 報 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 研 究 Ⅰ	ジャーナリズム・メディア論	2
	情 報 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 研 究 Ⅱ	情 報 シ ス テ ム と A I	2
	情 報 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 研 究 Ⅳ	ス ピ ー チ ・ プ レ ゼ ン テ ー シ ョ ン	2
	情 報 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 研 究 Ⅴ	英 語 通 訳 ス キ ル	2
	情 報 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 研 究 Ⅵ	中 国 語 通 訳 ス キ ル	2
研 究 指 導			

英語・英語教育コース（英語教授法（TESOL）プログラム）

授 業 科 目 名		サ ブ タ イ ト ル	単 位 数
専門教育科目	英語教育法研究Ⅰ	Second Language Acquisition	2
	英語教育法研究Ⅱ	Second Language Teaching	2
	英語教育法研究Ⅲ	Materials Development and Classroom Dynamics	2
	英語教育法研究Ⅳ	Teaching English to Young Learners	2
	英語教育法研究Ⅴ	Action Research 1	2
	英語教育法研究Ⅵ	Action Research 2	2
	英語教育法研究Ⅶ	Curriculum Design 1	2
	英語教育法研究Ⅷ	Curriculum Design 2	2
	英語教育法研究Ⅸ	Learner Autonomy	2
	英語教育法研究Ⅹ	Cross-Cultural Communication	2

授 業 科 目 名		サ ブ タ イ ト ル	単 位 数
専門教育科目	英語教育法研究Ⅺ	Discourse Analysis	2
	英語教育法研究Ⅻ	Sociocultural Theory	2
	英語教育法研究Ⅼ	Introduction to Action Research Methods	2
	英語教育法研究Ⅽ	Teaching and Learning 2nd Language Vocabulary	2
	英語教育法研究Ⅾ	Qualitative Research Methods	2
	英語教育法研究Ⅿ	Introduction to Language Learning Motivation	2
	英語教育法研究ⅰ	Introduction to Quantitative Research Methods	2
	英 語 学 研 究 Ⅰ	Phonetics & Phonology	2
	英 語 学 研 究 Ⅱ	Morphology & Syntax	2
研 究 指 導			

博士後期課程

〈各分野共通〉

授 業 科 目 名	単位数	1期	2期	担 当 教 員	修 得 単 位 数	備 考
特 殊 講 義 Ⅰ	2	○		指 導 教 授 (個別指導)	2科目／4単位	・ 原則として1年次に履修
特 殊 講 義 Ⅱ	2		○			
研 究 指 導	0	○	○			・ 博士候補資格未取得者が每学期履修
論 文 指 導	0	○	○			・ 博士候補資格取得者が每学期履修

VI 教員略歴一覧

専任教員略歴

亀山 郁夫 学 長 文学修士	●専門／ロシア文学、ロシア文化論、表象文化論 ●研究テーマ／ロシアアヴァンギャルド芸術、スターリン時代文化論、ドストエフスキーを中心とする19世紀ロシア文学、ロシア音楽論、現代日本文学 ●略歴／東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業。同大学大学院外国語学研究科スラブ系言語専攻修了後、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。天理大学外国語学部助手、講師、助教授、同志社大学法学部助教授、東京外国語大学助教授、教授、同大学長を経て、2013年4月より本学教授、学長に就任。ワールドリベラルアーツセンター長。
早津 恵美子 教 授 博士(文学)	●専門／日本語学、現代日本語文法研究 ●研究テーマ／使役を中心とするヴォイス、文法と語彙の相関 ●略歴／京都大学教育学部教育心理学専攻卒業、東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(日本専攻)修了、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(言語学専攻)研究指導認定退学後、2006年学位取得。東京外国語大学外国語学部講師、助教授、教授、同大学大学院総合国際学研究院教授、同国際日本学研究院教授を経て、2020年4月本学教授、国際コミュニケーション研究科長に就任。
伊藤 達也 教 授 Ph.D.(言語科学)	●専門／フランス言語学、意味論 ●研究テーマ／日仏対照言語学、語彙意味論、意味構築における語彙と文脈の相互作用、翻訳論 ●略歴／慶應義塾大学文学部文学科フランス文学専攻卒、パリ第3大学に塾派遣交換留学生として留学、パリ第7大学言語学科修士課程修了、慶應義塾大学大学院修士課程仏語仏文学専攻修了。フランス政府給費留学生。パリ第7大学言語学科 DEA、パリ第10大学言語学科博士課程修了。2003年パリ第10大学言語科学博士。2005年本学助教授に就任、2016年より教授。2018-2019年ブリュッセル自由大学文学翻訳コミュニケーション学部招聘講師。2019年バウムアカデミック勲章(シュヴァリエ)。国際教育連携推進機構機構長。学長特別補佐。2022-2023年愛知県立大学非常勤講師。2022年4月よりフランス語学科長(2027年4月よりフランス・ヨーロッパ学科長(予定))。
上田 功 教 授 博士(文学)	●専門／音声学・音韻論 ●研究テーマ／音韻獲得と構音障害、成人の外国語訛り、商標登録と音韻 ●略歴／大阪外国語大学大学院外国語学研究科英語学専攻修了。京都大学博士(文学)。静岡大学助教授、大阪外国語大学教授、米国インディアナ大学言語学科・音声言語医学科客員研究員(フルブライト交換研究員)、大阪大学大学院言語文化研究科教授を経て、2018年4月本学外国語学部 英米語学科教授。言語教育開発センター長、英米語学科長。大阪大学名誉教授、大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合大学院小児発達学研究科招聘教授。
梅垣 昌子 教 授 博士(文学)	●専門／アメリカ文学、アメリカ文化 ●研究テーマ／アメリカ南部文学、モダニズム、文学とアダプテーション ●略歴／京都大学大学院文学研究科英語学英米文学専攻博士後期課程単位取得後退学。京都大学博士(文学)。2009年、フォークナー研究所(サウスイーストミズーリ州立大学)およびミシシッピ大学派遣研究員。2014年より本学外国語学部英米語学科教授。副学長、教学マネジメント推進室長。
エリス 俊子 教 授 Ph.D.(文学)	●専門／文学 ●研究テーマ／日本近代詩、モダニズム ●略歴／東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専門課程修士課程修了。同総合文化研究科比較文学比較文化博士課程満期退学。Ph.D.(Monash University)。モナッシュ大学人文学部日本研究科・専任講師、東京大学大学院総合文化研究科・助教授、同教授、2021年4月本学教授、世界教養学部長を経て現在副学長。

大岩 昌子 教授 博士(学術)	●専門／音声学、第二言語習得 ●研究テーマ／言語のプロソディ習得、脳の言語機能 ●略歴／名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了。岡崎国立共同研究機構生理学研究 所統合生理研究施設講師(COE 非常勤研究員)などを経て、2001年本学外国語学部フ ランス語学科助教授に就任、2013年より本学教授。言語教育開発センター副センター長。
大橋 保明 教授 修士(教育学)	●専門／教育学、教育社会学 ●研究テーマ／コミュニティ・スクールの制度研究、防災教育・学習の事例研究 ●略歴／大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。名古屋女子大学文学部専 任講師、いわき明星大学人文学部准教授、福岡県立大学大学院等の非常勤講師を経て、 2012年本学准教授に就任、2020年より本学教授。教職センター長。
岡田 新 教授 法学修士	●専門／イギリス現代政治史 ●研究テーマ／自由党の再生と凋落 ●略歴／早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。名古屋大学大学院法学研究科博士前期課程修 了。大阪外国語大学外国語学部英語専攻助手／講師／准教授。大阪大学外国語学部教授。 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻長。大阪大学大学院言語文化研究科研究 科長。名古屋外国語大学外国語学部英米語専攻専攻長。
甲斐 清高 教授 博士(文学)	●専門／イギリス文学 ●研究テーマ／19世紀イギリス小説、イギリス文化、比較文学、物語論 ●略歴／京都大学文学部卒業(英語学英文学専攻)。京都大学大学院文学研究科修士課程修了(英 語学英米文学専攻)。英国ダラム大学英文科修了。京都大学大学院文学研究科博士後期課 程認定修了。2003年本学講師に就任、現在同大学教授。2022年3月まで教養教育推進センター 副センター長。2022年4月より同センター長。
川原 功司 教授 Ph.D. in Linguistics	●専門／統辞論、意味論、語用論 ●研究テーマ／究極的な目標は、人間言語に固有の回帰的統語演算能力の仕組みと、それがどうやって概念・ 意図システムと関わりを持つのかを比較生物学的な視点から解明すること。個別的には、原型 レキシコン仮説に基づく統辞構造や意味の分析、およびその語用論上の役割。 ●略歴／ワシントン大学言語学科留学(文部省短期留学推進制度)終了(2001年)。大阪大学文学部 英米文学英語学専修 修了(2002年)。大阪大学大学院文学研究科文化表現論英語学専 修 博士前期課程修了(2004年)。連合王国ヨーク大学言語学科 博士課程修了(2010年)。 2013年4月本学英米語学科准教授に就任、現在教授。
木村 茂雄 教授 修士(文学)	●専門／英語圏文学、ポストコロニアル研究、カルチュラル・スタディーズ ●研究テーマ／言語文化とグローバリゼーション ●略歴／東京大学文学部(語学文学)卒業、東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専門課程 修了、東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専門課程第1種博士課程退学、大阪 大学言語文化部助手、同講師、同助教授、同教授、大阪大学大学院言語文化研究科教授、 同研究科長、大阪大学マルチリンガル教育センター長、2020年4月本学教授に就任。2021年 4月より現代英語学科長。
Duane Kindt 教授 Ph.D.(応用言語学)	●専門／Language learning pedagogy, Classroom dynamics and materials design ●研究テーマ／Tools for increasing proficiency in speaking, A complex systems view of course design, Increasing autonomy with recorded conversations, computer learner corpora ●略歴／レスブリッジ大学卒業、SIT 大学院修士課程修了、パーミンガム大学大学院博士課程修了。 南山大学助手を経て、2001年本学現代国際学部講師就任。現在教授。
近藤 有美 教授 博士(学術)	●専門／日本語教育学、リメディアル教育 ●研究テーマ／社会につながる教育実践と学び、活動型日本語教育 ●略歴／名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程修了。啓明大 学校(韓国・大邱)国際学部日本学科招聘講師、長崎外国語大学国際コミュニケーション学 科特任講師を経て、2012年本学准教授に就任、2016年より教授。2026年4月より言語文化教 育研究センター長。

斎藤 弘子 教 授 文学修士 Master of Arts in Phonetics	●専 門／ 英語音声学、音韻論 ●研究テーマ／ 英語の変種の発音、発音変化、学習者の英語発音 ●略 歴／ 東京外国語大学外国語学部英米語学科卒業、同大学大学院外国語学研究科修士課程(ゲルマン系言語専攻・英語学)修了、英国ロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジ大学院音声学・言語学科修士課程修了。東京外国語大学外国語学部助手、講師、助／准教授、同大学大学院総合国際学研究院教授、副学長、名誉教授。2025年より本学外国語学部英米語学科教授。
佐藤 雄大 教 授 博士(学術)	●専 門／ ライティング、ヴィゴツキー心理学、グローバリズム ●研究テーマ／ 認知科学と言語教育(ヴィゴツキー心理学、学習科学)、CEFRと英語教育、共生社会と人権 ●略 歴／ 名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程修了。愛知県立高等学校の英語教諭、名古屋大学特任助教を経て、2013年に本学現代国際学部准教授に就任。2018年より教授となり、2026年から外国語学部英米語学科英語教育専攻所属となる。
佐取 美紀 教 授 修士(教育学) 博士(文学)	●専 門／ 第二言語習得、外国語教育、心理言語学 ●研究テーマ／ 外国語学習者の個人差に応じた学習法・指導法 ●略 歴／ 九州大学理学部化学科卒業。福岡教育大学大学院教育学研究科修士課程英語教育専攻修了。熊本大学社会文化科学研究科博士後期課程文化学(英語教授学領域)専攻修了。2020年より本学准教授に就任、現在教授。
鈴木 茂 教 授 (国際学修士)	●専 門／ 歴史学・ブラジル研究 ●研究テーマ／ ブラジルの黒人史、大西洋奴隷貿易、歴史教育 ●略 歴／ 東京外国語大学外国語学部卒業、東京外国語大学大学院地域研究研究科(修士課程)修了、一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程2年中退。東京外国語大学外国語大学助手、講師、同助教授を経て教授。組織改編によって大学院国際学研究院教授。2019年3月退職(名誉教授)後、同年4月、名古屋外国語大学世界共生学部教授に就任。2021年4月より同学部長。
田地野 彰 教 授 Ph.D.(言語学)	●専 門／ 教育言語学、英語教育 ●研究テーマ／ 言語教育へのシステムズアプローチ(EAP、教育文法、英語教授法開発など) ●略 歴／ 連合王国ランカスター大学大学院言語学・現代英語研究科博士課程修了。Ph.D.取得。京都大学国際学術言語教育センター教授(センター長)・大学院人間・環境学研究科教授を経て、2018年4月本学教授に就任。英米語学科長を経て、2022年4月より外国語学部長。京都大学名誉教授。一般社団法人大学英語教育学会(JACET)顧問。
中北 美千子 教 授 修士(文学) Ph.D. (コミュニケーション科学)	●専 門／ 日本語学、コミュニケーション科学 ●研究テーマ／ 話し言葉の理解課程、談話参加者のストラテジー、言語発達 ●略 歴／ 東京都立大学人文学部文学科国文学専攻卒業、日本女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻博士課程後期単位取得退学、テキサス大学ダラス校大学院認知・行動科学研究科博士課程修了。国立国語研究所 PD フェロー・非常勤研究員のほか、群馬大学、明海大学、中央学院大学、東京学芸大学、北里大学などの非常勤講師を経、2017年4月より、本学国際日本学科准教授に就任、現在教授。
長畑 明利 教 授 修士(文学)、MA	●専 門／ アメリカ文学・文化 ●研究テーマ／ エズラ・パウンド、モダニズム詩、革新的詩文学と翻訳、アメリカ文学における多文化社会の表象 ●略 歴／ 東京外国語大学外国語学部英米語科卒業。ニューヨーク州立大学オールバニー校英語学部修士課程修了。東京外国語大学外国語学研究科ゲルマン系言語専攻課程(修士課程、英語学)修了。名古屋大学総合言語センター講師、同助教授、同大学言語文化部助教授、同大学国際言語文化研究科助教授、同教授、同大学人文学研究科教授、副研究科長。2024年3月退職(名誉教授)後、同4月本学世界教養学部教授。
船越 達志 教 授 博士(文学)	●専 門／ 中国文学 ●研究テーマ／ 『紅樓夢』 ●略 歴／ 広島大学大学院文学研究科中国語学中国文学専攻博士後期課程修了。博士(文学)。1999年4月本学講師に就任、現在教授。2023年4月より中国語学科長。

真家 陽一 教 授	●専門／ 中国経済 ●研究テーマ／ 中国のマクロ経済および産業政策、日本企業の対中ビジネス戦略 ●略 歴／ 1985年青山学院大学経営学部卒業。銀行系シンクタンク等を経て、2001年日本貿易振興会（ジェトロ、現・日本貿易振興機構）入会。海外調査部中国北アジア課上席課長代理を経て、2004年4月北京事務所次長（調査担当）。2009年1月海外調査部中国北アジア課長。2014年4月より再度、調査担当次長として北京事務所に勤務。2016年9月より本学教授に就任。2022年4月より学生支援センター長。
松本 曜 教 授 Ph.D. in linguistics	●専門／ 意味論、認知言語学、及びそれとの関連で、形態論、文法論、語用論、英語学、日本語学、言語類型論 ●研究テーマ／ 1) 空間移動、状態変化、使役などを表す言語表現の性質、2) 語の意味と多義性、3) 動詞の意味と文法的性質など。 ●略 歴／ 上智大学外国語学研究科博士前期課程、スタンフォード大学大学院博士課程修了。明治学院大学文学部助教授、神戸大学人文学研究科教授、国立国語研究所教授などを経て、2025年より本学英米語学科教授。
八木 久美子 教 授 Ph.D.(宗教学)	●専門／ 宗教学、イスラム研究 ●研究テーマ／ 近現代のイスラム、アラブ世界の宗教 ●略 歴／ 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒業、東京大学大学院人文科学研究科修士課程（宗教学宗教史学専攻）修了、ハーバード大学文理大学院（宗教学専攻）修了、博士論文提出資格取得、2001年学位取得。東京外国語大学外国語学部助手、助教授、教授、同大学大学院総合国際学研究院教授を経て、2024年4月本学教授。東京外国語大学名誉教授。
楊 紅雲 教 授 博士(学術)	●専門／ 日本映画、中国映画、日中翻訳通訳 ●研究テーマ／ 日中映画産業、映像政策 ●略 歴／ 西安映画撮影所(中国) 合作業務担当・所長補佐。名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻博士後期課程修了、博士(学術)。名城大学、中京大学および本学の非常勤講師を経て、2022年4月より本学中国語学科教授に就任、現在に至る。
劉 綺紋 教 授 博士(言語文化学)	●専門／ 台湾語学、中国語学 ●研究テーマ／ 台湾語の認知的な研究 ●略 歴／ 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。大阪大学、平安女学院大学、岐阜経済大学などの非常勤講師を経て、2006年より本学助教授に就任、現在教授。
林 慶雲 教 授 M.B.A.	●専門／ 管理会計、国際財務管理 ●研究テーマ／ 企業結合とそれに関する財務、会計問題 ●略 歴／ Dalhousie 大学(カナダ)の Business School 修了。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程。名古屋大学経済学部助手、名古屋文理大学情報文化学部助教授を経て、2007年本学グローバルビジネス学科准教授に就任、2009年より教授。2023年4月よりグローバルビジネス学科長。
岩佐 一枝 准教授 博士(文学)	●専門／ 言語学、文献学、少数民族言語(彝語) ●研究テーマ／ 彝語現代方言の記述・分析、彝語文献の整理・解読 ●略 歴／ 神戸市外国語大学大学院にて修士号、博士号取得。中国中央民族大学大学院 博士課程(彝語系)にて彝語文献学を専攻。フランス高等研究実習院客員研究員、パリ第三大学大学院博士課程(言語学科)満期退学。神戸市外国語大学非常勤講師、フランス国立科学研究センター LACITO 研究員、日本学術振興会特別研究員 PD, RPD。2020年4月より本学准教授に就任。

Kevin Ottoson 准教授 EdD (Educational Leadership)	●専門／TESOL, Intercultural Competence, Collaborative Online International Learning (COIL) ●研究テーマ／Study Abroad, Intercultural Competence, COIL. ●略歴／南山大学、名古屋女子大学講師を経て、2022年4月本学英米語学科講師に就任。He holds an MA in TESOL from Nagoya University of Foreign Studies and an EdD in Educational Leadership from the University of New England. His research interests include study abroad, intercultural competence, and COIL.
近藤 行人 准教授 博士(文学)	●専門／日本語教育学 ●研究テーマ／異文化間レトリック研究、日本語教育実践研究、専門日本語教育 ●略歴／中京大学文学部心理学科卒業。名古屋大学国際言語文化研究科日本言語文化専攻にて修士課程を修了、博士(文学)。主な職歴はタシケント国立東洋学大学日本語講座講師、名古屋大学特任講師(在ウズベキスタン日本法教育研究センター)、名古屋学院大学及び名古屋大学非常勤講師、名古屋学院大学留学生別科講師等。2019年4月本学国際日本学科准教授に就任。
後藤 希望 准教授 修士(マス・コミュニケーション学)	●専門／メディア論、メディア史、メディアのコンテンツ分析 ●研究テーマ／メディア・イベントとスポーツ、オリンピックとナショナリズム、3.11とメディア・コンテンツ、NHKとデジタルコンテンツ、映像と音楽、ハリウッド映画の変遷：120年の歴史と日本人、SF 宇宙映画の変遷、ディズニー映画とジェンダー。 ●略歴／ECC 外語学院入社、金山校勤務、ECC 外語学院中部管区本部、教育課勤務、株式会社中日映画社入社、制作部勤務、名古屋外国語大学 TTSS 講師、名古屋外国語大学現代国際学部非常勤講師、2013年4月より本学専任勤務講師、同准教授。
斎藤 絢 准教授 博士(国際関係)	●専門／日韓比較文化、日韓関係、歌謡研究 ●研究テーマ／韓国における民衆歌謡の伝承性、集団空間における音の機能性、韓国労働歌謡、日韓大衆文化 ●略歴／日本大学大学院国際関係研究科博士後期課程修了。博士(国際関係)。韓国・新羅大学校助教授を経て、2015年4月本学外国語学部日本語学科(現、世界教養学部国際日本語学科)助教に就任、2019年4月より准教授。
Alessandro G. Gerevini 准教授 Ph.D.(学術)	●専門／現代日本文学 ●研究テーマ／現代日本文学、越境文学、翻訳論、比較文化、表象文化論、外国語教育 ●略歴／イタリア・ヴェネツィア大学東洋言語・東洋文学学科(日本語・日本文学専攻)卒業後、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻(表象文化論コース)博士課程修了。東京藝術大学助教、早稲田大学准教授等を経て、2020年本学准教授に就任、現在に至る。
鶴本 花織 准教授 博士(社会学)	●専門／日文化社会学、メディア、ジェンダー、日本研究 ●研究テーマ／まちづくり活動、災害ボランティア、日本の近代化、University of London ●略歴／国際基督教大学教養学部社会科学科卒業、サセックス大学大学院修士課程メディア・スタディーズ専攻修了、ロンドン大学大学院博士後期課程社会学専攻修了、慶応大学環境情報学部非常勤講師、早稲田大学国際教養学部非常勤講師、名古屋外国語大学現代国際学部専任講師を経て、2009年4月より名古屋外国語大学現代国際学部准教授に就任。
Simon J. Humphrey 准教授 M.Phil.(応用言語学) M.Phil.(教育学) M.A.(TEFL)	●専門／Applied Linguistics, Educational Psychology ●研究テーマ／Sociocultural Theory with a particular focus on how the tenets of activity theory, dynamic assessment, and cognitive mediation play out through the course of dialogical interaction. ●略歴／マセイ大学卒業、バーミンガム大学大学院 TEFL 修士課程修了、ケンブリッジ大学大学院英語学応用言語学博士課程修了、ケンブリッジ大学大学院教育学博士課程修了。名古屋外国語大学招聘教員を経て、2008年本学准教授に就任。

福島 みのり 准教授 博士(社会学)	●専門／韓国社会、社会学 ●研究テーマ／韓国の若者論(教育、労働、ジェンダー)、若者論の日韓比較、日本における K-カルチャーの受容 ●略歴／延世大学大学院社会学科博士課程修了(2005年、博士取得)。2006年より早稲田大学、立教大学、慶應義塾大学などで非常勤講師。2013年より常葉大学外国学部講師、准教授。2022年より名古屋外国語大学現代国際学部准教授。その他、韓国の教育専門誌『今日の教育』編集委員、現代韓国朝鮮学会理事、アジア研究基金理事など。
Jakub E. Marszalenko 准教授 博士(英語学・英語教育学)	●専門／通訳翻訳論 ●研究テーマ／司法通訳翻訳(法廷通訳翻訳)、日英の違いによる通訳翻訳の正確性への影響、通訳者の役割 ●略歴／ポーランド・ワルシャワ大学大学院東洋学研究所修士課程修了(日本語日本文化専攻)。大阪大学大学院人間科学研究科修士課程修了(グローバル人間学)。名古屋外国語大学国際コミュニケーション研究科博士後期課程修了(英語学・英語教育学)。2019年4月本学世界教養学部国際日本学科専任講師に就任、2024年4月より同学科准教授。

兼任講師(非常勤教員)略歴

浅野 輝子 兼任講師	●専門／司法・医療通訳論、通訳教育論 ●研究テーマ／自治体による医療通訳者養成と活用：〈あいち医療通訳システム〉検証と全国モデル構築 ●略歴／南山大学文学部英文学科卒業。ISS 同時通訳養成コース(3年)修了。フリーランス通訳として国際会議同時通訳、国賓、産業界トップの通訳を務める。名古屋地方裁判所、高等裁判所法廷通訳人。「あいち医療通訳システム」推進協議会副会長。医療通訳養成専門家会議委員。家庭裁判所調停委員を歴任。2008年度より本学助教授を経て教授就任。2019年4月より2021年3月まで本学特任教授。2018年4月より本学名誉教授。
Matthew T. Apple 兼任講師 Doctor of Education	●専門／Curriculum, Instruction, Technology, and Education in TESOL ●研究テーマ／L2 motivation, CALL, and intercultural communication competence ●略歴／Temple University (米国)にて Ed.D. 取得。姫路獨協大学常勤教師、同志社大学言語文化教育研究センター講師、国立奈良工業高等専門学校講師を経て、現在、立命館大学文学部教授。Matthew T. Apple is professor of international studies and English communication in the College of Letters, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan. He has an MFA (Creative Writing) from the University of Notre Dame, USA, and an MEd and EdD (Curriculum, Instruction, Technology, and Education in TESOL) from Temple University, USA. His SLA research interests include L2 motivation, CALL, and intercultural communication competence.
Lesley Ito 兼任講師 MSc in TEYL	●専門／Teaching English to Young Learners ●研究テーマ／Extensive reading for young learners, supported extensive reading, teaching grammar to young learners, bilingual and returnee English acquisition and retention ●略歴／Lesley Ito is a well-known teacher, teacher trainer, school owner, and award-winning materials writer based in Nagoya. She has taught in Japan for over 30 years and is the owner of LIXON Education and BIG BOW English Lab in Nagoya. She won "Best of JALT" in 2011 and 2020 and also the 2015 LLL Award in the Young Learner Category. Her MSc dissertation at Aston University on motivating young learners and extensive reading won the Collins Dictionary Award in 2018. Her ELT writing credits include teacher's guides, workbooks, online materials, and graded readers. Her research interests focus exclusively on young learners in Japan, specifically in the areas of extensive reading, teaching grammar, and helping returnees retain and build on acquired English language skills.

大野 欽司 兼任講師 博士(医学)	●専門／ データサイエンス、分子生物学、人類遺伝学、神経内科学 ●研究テーマ／ バイオメディカルデータサイエンス、神経筋接合部分子病態機構、パーキンソン病の腸脳相関、分子状水素の作用機構、超低周波変動微弱磁場の量子作用機構 ●略歴／ 名古屋大学医学部医学科卒業。国立名古屋病院研修医・神経内科医。名古屋大学大学院医学系研究科大学院博士課程修了後、日本学術振興会特別研究員。1993年から12年間米国メイヨークリニックリサーチフェロー・リサーチアソシエイト・アシスタントプロフェッサー。名古屋大学医学系研究科教授(2004年)・副研究科長(2009年)・副総長(2020年)。名古屋学芸大学管理栄養学部教授(2024年)・教養教育機構機構長(2026年)・副学長(2026年)。
籠宮 隆之 兼任講師 博士(学術)	●専門／ 音声学、コーパス言語学、感性情報処理 ●研究テーマ／ プロソディ、パラ言語情報、音声科学 ●略歴／ 東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻修士課程修了。神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士後期課程修了。国立国語研究所特別奨励研究員、産業技術総合研究所特別研究員、国立国語研究所特任助教等を経て、現在愛知淑徳大学健康医療科学部教授。
Hanh thi Nguyen 兼任講師 Ph.D, English (English Language and Linguistics)	●専門／ English Language and Linguistics ●研究テーマ／ Conversation Analysis, Interactional Competence, Classroom Discourse ●略歴／ University of Huế (ベトナム) 講師、University of Wisconsin-Madison (米国) 講師等を経て、University of Wisconsin-Madison にて Ph.D. 取得。現在、Hawaii Pacific University (米国) 教授。Hanh thi Nguyen is Professor of Applied Linguistics in the TESOL Program at Hawaii Pacific University and affiliate faculty member at the Department of Second Language Studies, University of Hawaii at Manoa. She received her PhD and MA in English Language and Linguistics from the University of Wisconsin-Madison, and her BA in Teaching English as a Foreign Language from Hue University, Vietnam. Her research interests are the development of interactional competence in a second or professional language, classroom discourse, learner identities, and Vietnamese applied linguistics.
佐藤 都喜子 兼任講師 Ph.D.(学術)	●専門／ 国際協力/国際開発、リプロダクティブヘルス、女性のエンパワメント ●研究テーマ／ 女性のエンパワメントと行動変容 ●略歴／ 津田塾大学国際関係学科入学、ミネソタ州立大学に編入・卒業。ハワイ州立大学大学院修士・博士課程修了。学術博士。米国立東西センター人口研究所奨学生、国際協力機構国際協力専門員などを経て、2013年4月本学教授に就任、副学長、国際教養学科長を経て、2025年4月より本学名誉教授。
柴田 直哉 兼任講師 Ed.D. in Teaching English to Speakers of Other Languages	●専門／ Teaching English to Speakers of Other Languages ●研究テーマ／ Second Language Writing, Curriculum Design, Materials Development, Content and Language Integrated Learning, Teacher Training ●略歴／ 名古屋外国語大学外国語学部英語教育学科卒業後、名古屋外国語大学大学院博士前期課程英語教授法(TESOL)コース修了。米国 Anaheim University Ed.D in TESOL コース修了。非常勤講師として愛知県内の高等学校や大学、名古屋外国語大学言語教育開発センター外国語担当専任講師を経て、大阪教育大学多文化教育系英語教育部門特任准教授。2024年より全国語学教育学会(JALT)名古屋・岐阜支部長、2025年よりヒューマニスティック英語教育研究会運営委員長。2024年 JALT Award for Early Career Excellence を受賞。Language Teaching, Relay Journal, Nagoya JALT Journal 等の学術誌や、Teaching and Learning English in Japanese Classrooms: Teachers' Perspectives (Cambridge Scholars Publishing)、Classroom Practice and Teacher Cognition: Lessons from the Classroom (Cambridge Scholars Publishing)、心を育てる英語授業、はじめました 英語教師たちの挑戦と実践(研究社)にて論文発表をしているだけではなく、JALT International Conference, JACET Convention, AAAL, SSLW 等、国内外問わず様々な学会で研究口頭発表をしている。

高村 美也子 兼任講師 博士(文学)	●専門／文化人類学、社会言語学、スワヒリ語 ●研究テーマ／スワヒリ農村社会埋葬文化、滞日アフリカ人の死の問題 ●略歴／中部大学国際関係学部国際文化学科卒業、大阪外国語大学大学院言語社会研究科地域言語社会専攻修士課程修了、名古屋大学大学院文学研究科人文学専攻博士前期課程修了、名古屋大学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程修了、現在南山大学人類学研究所研究員。フリーランスとしてスワヒリ語の裁判所等の通訳を務める。
遠山 千佳 兼任講師 博士(日本語学・日本語教育学)	●専門／日本語教育学、第二言語習得、多文化共生 ●研究テーマ／第二言語による談話の構築、多文化共生、国際共修、異文化間教育 ●略歴／お茶の水女子大学大学院博士前期課程修了・博士後期課程単位取得退学、名古屋外国語大学大学院博士号取得。神田外語大学留学生別科専任講師を経て、2006年より立命館大学法学部(日本語教育)、立命館大学大学院言語教育情報研究科に就任、2012年より同大学教授。
富安 由紀子 兼任講師 修士(芸術)	●専門／ユーザーインターフェイスデザイン、アイデンティティデザイン ●研究テーマ／道具のインターフェイスデザイン、ヒューマンセンタードデザイン、集団のアイデンティティとビジョンデザイン、ウェルビーイングとデザイン ●略歴／愛知県立芸術大学美術学部デザイン専攻卒業。同大学院美術研究科デザイン専攻修了。株式会社 GK グラフィックス勤務後、フリーランスとして tmgrf(トミグラフ) 主宰。デザイン実務と並行して2012年より名古屋学芸大学准教授、現在同大学教授、同大学院教授。
奈良 雅美 兼任講師 博士(学術)	●専門／国際社会学、国際関係学、ジェンダー論、NPO 論 ●研究テーマ／多文化社会におけるジェンダー ●略歴／松蔭女子学院大学英語学科卒業、大阪大学法学部卒業、神戸大学大学院国際協力研究科博士課程修了(博士(学術))。神戸大学大学院、関西学院大学、大東文化大学などにおいて非常勤講師。実践においてはアジア女性支援の NPO 法人代表理事、中間支援組織でコーディネーター、NPO 支援など。
平山 恵 兼任講師 M.A.	●専門／社会開発、保健政策、平和学 ●研究テーマ／トランジション・タウン運動、健康自立 ●略歴／School for International Training, 筑波大学人間総合科学研究科修了。世界保健機構、NGO アーユス、筑波大学社会医学系医学社会学研究室専任講師、結核研究所等勤務を経て2005年明治学院大学国際学部助教授。現在同大教授。
Daniel Hooper 兼任講師 Ph.D. (英語学・英語教育学)	●専門／TESOL, Educational Psychology, Sociocultural Theory ●研究テーマ／Group Dynamics, Communities of Practice, Learner Autonomy, Teacher and Learner Identity ●略歴／Daniel Hooper holds a PhD in English Linguistics and English Pedagogy from Nagoya University of Foreign Studies. He is currently an associate professor in the Department of English Communication at Tokyo Kasei University. He has been teaching in Japan for 18 years in a variety of contexts including primary/secondary schools, English conversation schools, and universities. His research interests include teacher and learner identity, reflective practice, self-access learning communities, and communities of practice.

Charles Browne 兼任講師 M.Ed. & Ed.D. in TESOL & Applied Linguistics	●専門／ EFL Teacher Training, 2nd language vocabulary acquisition, extensive reading, CALL, MALL ●研究テーマ／ EFL Teacher Training, 2nd language vocabulary acquisition, extensive reading, CALL, MALL ●略歴／ Dr. Browne is Professor of TESOL & Applied Linguistics at Meiji Gakuin University as well as Director of the English Department's MA and PhD Program and creator of their EFL teacher-training program. He has worked in Japan since 1985 and served as the first National Chairman of the JET Program from 1987-88. He has worked on a wide range of MEXT committees as well as conducted in-service training for BOE around the country. He is also a US State Department English Language Specialist, helping governments around the world with tailor-made teacher training programs that promote excellence in teaching. His research interests include 2nd language vocabulary acquisition, extensive reading, and pedagogically sound approaches to CALL and MALL.
Dominique Vola 兼任講師 Ph.D.(応用言語学)	●専門／ TESOL, learner autonomy, teacher education ●研究テーマ／ Learner autonomy, self-regulated learning, self-access learning, advising in language learning, psychology of language learning ●略歴／ She holds a PhD in applied linguistics focusing on learner autonomy from Victoria University of Wellington (New Zealand) and a Master of Education in TESOL from the State University of New York at Buffalo (US). She is an associate editor of Studies in Self-Access Learning (SiSAL) Journal and a co-managing editor of Relay Journal. She has experience in teaching in Japan, Madagascar, New Zealand, and the US. She has published articles in various journals including AILA Review. Her research interests include learner autonomy and psychology of language learning.
牧野 由美 兼任講師 修士(日本語・日本語教育学)	●専門／ 日本語教育学、日本語学 ●研究テーマ／ 日本語の発話行為 ●略歴／ 筑波大学第二学群日本語・日本文化学類卒業。名古屋外国語大学大学院博士前期課程修了。名古屋外国語大学大学院博士後期課程満期退学。2002年より本学講師。
山形 英郎 兼任講師 LL.M. 法学修士	●専門／ 国際法 ●研究テーマ／ 紛争の平和的解決、国連集団安全保障 ●略歴／ 静岡大学人文学部法学科卒業。京都大学大学院法学研究科博士課程満期退学(法学修士)。シェフィールド大学法学部修士課程修了(LL.M.)。岡山商科大学法経学部法学科講師、立命館大学国際関係学部助教授・教授、名古屋大学大学院国際開発研究科教授。2018年から2021年まで名古屋大学大学院国際開発研究科長を務め、2025年から名古屋大学名誉教授。

コース別教員一覧

コ ー ス	職 位	氏 名
学長	教 授	亀山 郁夫
研究科長	教 授	早津 恵美子
英語・英語教育コース		
(英語教育プログラム)		
代表	教 授	佐取 美紀
	教 授	上田 功
	教 授	梅垣 昌子
	教 授	岡田 新
	教 授	川原 功司
	教 授	斎藤 弘子
	教 授	田地野 彰
	教 授	松本 曜
	准教授	Simon J. Humphrey
(英語教授法 (TESOL) プログラム)		
代表	教 授	佐藤 雄大
	教 授	Duane Kindt
	准教授	Kevin Ottoson
日本語・日本語教育コース		
代表	准教授	近藤 行人
	教 授	エリス 俊子
	教 授	近藤 有美
	教 授	中北 美千子
	教 授	早津 恵美子
	准教授	齋藤 絢
	准教授	Jakub E. Marszalenko

コ ー ス	職 位	氏 名
グローバルコミュニケーションコース		
代表	教 授	鈴木 茂
	教 授	伊藤 達也
	教 授	大岩 昌子
	教 授	大橋 保明
	教 授	甲斐 清高
	教 授	木村 茂雄
	教 授	長畑 明利
	教 授	船越 達志
	教 授	真家 陽一
	教 授	八木 久美子
	教 授	楊 紅雲
	教 授	劉 綺紋
	教 授	林 慶雲
	准教授	Alessandro G. Gerevini
	准教授	岩佐 一枝
	准教授	後藤 希望
	准教授	鶴本 花織

※入学志願票の「希望する指導教授」欄には、志望するコース、プログラムの教員を記載すること

VII

授業科目の概要

博士前期課程

英語・英語教育コース（英語・英語教育プログラム）、
日本語・日本語教育コース、
グローバルコミュニケーションコース

【コース共通科目】

前期課程 1期	総合研究Ⅰ 研究方法論
複数教員制 佐取 美紀 他	

授業概要並びに到達目標

授業概要：

学術論文を書くためには、先行研究の理論や思考法を学修するだけでなく、自ら設定した研究テーマについて関連するデータを分析し論理的な構成に従って記述する力が必要である。本授業では、心得ておくべき基本的な研究姿勢、および修士論文作成の準備段階から執筆までの研究過程における基本的事項について学ぶ。

到達目標：

- ① 学術論文とは何かについて認識を深める。
- ② 研究における不正行為とは何かを理解する。
- ③ 適正な引用の仕方を会得する。
- ④ 学修した論文作成の手法を、自分の研究課題に応用することができる。

※ Google classroom に授業サイト「【院】研究方法論(2026-1 木1)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示等を使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。

授業計画

1. オリエンテーション・研究計画と研究倫理概要(佐取美紀)(対面)
2. 言語現象を記述/分析する際に必要な手続き(伊藤達也)(オンライン)
3. 文学研究の基礎(アメリカ文学を例に)(長畑明利)(対面)
4. 文学研究、詩の分析(エリス俊子)(オンライン)
5. グローバルヒストリーの方法(鈴木茂)(オンライン)
6. 国際開発領域のフィールド調査について(佐藤都喜子)(オンライン)
7. 文学研究、ポストコロニアル理論(木村茂雄)(対面)
8. 国際ビジネス領域、海外事業の展開(林慶雲)(対面)
9. 通訳翻訳の理論と役割(浅野輝子)(対面)
10. 応用言語学研究成果発表(田地野彰)(オンライン)
11. 日本語コミュニケーション研究について(中北美千子)(対面)
12. 第二言語習得について(佐取美紀)(対面)

13. 言語教育研究における量的研究(近藤行人)(対面)
14. 宗教研究における基礎概念(八木久美子)(オンライン)
15. 学生の研究発表とまとめ(佐取美紀)(オンライン)

本授業では、担当教員が許可した場合に限り、生成 AI の利用を許可する。

成績評価基準

○平常点65%、期末レポート35%

○期末レポート

《内容》2026年9月に行う「修士論文・課題研究の構想発表・中間発表会」の予稿集原稿に準じたもの。

《分量》構想発表をする学生はA4で2枚、中間発表をする学生はA4で4枚。

《評価基準》必ずしも自分の専門に近い人でない読み手に対して自分の研究内容を明瞭かつ興味深く伝えられているか。

教科書(参考書)

なし

前期課程 1期	総合研究Ⅱ 量的研究法
籠宮 隆之	

授業概要並びに到達目標

文科系の大学院生を対象とした、統計学の基礎講座である。統計学を理解するための最低限の数学の知識、分散や正規分布の概念、分散分析等の統計的検定について学ぶ。講義科目ではあるが、実習も交えて授業を進める予定である。

日本語教育学研究Ⅶ(データ分析法)と併せて受講することが望ましい。

なお、生成 AI については、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章を用いるなどの使い方は認めない。以上について第1回授業で詳しく説明する。

授業計画

以下の項目を中心に、受講者の進度に合わせて講義する。

(15コマ)

1. Σ 、 n 、変量など、統計学に必要な数学の基礎概念
2. 平均値、分散、標準偏差などの基本統計量
3. 正規分布と、その性質
4. データの標準化
5. 相関係数
6. 統計的検定の基礎
7. χ^2 乗検定
8. クロス表の χ^2 乗検定
9. 中心極限定理
10. 標準誤差と平均値の区間推定
11. 1 サンプルの t 検定
12. 対応のある 2 サンプルの t 検定
13. 対応のない 2 サンプルの t 検定

14. 分散分析(※オンライン形式で開講)
15. 多重比較

また、受講者各自の研究テーマに則った実習も行う予定である。

成績評価基準

レポートおよび平常点による。

なお、レポートに生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

教科書：

栗原伸一(2021)『入門 統計学(第2版) 検定から多変量解析・実験計画・ベイズ統計学まで』オーム社

参考書：

山田剛史・村井潤一郎(2004)『よくわかる心理統計』ミネルヴァ書房

山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎(2008)『R によるやさしい統計学』オーム社

清水優菜・山本光(2020)『研究に役立つ JASP によるデータ分析－頻度論的統計とベイズ統計を用いて－』コロナ社

前期課程 1期 総合研究Ⅲ 質的研究法

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

授業概要

質的研究は様々な方法で採取したことをデータとして研究が行われる。この講義では、質的研究の研究プロセスを概観する。受講生は観察、或いはインタビューにより簡単なデータを採取し、そのデータ分析を行って最終レポートを作成する。

なお、生成 AI について、例えば、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章をそのまま用いるなどのような使い方は認めない。

生成 AI を利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前のプロダクトと使用後のプロダクトを合わせて提出する。

以上について授業中に詳しく説明する。

授業計画

- 1回 質的研究のイメージとその射程
- 2回 質的研究における認識論
- 3回 リサーチクエスションを立てる
- 4回 先行研究を調べる
- 5回 観察
- 6回 インタビュー
- 7回 文献講読(1)インタビューの当事者性と他者性
インタビュー(2)データの処理文字化とトランスクリプション
- 8回 文献講読(2)フィールドワークの手法による研究論文を

読む

トライアングレーション

9回 文献講読(3)ライフストーリーに関する研究論文を読む
質的研究と倫理

10回 データの分析(1)データ分析の方法

11回 文献講読(4)SCAT を用いた研究論文を読む

12回 データ分析(2)演習

13回 質的研究を書く

14回 質的研究の評価

※第14回の講義は ZOOM によるオンラインで実施する。

15回 調査の報告

成績評価基準

授業参加 20%

授業内課題 30%

最終レポート 50%

生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成 AI を使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

教科書なし

参考書

太田裕子(2018)『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ』東京図書

大谷尚(2018)『質的研究の考え方－研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会

野村康(2018)『社会科学の考え方－認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会

他、随時講義内で指示する。

前期課程 1期 総合研究Ⅳ アカデミック・プレゼンテーション

大岩 昌子

授業概要並びに到達目標

授業テーマ：わかりやすい研究発表をするためのスライドデザインを知る。

授業概要：

1. 発表テーマを絞り、発表内容を企画する。
2. 発表の重点ポイントなどを意識しながら、全体の流れを論理的に組み立てる。
3. 2の設計を基に、PowerPoint を用いて実際の資料を作成する。この際、PowerPoint の使い方も学ぶ。
4. 表現方法などを踏まえつつ、作成した資料を用いた発表を実際に行う。

到達目標：9月に学内で行われる中間発表を見据え、自分の研究内容を伝えるためのプレゼンテーション用資料を作成し、効

果的に発表できる。

授業方法：教科書の内容を理解したうえで、パワーポイントなどの発表資料を作成、授業後半では、発表の訓練を行う。

ZOOM リンクなどの配布は Classroom から行うので、担当者からのメールを確認の上、自分で登録してください。
なお、本授業では生成 AI の使用は禁止されています。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 「わかりやすい」スライド構成にするために
- 第2回 「わかりやすいスライド」とはどのようなことか？
- 第3回 結論から全体の流れを考える
- 第4回 スライド情報を構造化する
- 第5回 スライドの情報をブラッシュアップする
- 第6回 わかりやすくするためのデザイン的手法
- 第7回 スライドを見やすくする配色の原則
- 第8回 伝えたいことを伝えるためのグラフの原則
- 第9回 伝わる表にするデザインの原則
- 第10回 図形や線を見映えよくする手法
- 第11回 伝えたいことを伝えるための写真とイラストの原則
- 第12回 「わかりやすい」スライドの評価軸
- 第13回 構造を把握できるスライドを入れる
- 第14回 意見交換(全面オンライン授業)
- 第15回 受講生による発表

成績評価基準

作成した資料と発表を総合的に評価する。

なお、生成 AI によって作成された課題を提出することはできません。

教科書(参考書)

教科書

宮野公樹『研究発表のためのスライドデザイン』講談社
各自、購入すること。

前期課程 2期 総合研究 V 比較教育社会学

大橋 保明

授業概要並びに到達目標

比較教育社会学研究は、国内および諸外国の教育制度や教育政策等の比較を通して現在の教育が内包する課題等を明らかにし、今後の教育改革の方向性を見出すことをめざしている。本授業では、「教育にかかわる比較研究」を共通テーマとして、各受講生の関心のある領域に沿って調査研究課題を設定し、最終的に研究論文を作成・提出する。また、調査研究の進め方や研究論文の書き方、研究倫理(生成 AI の利用を含む)等についても授業内で適宜指導する。

授業計画

【日進キャンパス／全員対面方式(第14回を除く)】

本授業は、全員参加のゼミ形式で実施する。

1. 講義内容の説明と計画(第1回)

①自己紹介(卒論概要および修論構想を含む)、シラバスの確認等

2. 比較教育社会学研究の基礎(第2回～第5回)

日本および諸外国の issue(論点)を比較・検討する。

①学校病理(いじめ、不登校、オルタナティブ教育)

②学歴社会(大学入試、国際学力調査)

③国際化社会(諸外国における教育改革、自律的学校運営、教育の質保証)

④労働と教育(ジェンダー、生涯学習)など

※取り上げる issue(論点)は、受講生の関心に応じて変更する。

3. 比較教育社会学研究の応用(第6回～第9回)

現代の issue(論点)を比較・検討する。

①災害後のコミュニティ復興と教育の役割

②各国の大学入試改革

③外国人児童生徒の教育課題

④諸外国におけるいじめと体罰

※取り上げる issue(論点)は、受講生の関心に応じて変更する。

4. 比較教育社会学研究の実際(第10回～第14回)

①調査研究課題の検討・決定(発表・コメント)

②～③調査研究の進捗状況報告(発表・質疑応答)

④～⑤調査研究の中間発表(発表・質疑応答・コメント)

※発表資料等はすべて Google Classroom 上に提出する。

5. 講義のまとめ(第15回)

①成果発表(プレゼンテーション・質疑応答・コメント)

※第14週の授業は、全学方針にもとづきオンライン方式となる。

初回授業の前日までに Google Classroom に招待するので、承認の上、ストリーム内の指示に従って受講すること。

成績評価基準

研究論文(16,000字程度)と成果発表プレゼンテーションを中心に、調査研究への取り組み姿勢や議論への貢献度等も勘案しながら、総合的に評価する。

教科書(参考書)

教科書：

なし(必要に応じて適宜資料を配布する)

参考書：

杉本均・南部広孝編『比較する比較教育学』東信堂、2023年

杉本均・南部広孝編『比較教育学原論』協同出版、2019年

原清治・山内乾史・杉本均編著『比較教育社会学へのイマージュ』学文社、2016年

長島啓記編『基礎から学ぶ比較教育学』学文社、2014年

二宮皓編『新版世界の学校』学事出版、2014年

日本比較教育学会編『比較教育学研究』(学術雑誌)、各年度

授業概要並びに到達目標

- ・20世紀以降の世界の多様な地域の宗教についていくつかの具体的な事例をととして、現代社会における宗教の意味や機能について理解することを目的とする。
- ・教科書の一つの章、あるいは指定された論文を一本、読んでいく予定である。毎回、ひとりの担当者に資料の内容について、発表してもらい、そのあと全員でディスカッションを行なう。
- ・授業の前に資料を丁寧に読み、ディスカッションで提起したい点について確認しておくこと、また授業後には、自らの研究テーマに引き付けて、その日の議論のポイントを整理しておくことが必要である。
- ・発表の際、情報の収集等において AI を用いた場合は、発表の場でそのことを明らかにすること、さらに AI によって得た情報の根拠を再確認したうえで分析の対象とすることが求められる。

授業計画

- 1)【オンライン】オリエンテーション
- 2)「序論」
- 3)「第1章 日常生活のイスラーム化」
- 4)「第2章 インドネシアの医療とイスラーム復興」
- 5)「第3章 聖と俗の混紡」
- 6)「第4章 悪魔祓い騒動からレジオナル運動まで」
- 7)「第5章 ロシアにおける伝統宗教の変容」
- 8)「第6章 気功にみる中国宗教の復興と変容」
- 9)「第7章 世界平和統一家庭連合(旧統一教会)の歴史と現状」
- 10)「第8章 「ゲルマン的ネオ・バイガン」は何に對抗しているのか」
- 11)「第9章 児童文学のなかの魔女像の変容とジェンダー」
- 12)「第10章 創造論、新無神論、フィクションと宗教」
- 13)「第11章 プロテスタントの爆発的拡大から半世紀」
- 14)【オンライン】「第12章 アメリカの「伝統」の新たな挑戦」
- 15)「第13章 「超スマート社会」の宗教」

成績評価基準

- ・成績は、授業での発表およびディスカッションへの貢献によって評価する。

教科書(参考書)

藤原聖子編『世俗化後のグローバル宗教事情』岩波書店、2018年

授業概要並びに到達目標

発信する情報を的確に「相手に伝える」、その情報を「相手の記憶に残す」、そして、その情報で「相手を動かす」ためには、言語の表現力、論理的な構築力に加えて視覚伝達の技術が有効である。講義と演習を通して、視覚伝達に特化した情報発信スキルを体験的に習得する。具体的には、伝達内容に応じた文字組、関係性の図解、画像の取り扱いなどを体験し、レジュメやスライドなど伝達媒体の構成ができるようになることを目標とする。プロフェッショナル向けのデザイン用ソフトウェアを使用し、各自の研究テーマに沿った制作作業を通して視覚伝達のスキルを獲得する。

*履修学生は Adobe 社の Illustrator と Photoshop をノート PC にインストールする必要がある(各自ノート PC を授業に持参すること)。

*本授業では生成 AI を活用した画像制作を体験する。その場合は担当教員の指示にしたがって生成 AI を利用し学ぶ。

授業計画

- 第1回 導入講義
- 第2回 Illustrator の基本操作①サンプルデータのテキスト編集
- 第3回 Illustrator の基本操作②サンプルデータのカラー編集
- 第4回 Illustrator の基本操作③サンプルデータの図形編集
- 第5回 研究レジュメの制作①書体の選定とタイトル制作
- 第6回 研究レジュメの制作②レイアウトの作成と色彩計画
- 第7回 研究レジュメの制作③研究内容の図解
- 第8回 研究レジュメの制作④複数の図を連携させる
- 第9回 研究レジュメの制作⑤ AI による画像生成
- 第10回 Photoshop の基本操作①サンプルデータのカラー調整
- 第11回 Photoshop の基本操作②サンプルデータのカラーニュ
- 第12回 研究発表スライドの表紙制作
- 第13回 研究ポスターの制作①画像とタイトルによる構成
- 第14回 研究ポスターの制作②スライドデータの配置(オンライン開講)
- 第15回 最終プレゼンテーション

成績評価基準

授業への発言や質疑による貢献度、課題の取り組みを平常点として評価する。

生成 AI が出力した文章・画像を用いた制作では、プロセスを含めて評価の対象とする。

教科書(参考書)

指定教科書は無い。授業内で適宜、資料や参考データを配布する。

前期課程 外国語コミュニケーションⅠ 1期 アカデミック・イングリッシュ

Simon J. Humphrey

授業概要並びに到達目標

This is a content-based course in spoken and written communication. For content, this course centres around the theme of language learning – a topic familiar to all students in this department – and aims at improving students' linguistic skills. Using language learning as a theme for discussion, students will not only improve and develop their fluency in English communication (reading and speaking), but also learn the skills necessary to acquire a second or third foreign language. This course will benefit teacher trainers as well as students who wish to be more effective communicators and (language) learners.

Students should spend 180 minutes outside of class reading, summarizing, and reviewing the reading material for their next class.

授業計画

This course will involve reading 8-10 pages per week as homework. Students should be prepared to take an active role in the class discussions, debating the relevant issues they have read about. Students will learn to read with a critical eye, as well as form opinions based on sound judgement. Finally, based the notes taken in class, students will select one area of interest and write a long report about it. Guidance and assistance will be provided throughout the writing process.

Week 1: Orientation

Weeks 2-12: Guidance for Report writing, Reading, Discussing, and Doing the 10 weekly reading worksheets

Week 13: Submit report drafts

Week 14: Edit reports, feedback, and guidance. The 14th week will be taught online.

Week 15: Submit report

Generative AI use is permitted under specific conditions. To use AI for warm-up activities, brainstorming, might be permissible but having AI to your write assignments or generate your presentation slides would not be permissible.

成績評価基準

- ・ Ten Weekly reflection sheets: 50%
- ・ Participation during in-class discussions: 20%, Report: 30%

教科書(参考書)

The Way of the Linguist: A Language Learning Odyssey' by Steve Kaufmann.

前期課程 外国語コミュニケーションⅡ 1期 アカデミック・フレンチ

伊藤 達也

授業概要並びに到達目標

このコースではフランス語であるいはフランス式に論文を作成する際に必要な基礎知識を身につけ、参加者が作成する修士論文がアカデミックな基準に適合させられるようなスキルを身につけることを目的とする。フランス語の知識があることが俾ましいが、毎回課題を必ず授業前に読み、分からないことを調べておくこと(2時間)。調べても分からないこと、授業を聞いて疑問をもったことは授業の最後に質問すること。また授業後に授業内容について復習することも必要である(1時間)。

ブレインストーミングの段階で生成 AI を使用することは許容されるが、生成 AI の出した答えのみを根拠とすることは禁止される。研究のソースを複数化し、自らの手で原典にあたり、自らの頭で分析し、自分の文体で執筆することが必要である。

授業計画

第1回：フランス式の論文作成について(導入)

第2回：章の構成と各部分の役割について

第3回：参考文献、注の役割について

第4回：モデル論文の分析(論文1)

第5回：モデル論文の分析(論文2)

第6回：参加者によるプレゼンテーション1(テーマと方法)

第7回：参加者によるプレゼンテーション2(テーマと方法)

第8回：先行研究との相互作用について

第9回：テーマ設定について

第10回：テーマに応じた分析と例の提示について

第11回：量的研究と質的研究について

第12回：参加者によるプレゼンテーション1(文体とグラフィック)

第13回：参加者によるプレゼンテーション2(文体とグラフィック)

第14回：結論の書き方について(オンライン)

第15回：まとめ

授業は、一般的な注意事項を説明したのちに、模範となる論文を分析的に読みながら、どのように論文が構成されなければならないかを学ぶ。授業を通じて、参加者自身が自らの研究課題を、モデルにしたがって構造化できるよう指導をする。最終課題提出において、修士論文の一部(主として序論と第1章と参考文献表)を提出してもらう。

成績評価基準

授業への参加(50%)と最終課題提出(50%)で評価する。

教科書(参考書)

参加者に応じて適宜コピーを配布する。

授業概要並びに到達目標

日本語非母語話者を対象とした4技能(読む、書く、聞く、話す)向上のための総合練習。課題レポート作成を通して、問題を発見し、資料・情報の収集、分類、検討を行い、自分の立場を明確にした上で、反論を踏まえ、論理的に文章を展開しながら論証するという過程を体験する。その過程で4技能の向上を目指す。最終目標は、院生にふさわしいレポートの作成と口頭発表である。なお、生成AIの利用については、本授業では全面的に禁止する。

授業計画

各自がテーマを設定し、そのテーマについて「知る」「練る」「調べる」「絞る」「組み立てる」「書く」「推敲する」「発表する」「振り返る」というプロセスを繰り返し、最終的な課題レポート作成、口頭発表につなげる。「練る」「絞る」「推敲する」のプロセスでは、他の受講生からの質問、感想、意見を募ったり、テーマについて検討したりするピア活動も行う。

- 第1回 ガイダンスとテーマの設定
- 第2回 構想の発表と検討、資料の要約
- 第3回 先行研究紹介発表
- 第4回 分析的読解とパラグラフ・ライティング
- 第5回 レポート・論文の構成と表現
- 第6回 情報の収集と整理・要約
- 第7回 アウトラインの作成と発表・検討
- 第8回 レポート・論文の序論の構成と内容の検討
- 第9回 発表・論文の表現、発表資料の作成
- 第10回 中間発表と相互フィードバック
- 第11回 レポート・論文の結論の構成と内容の検討
- 第12回 最終口頭発表の内容の検討
- 第13回 最終口頭発表
- 第14回 レポート初稿の相互フィードバック(オンライン)
- 第15回 レポート原稿の修正とコースのまとめ

※受講者の人数および状況、既有知識、研究領域、希望などを考慮して内容を変更する可能性がある。

成績評価基準

授業への参加度および課題への取り組み(40%)、最終レポート(30%)、口頭発表(30%)

教科書(参考書)

必要に応じてプリントを配付する。

授業概要並びに到達目標

国際社会で活躍できる通訳 基礎知識からトレーニング法まで

- 1: このクラスは、通訳の基礎理論を習得した後、実際に簡単な同時通訳ができるまでの能力を養成することを目的とした通訳入門コースである。
- 2: 国際化が進むにつれて、異文化コミュニケーターとしての通訳の需要は年々高まってきている。

このコース終了後、学生が国際会議などのボランティア通訳、ガイド通訳、エスコート通訳として活躍できるようになる事。

基本は日進キャンパスのE30同時通訳室にて対面で行いますが、14回目の授業はオンライン(Zoom)で行います。

尚、AIの利用については、第一週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

- 第1回 履修に関するガイダンス
- 第2回 Unit 1 アテンド・随行通訳／通訳の技術 第1章 通訳の仕事(通訳方式による分類)
- 第3回 Unit 2 パーティ・レセプション通訳／通訳の技術 形態による分類
- 第4回 Unit 3 工場見学通訳／通訳の技術 第2章 通訳と言語
- 第5回 Unit 4 ビジネス・商談通訳／通訳の技術 通訳と翻訳
- 第6回 Unit 5 芸能・スポーツ通訳／通訳の技術 第3章 通訳の過程
- 第7回 Unit 6 ニュースのボイスオーバー／通訳の技術 第4章 理解
- 第8回 Unit 7 コミュニティー通訳(司法通訳)／通訳の技術 第5章 ノートのとり方
- 第9回 Unit 8 医療通訳／通訳の技術 ノートテキング上級編
- 第10回 Unit 9 国際政治や軍事に関するトピックの通訳(会議通訳)／通訳の技術 第6章 再表現
- 第11回 Unit 10 Interview 対談通訳／通訳の技術 第7章 サイト・トランスレーション
- 第12回 Unit 11 セミナー・講演会通訳／通訳の技術 第8章 同時通訳
- 第13回 Unit 12 国際会議同時通訳／通訳の技術 第9章 英語学習への適用
- 第14回 通訳実践／通訳の技術 第10章 通訳者への道(オンライン)
- 第15回 まとめ

成績評価基準

授業中の通訳訓練、テキストの練習問題及び宿題の評価を全体の40%、通訳理論の理解、通訳実技で60%とする。

教科書(参考書)

プリント教材 及び 小松達也『通訳の技術』研究社(参考書)

前期課程 1期	外国語コミュニケーション VI 英語翻訳
------------	--------------------------------

Jakub E. Marszalenko

授業概要並びに到達目標

本科目では、「日本語」と「英語」という2言語を翻訳の対象とし、翻訳の方向(日英か英日か)によって、訳出というプロセスはどう変わるのか、それぞれの作業にはどのような注意点や難しさがあるのか、起点言語の背景にある文化、社会、歴史などが翻訳作業にどのような影響を与えうるかを探って、「翻訳」のプロセスをより深く考えます。また、履修生の第一言語(いわゆる「母語」)に関わらず、日本語と英語の両方において、言語に関する知識の向上を促す授業を目指します。なお、本科目では、さまざまなジャンルのテキストを取り扱うことになり、一般的なテキスト、文学、新聞記事、専門的な文章などの翻訳をチャレンジします。

授業計画

※本授業では、担当教員が許可した場合に限り、生成 AI を利用することもある。その際、担当教員の指示にしたがって生成 AI を利用して学ぶ。

01. 講義内容の説明と計画
02. 翻訳とは何か？翻訳の特徴と基礎知識
03. 一般文章の英日翻訳
04. 一般文章の日英翻訳
05. 翻訳課題 1
06. 新聞記事の英日翻訳
07. 新聞記事の日英翻訳
08. 翻訳課題 2
09. 文学の英日翻訳
10. 文学の日英翻訳
11. 翻訳課題 3
12. 専門的文章の英日翻訳
13. 専門的文章の日英翻訳
14. 翻訳課題 4 (オンライン)
15. まとめ

成績評価基準

翻訳課題：80% (4 課題×20%)

振り返りまたは期末発表(第15回の授業時)：15%

授業への参加度：5%

教科書(参考書)

なし

前期課程 1期	言語文化研究 I 文学批評
------------	-------------------------

長畑 明利

授業概要並びに到達目標

- ・文学批評の具体例を読み、そこに見られる批評(あるいは分析、コメント)の方法と、それが反映する文学観、世界観について検討する。批評理論ではなく批評の実践例を知ることが主たる目的とする。また、主として英語圏の例を取り上げる。批評が対象とする文学作品についても学ぶ。
- ・到達目標は、①文学批評の実践例を知ること、②文学批評の実践例が反映する文学観・世界観について解説ができること、③英語で書かれた批評テキストを分析し論じることができること、である。
- ・各回の授業は担当制で行う。担当者はリーディング課題の内容紹介、注、質問をまとめたハンドアウトを用意し、事前に他の受講者および教員と共有する。授業に際し、担当者はハンドアウトに基づく報告を行い、質問に答える。担当者以外の受講者はリーディング課題と担当者のハンドアウトを読んだ上で授業に出席し、議論に加わる。

授業計画

導入に続く14回の授業で以下のテキストを扱う計画である。和訳のあるものは英語テキストに加え、和訳も参考にする。なお、第14回はオンラインで実施する。

- 第1回 導入
- 第2回 T. S. Eliot, "Tradition and the Individual Talent"
- 第3回 Vladimir Propp, "Fairy Tale Transformations"
- 第4回 Cleanth Brooks, "Language of Paradox"
- 第5回 Leo Spitzer, "Explication de Texte Applied to Walt Whitman's 'Out of the Cradle Endlessly Rocking'"
- 第6回 Robert Scholes, "Semiotic Approaches to Joyce's 'Eveline'"
- 第7回 Stanley Fish, "Literature in the Reader: Affective Stylistics"
- 第8回 Jane Tompkins, "The Sentimental Power: Uncle Tom's Cabin and the Politics of Literary History"
- 第9回 Fredric Jameson, The Political Unconscious (excerpt)
- 第10回 Marjorie Perloff, "Happy World"
- 第11回 Walter Benn Michaels, The Gold Standard and the Logic of Naturalism (excerpt)
- 第12回 Edward Said, "Reflections on Exile"
- 第13回 Shoshana Felman, "Turning the Screw of interpretation"
- 第14回 Wayne E. Arnold, "Stylistic Perspective across Kenneth Fearing's Poetry"
- 第15回 Timothy Morton, "An Object-Oriented Defense of Poetry"

(*)取り上げるテキストを変更する場合がある。

成績評価基準

授業点60%、期末レポート40%。60点以上を合格とする。5回以上欠席した場合は単位取得の意思がないものとみなす。AI使用については第1回目の授業時に説明する。

教科書(参考書)

教科書：自主教材

参考書：

- ・ ジョナサン・カラー『批評理論』(岩波書店)
- ・ 大橋洋一(編)『現代批評理論のすべて』(新書館)
- ・ 大橋洋一・三原芳秋(編)『文学理論の名著50』(平凡社)
- ・ 大橋洋一『新文学入門：T・イーグルトン『文学とは何か』を読む』(岩波書店)
- ・ その他授業中に紹介する。

前期課程 2期 言語文化研究Ⅳ 応用言語学

田地野 彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

本授業では、学際性という特性に焦点をあてながら、応用言語学研究を俯瞰する。応用言語学研究成果を現実の外国語教育に活かす方法について検討する。事前学習には論文のまとめなどの作業で180分以上の準備が必要です。論文リストについては授業で紹介する予定。参考文献については「教科書欄」を参照のこと。

〈到達目標〉

応用言語学が対象とする各分野についての知識の習得をめざしながら、多角的視点からそれぞれの研究テーマについて理解を深めることをめざす。

〈授業方法〉

基本的に対面にて授業を行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)。なお、資料の配信についてはGoogle Classroomを使う予定です。

AIの利用については第1週のオリエンテーションで説明する

授業計画

- 1回 The scope of applied linguistics (応用言語学の研究領域)
- 2回 Linguistics and applied linguistics (応用言語学と言語学)
- 3回 Languages in the contemporary world (現代社会における英語の地位)
- 4回 Second language acquisition 1 : individual difference (第二言語習得 / 個人差)
- 5回 Second language acquisition 2 : motivation (第二言語習得 / 動機づけ)
- 6回 Language and communication (言語とコミュニケーション)
- 7回 Communicative competence (コミュニケーション能力)
- 8回 History of English language teaching (英語教育法の歴史)

- 9回 Practice of English language teaching (英語教育の実践法)
- 10回 Communicative approach (コミュニケーション・アプローチ)
- 11回 Discourse analysis (談話分析)
- 12回 Language and culture (言語と文化)
- 13回 Intercultural communication (異文化コミュニケーション)
- 14回 Bilingualism (バイリンガリズム)
- 15回 (Report Presentation 課題研究発表)

成績評価基準

授業への積極的参加と発表など(50%)、最終レポート(50%)

教科書(参考書)

〈教科書〉

山内 進(2003)『言語教育学入門 ―応用言語学を言語教育に活かす』大修館書店 978-4469244892

〈参考書〉

Johnson, K., and Johnson, H. (Eds.) (1998). *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics* Oxford: Blackwell.

Tajino, A. (Ed.) (2019). *A Systems Approach to Language Pedagogy*. Singapore: Springer Nature.

【専門教育科目】

前期課程 1期 英語学研究Ⅰ 音声学・音韻論

斎藤 弘子

授業概要並びに到達目標

授業概要：

国際共通語としての英語の視点から、英語発音教育の理論と実践について見ていく。Jennifer Jenkins が提唱した Lingua Franca Core (LFC) を説明し教育の場面で応用することを目的に書かれた Robin Walker の *Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca* (2010) を読み進めながら、LFC を使った 発音教育の可能性と限界について考察する。

★第14週は双方向のオンライン形式で授業を行う。

到達目標：

LFC の構成要素・理論的根拠・教育的意義を理解し、批判的に評価できるようになる。

そのために必要な英語音声学の知識を整理し、説明できるようになる。

この授業に参加するためには、音声学についての知識とテキストを読みこなす英語力は必須で、準備に180分程度の時間をかける必要がある。

なお、AIの使用については授業冒頭で指導者が説明する。

授業計画

第1回 オリエンテーション(本授業の進め方について)

- 第2回 これまでの「英語」、こんにちはの「英語」
- 第3回 国際共通語としての英語
- 第4回 英語の発音－変種、「訛り」、「通じる」英語とは
- 第5回 国際共通語としての英語発音とは？3つのアプローチ
- 第6回 J.Jenkins の Lingua Franca Core (LFC)
- 第7回 LFC の子音
- 第8回 LFC における子音連続
- 第9回 LFC の母音
- 第10回 核強勢の配置
- 第11回 LFC 外の項目と理解度への影響
- 第12回 ELF という考え方への批判
- 第13回 ELF 発音を教える利点
- 第14回 【オンライン】これまでに扱ってきた項目について学生からの質問・意見、ディスカッション
- 第15回 レポート執筆の準備

成績評価基準

成績は、以下のことを基準に評価します：

期末レポート 70%

授業のための準備 30%

教科書(参考書)

次の文献を読みます。

Robin Walker: Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca, Oxford University Press, 2010.

他に必要な参考書については、そのつど紹介します。

前期課程 2期	英語学研究Ⅱ 音声学・音韻論
------------	-------------------

斎藤 弘子

授業概要並びに到達目標

授業概要：

国際共通語としての英語の視点から英語発音教育の理論と実践について考える。Lingua Franca Core を実践に移す際の問題点と解決策を述べた Robin Walker の著書の後半を読み進めながら、LFC を使った 発音教育の可能性と限界について、具体例を参照する。

★第14週は双方向のオンライン形式で授業を行う。

到達目標：

LFC の構成要素・理論的根拠・教育的意義を理解し、発音教育について自分の考えを述べるができるようになる。
そのために必要な英語音声学の知識を整理し、説明できるようになる。

本授業は1期に開講した同一教員の英語学研究Ⅰ(音声学・音韻論)を踏まえたものであるが、1期の履修は必要条件ではない。但し、音声学についての知識とテキストを読みこなす英語力は必須で、準備に180分程度の時間をかける必要がある。

AI の使用については授業冒頭で指導者が説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(1期に見てきたことのまとめ)
- 第2回 国際共通語としての英語と Lingua Franca Core
- 第3回 LFC に向けられた現場の教員や音声学者からの様々な反応
- 第4回 教師が抱く懸念①～⑤
- 第5回 教師が抱く懸念⑥～⑩
- 第6回 国際共通語としての英語・LFC を教える利点①～③
- 第7回 国際共通語としての英語・LFC を教える利点④～⑥
- 第8回 ELF 発音を教えるために必要な知識(1)英語発音の実態
- 第9回 ELF 発音を教えるために必要な知識(2)分節音・超分節音の教授法
- 第10回 学習者の母語と ELF
- 第11回 日本語を母語とする学習者の場合
- 第12回 ○○語を母語とする学習者の場合(日本語以外の言語を取り上げる)
- 第13回 まとめ
- 第14回 【オンライン】これまでに扱ってきた項目について学生からの質問・意見、ディスカッション
- 第15回 レポート執筆の準備

成績評価基準

成績は、以下のことを基準に評価します：

期末レポート 70%

授業のための準備 30%

教科書(参考書)

次の文献を読みます。

Robin Walker: Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca, Oxford University Press, 2010.

他に必要な参考書については、そのつど紹介します。

前期課程 1期	英語学研究Ⅲ 統語論
------------	---------------

川原 功司

授業概要並びに到達目標

この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十分に準備してくることが求められる。最低でも、事前・事後学習として3時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。なお、生成 AI の利用は辞書等に準ずる形で認めるが、理解度を口頭で確認するため、「成果物」と本人の理解度に隔離が見られた場合、不正行為と見なす。

授業計画

- 第1回：イントロダクション

- 第2回：容認性判断と言語構造に関連する要因
- 第3回：言語構造を構成する要因
- 第4回：依存文法
- 第5回：品詞
- 第6回：局所性
- 第7回：局所性への制約
- 第8回：依存要素間の距離と文法
- 第9回：言語の形式理論
- 第10回：変換生成文法
- 第11回：移動と制約
- 第12回：言語と思考
- 第13回：言語と脳
- 第14回：言語とコミュニケーション
- 第15回：言語と知性

成績評価基準

毎回のチュートリアル の出来100% で評価する。

教科書(参考書)

以下のテキストを使用する(ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可。なお、Free Access なので電子版であれば無料

https://tedlab.mit.edu/tedlab_website/researchpapers/Syntax_Gibson_MITPress_2025.pdf)。

Edward A. F. Gibson. 2026. Syntax A Cognitive Appraoch. MIT Press.

前期課程
2期

英語学研究 IV
統語論

川原 功司

授業概要並びに到達目標

この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してくることが求められる。最低でも、事前・事後学習として3時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。また、生成 AI の使用は辞書に準ずる形で使用を認めるが、成果物と本人の理解に隔離が見られた場合には不正行為と見なす。

授業計画

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：集合
- 第3回：ラベル
- 第4回：部品
- 第5回：局所性
- 第6回：再帰性
- 第7回：Wh- 島の制約

- 第8回：名詞島の制約
- 第9回：名詞の移動
- 第10回：冠詞と名詞句の構造
- 第11回：主語制約
- 第12回：抜き出し領域における条件
- 第13回：フェイズとエッジ
- 第14回：メレオロジー
- 第15回：まとめ

成績評価基準

毎回のチュートリアル の出来100% で評価する。

教科書(参考書)

以下のテキストを使用する(ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可。なお、電子版は Open Access なので無料である)。

David Adger. 2025. Mereological Syntax. MIT Press.

前期課程
1期

英語学研究 V
意味論・語用論

松本 曜

授業概要並びに到達目標

言語学における意味論と語用論の入門の授業。今期は認知言語学の考え方に従って語や文の意味について学んでいく。科学的な目で言語を見ることができるようになることを目標とする。主に英語と日本語を例に考察する。毎回、異なるトピックを取り上げて講義する。同時に教科書を読み進めることによって理解を深める。教科書の各章にある練習問題を解き、また、授業で取り上げる内容に関連した小レポートを出してもらい、理解を確かめる。

生成 AI については、以下の使い方を認める。

- 課題に取り組むために、日本語と英語に関する資料収集のために用いる。
- 生成 AI の答えを批判的に評価するために用いる。

以下の使い方は認めない

- 課題やレポートについて生成 AI に答えてもらい、その文章をそのまま、あるいは修正して提出すること。

授業計画

- 第1回 意味論導入
- 第2回 ことばの意味と世界観
- 第3回 百科事典的知識
- 第4回 意味カテゴリー1 (古典的カテゴリー観とプロトタイプ)
- 第5回 意味カテゴリー2 (プロトタイプ)
- 第6回 特別授業 I：移動動詞の性質とその意味論(オンデマンド授業として実施する)

- 第7回 概念メタファー 1
- 第8回 概念メタファー 2
- 第9回 概念メトニミー
- 第10回 意味の変化と拡張
- 第11回 特別授業 II：移動動詞の性質と第二言語習得(オンデマンド授業として実施する)
- 第12回 多義性
- 第13回 多義性
- 第14回 まとめ(オンライン授業として実施する)
- 第15回 期末レポート解説

成績評価基準

出席15%、毎週の課題45%、期末レポート40% で計算する。

教科書(参考書)

『ファンダメンタル認知言語学』 野村益寛 著 ISBN: 978-4-89476-608-2 ひつじ書房
 『認知意味論』 松本曜 編 ISBN: 9784469212839 大修館書店

前期課程 2期	英語学研究 VI 意味論・語用論
------------	---------------------

松本 曜

授業概要並びに到達目標

言語学における意味論と語用論の入門の授業。認知言語学の考え方に従って文法と意味の関係について考察し、さらには文脈における意味について学んでいく。科学的な目で言語を見ることができるようになることを目標とする。主に英語と日本語を例に考察する。毎回、異なるトピックを取り上げて講義する。同時に教科書を読み進めることによって理解を深める。教科書の各章にある練習問題を解き、また、授業で取り上げる内容に関連した小レポートを出してもらい、理解を確かめる。

生成 AI については、以下の使い方を認める。

- 課題に取り組むために、日本語と英語に関する資料収集のために用いる。
- 生成 AI の答えを批判的に評価するために用いる。

以下の使い方は認めない

- 課題やレポートについて生成 AI に答えてもらい、その文章をそのまま、あるいは修正して提出すること。

授業計画

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 品詞と意味
- 第3回 コロケーション
- 第4回 構文の意味(二重目的語構文)
- 第5回 構文の意味(他動詞構文)
- 第6回 文法化と意味の希薄化
- 第7回 音象徴とオノマトペ

- 第8回 音象徴とオノマトペ(オンデマンド)
- 第9回 日英比較 動詞における語彙化 状態変化と使役
- 第10回 日英比較 動詞における語彙化 様態と経路
- 第11回 語用論入門 直示表現
- 第12回 発話行為
- 第13回 会話の含意と丁寧表現
- 第14回 まとめ(オンライン)
- 第15回 期末レポート解説

成績評価基準

出席15%、毎週の課題45%、期末レポート40% で計算する。

教科書(参考書)

『ファンダメンタル認知言語学』 野村益寛 著 ISBN: 978-4-89476-608-2 ひつじ書房
 『認知意味論』 松本曜 編 ISBN: 9784469212839 大修館書店

前期課程 英語学研究 VII 1期 心理言語学

上田 功

授業概要並びに到達目標

心理言語学は、名の示す通り心理学と言語学の分野横断的な研究領域ですが、通常は言語学研究者が検証すべき問題を提示して、それに対して心理学研究者が心理学的解釈と実験手法を提供します。心理言語学の領域は非常に広く、すべてをカバーすることはできませんが、この講義では、言語学のなかでの心理言語学の位置づけを見てから、具体的なトピックとして、幼児の言語獲得について、学んでいきます。具体的には、Scientific Americanaに掲載された、Breyne Arlene Moskowitz の The Acquisition of Language と Peter A. and Jill G. de Villiers の Early Language のいくつかの章を精読します。授業目的は言語獲得に関わる基本的な事実とその解釈・説明を考察することにあります。なお14週目はオンライン双方向授業です。また生成 AI については、疑問点や発展の問題を調べる時に補助的に利用してください。

授業計画

- 1 回目 The nature of language (1)
- 2 回目 The nature of language (2)
- 3 回目 Language and structure (1)
- 4 回目 Language and structure (2)
- 5 回目 Introduction
- 6 回目 Prerequisites for language, Caretaker speech, Correcting language
- 7 回目 The one-word stage, The two-word stage. Telegraphic speech
- 8 回目 Function words, Plurals, Negative sentences
- 9 回目 Semantics, Phonology, Phonetics, Abnormal language development

- 10回目 Rules
- 11回目 Relationships
- 12回目 Freedom of speech
- 13回目 Crucial experiences
- 14回目 Constraints on learning
- 15回目 Conclusion

成績評価基準

毎回受講者に輪番で上記文献の購読を指定する。またその発表を元に全員で議論をおこなう。以上の平常点で成績を評価する。

教科書(参考書)

プリントを用意する。

前期課程 2期	英語学研究Ⅷ 社会言語学
------------	-----------------

上田 功

授業概要並びに到達目標

言語研究は、記号体系としての構造を明らかにする一方で、社会の中での実際の言語使用にも目を向けなければならない。この講義では特にジェンダーと言語の関係の焦点を当て、男女の言語差を社会における女性の低い地位が反映したものと主張する Robin Lakoff のパイオニア的な論考を精読する。時間が許せば、これとは異なり、男女は言語において異なった下位グループに属し、男女の会話は異文化コミュニケーションであるという、Deborah Tannen のデュアルカルチャーアプローチを垣間見たいと思う。第14週は双方向オンラインで授業を実施する。なお生成 AI は発展的問題を調査する場合等に使用を許可する。

授業計画

- 1回目 Lakoff(総説1)
- 2回目 同 (総説2)
- 3回目 同 (総説3)
- 4回目 同 (語彙の性差1)
- 5回目 同 (語彙の性差2)
- 6回目 同 (音声と統語)
- 7回目 同 (呼称等)
- 8回目 同 (意味1)
- 9回目 同 (意味2)
- 10回目 同 (分析)
- 11回目 同 (結論)
- 12回目 Lakoff (2010)
- 13回目 Tannen (1)
- 14回目 Tannen (2)
- 15回目 Tannen (3)

成績評価基準

毎回、受講生に輪番で講読を指名する。その発表にもとづいて全員がディスカッションをおこなう。これらの授業への積極的な参加をもって成績を評価する。

教科書(参考書)

- Lakoff, R. (1971) Language and Women's Place
- Tannen, D. (1990) You just don't understand!

前期課程 1期	英語教育法研究Ⅰ 言語習得論
------------	-------------------

佐取 美紀

授業概要並びに到達目標

- ①英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得、学習者要因、伝達能力と言語技能、評価について、英語学と英語教育学の研究成果をふまえて、理論と実践の両面から研究を行う。具体的には、研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践への示唆を得る。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。
- ②第1回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンラインで行う。
- ③生成 AI の利用については、別途指示する。

授業計画

- 第1回 授業内容の説明と計画
- 第2回 研究方法(質的研究・量的研究・混合法)
- 第3回 言語習得(先行研究)
- 第4回 言語習得(研究結果)
- 第5回 言語習得(考察と課題)
- 第6回 学習者要因(先行研究)
- 第7回 学習者要因(研究結果)
- 第8回 学習者要因(考察と課題)
- 第9回 伝達能力と言語技能(先行研究)
- 第10回 伝達能力と言語技能(研究結果)
- 第11回 伝達能力と言語技能(考察と課題)
- 第12回 評価(先行研究)
- 第13回 評価(研究結果)
- 第14回 評価(考察と課題)
- 第15回 研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書(参考書)

教科書は使用しない。資料を配付する。
参考書については初回の授業で説明する。

前期課程 英語教育法研究Ⅱ 2期 教育方法論

佐取 美紀

授業概要並びに到達目標

- ①英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得過程、指導理論と指導法、伝達能力と4技能、テスト法について、英語学と英語教育学の成果をふまえて、教育方法論の研究を行う。具体的には、内外の研究論文、教育実践の研究論文を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践の課題解決に向けて研究成果の活用を検討する。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。
- ②第1回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンライン(Google Meetでの同時双方向型)で行う。受講登録をした受講生には大学の電子メールで授業の前日までにGoogle MeetのURLを連絡する。
- ③生成AIの利用については、別途指示する。

授業計画

- 第1回 授業内容の説明と計画
- 第2回 研究方法(理論研究、実験研究、実践研究)
- 第3回 言語習得過程(先行研究)
- 第4回 言語習得過程(研究結果の分析)
- 第5回 言語習得過程(研究成果の活用)
- 第6回 指導理論と指導法(先行研究)
- 第7回 指導理論と指導法(研究結果の分析)
- 第8回 指導理論と指導法(研究成果の活用)
- 第9回 伝達能力と4技能(先行研究)
- 第10回 伝達能力と4技能(研究結果の分析)
- 第11回 伝達能力と4技能(研究成果の活用)
- 第12回 テスト法(先行研究)
- 第13回 テスト法(研究結果の分析)
- 第14回 テスト法(研究成果の活用)
- 第15回 研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書(参考書)

教科書は使用しない。資料を配付する。

前期課程 英語教育法研究Ⅲ 1期 外国語学習理論Ⅰ

田地野 彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

講義では第二言語習得に関与する様々な要因について考究す

る。第二言語習得研究についての多様な研究成果を詳細に分析、解釈することにより、日本における外国語習得の現状理解、および生成AI・ICTを活用した学習法、今後の研究方法などについての理解を深めることを目的とする。授業は、基本的に対面で行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)

〈到達目標〉

第二言語習得関係の研究論文などを理論的、批判的に読むアカデミックな読解力を養成する。事前学習にはテキスト本文の内容読解、テキスト内容への批判的思考などで180分以上が必要となる。

AIの利用については第1週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

- 第1回 Language, Learning, and Teaching (1) Questions about SLA
- 第2回 Language, Learning, and Teaching (2) Language and Teaching
- 第3回 Language, Learning, and Teaching (3) Three Perspectives on SLA
- 第4回 First Language Acquisition (1) Behavioral Approach
- 第5回 First Language Acquisition (2) Nativist Approach
- 第6回 First Language Acquisition (3) Functional Approach and Issues in FLA
- 第7回 Age and Acquisition (1) The Critical Period Hypothesis
- 第8回 Age and Acquisition (2) Cognitive and Affective Considerations
- 第9回 Age and Acquisition (3) Linguistic Considerations
- 第10回 Human Learning (1) Fundamental Concepts in Language Learning
- 第11回 Human Learning (2) Language Aptitude
- 第12回 Human Learning (3) Learning Theories
- 第13回 Individual Differences (1) Learning Styles
- 第14回 Individual Differences (2) Learning Strategies
- 第15回 Individual Differences (3) Strategies-Based Instruction

成績評価基準

成績評価は発表と課題など(50%) および学期末レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

教科書

・Lightbown, P.M. & Spada, N. (2013) How Languages Are Learned. (OUP) ISBN-13: 978-0194541268

参考図書

- ・鈴木孝明・白畑知彦(2012)『ことばの習得－母語獲得と第二言語習得』(くろしお出版)ISBN978-4-87424-544-6
- ・新多了・馬場今日子(2016)『はじめての第二言語習得論講義』(大修館)ISBN978-4469246087

前期課程 英語教育法研究Ⅳ 2期 外国語学習理論2

田地野 彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

本授業では外国語学習に関わる諸要因を扱った研究を概観し、外国語学習研究の全体像について考究する。外国語学習論におけるこれまでの研究の歴史や概要についてまとめた論文や専門書を通して、基本的な概念を理解し、批判的思考力や読解力の育成をめざす。事前学習には論文の要旨作成などを含め180分以上が必要である。(参考文献は「教科書欄」に掲載。)

〈到達目標〉

英語教育・指導の観点から外国語学習に関する研究成果の活用についての理解を深める。

〈授業方法〉

基本的に対面にて授業を行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)。なお、資料の配信については Google Classroom を使う予定です。

AIの利用については第1週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

- 第1回 SLA 理論
- 第2回 SLA の研究方法
- 第3回 第二言語知識の本質
- 第4回 第二言語教室でのインタラクション
- 第5回 フォーカス・オン・フォーム
- 第6回 第二言語教室における社会文化理論
- 第7回 文法の習得
- 第8回 文法の習得(教育的示唆)
- 第9回 語彙の習得
- 第10回 発音の習得
- 第11回 語用知識の習得
- 第12回 ISLA の環境
- 第13回 個人差と ISLA
- 第14回 研究と教育実践のつながり
- 第15回 指導への示唆

成績評価基準

成績評価は、発表や課題など(50%)、および最終レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

〈教科書〉

佐野富士子ほか(2022)『学びの場での第二言語習得論』(開拓社) ISBN978-4-7589-2362-0

〈参考図書・資料〉

Ellis, R. (2015) Understanding Second Language Acquisition.

(OUP) ISBN-13: 978-0194422048

Loewen, S. (2020) Introduction to Instructed Second Language Acquisition (2nd ed.). Routledge. ISBN: 978-1138-67178-2

前期課程 英語圏文化研究Ⅰ 1期 アメリカの小説と文化

梅垣 昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーフアを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、フォークナーおよびフォークナーの影響を受けた作家たちの作品を精密に読み込むことにより、グローバル化時代における地域性および空間と場所の概念について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成をめざす。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

- 第1回 講義内容の説明と計画(※本授業における AI の使用方法については、初回授業で説明する。)
- 第2回 物語の構造分析1(19世紀アメリカ文学の系譜)
- 第3回 物語の構造分析2(20世紀アメリカ文学の系譜)
- 第4回 物語の構造分析3(モダニズムとポストモダニズム)
- 第5回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解1(The Country)
- 第6回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解2(The Village)
- 第7回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解3(The Wilderness)
- 第8回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解4(The Wasteland)
- 第9回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解5(The Middle Ground)
- 第10回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解6(Beyond)
- 第11回 フォークナーと文学批評1(フォークナーと日本1)
- 第12回 フォークナーと文学批評2(フォークナーと日本2)
- 第13回 フォークナーと文学批評3(フォークナーとラテンアメリカ)
- 第14回 フォークナーと文学批評4(フォークナーとヨーロッパ) →この回のみオンライン(ZOOM)で遠隔授業を行います
- 第15回 まとめと考察：研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表(40%)および3回のレポート課題(60%)により総合的に評価する。

教科書(参考書)

- 1) William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
- 2) 随時資料を配布する
- 3) 参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 2期	英語圏文化研究Ⅱ アメリカの小説と文化
------------	------------------------

梅垣 昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーファを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、小説家としてだけでなく、脚本家としても活躍したフォークナーの作品を精密に読み込むことにより、技術革新の時代における表現方法の可能性と多様性について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成を行う。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

- 第1回 講義内容の説明と計画(※本授業におけるAIの使用方法については、初回授業で説明する。)
- 第2回 アメリカ文学とナラトロジー1(モダニズムとポストモダニズム)
- 第3回 アメリカ文学とナラトロジー2(長編と短編)
- 第4回 アメリカ文学とナラトロジー3(映像作品)
- 第5回 作品の読解1(The Country) "Barn Burning"
- 第6回 作品の読解2(The Village) "Dry September"
- 第7回 作品の読解3(The Wilderness) "Lo!"
- 第8回 作品の読解4(The Wasteland) "Turnabout"
- 第9回 作品の読解5(The Middle Ground)
"Mountain Victory"
- 第10回 フォークナーとアメリカ南部:作品の読解6(Beyond)
"Carcassonne"
- 第11回 フォークナーと文学批評1 伝記的アプローチ(導入)
- 第12回 フォークナーと文学批評2 伝記的アプローチ(実践)
- 第13回 フォークナーと文学批評3 作品論(導入)
- 第14回 フォークナーと文学批評4 作品論(実践) →この回のみオンライン(ZOOM)で遠隔授業を行います
- 第15回 まとめと考察:研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表(40%)および期末レポートとその準備に向けた課題(60%)により総合的に評価する。

教科書(参考書)

- 1) William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
- 2) 随時資料を配布する
- 3) 参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 1期	英語圏文化研究Ⅲ イギリス文化論
------------	---------------------

岡田 新

授業概要並びに到達目標

20世紀初頭のイギリス現代史についての専門書を読む。
イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてディスカッションする。
google classroom で連絡を行う。
John Grigg Lloyd George The People's Champion 1902-1911を分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
疑問点をあげ、ディスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める。
辞書をひき、自分で読解する訓練なのでAIは使わないこと。

授業計画

- 1 introduction 授業の仕方 ウェールズとロイド・ジョージ
- 2 Background 19世紀末から20世紀初頭のロイド・ジョージ
- 3 講読と討論 Last Steps to Power
- 4 講読と討論 Extreme danger
- 5 講読と討論 War Cabinet
- 6 講読と討論 Conference at Calais
- 7 講読と討論 Crisis at Sea
- 8 講読と討論 America Comes in
- 9 講読と討論 Nivelle's Nemesis
- 10 講読と討論 Electoral Reform
- 11 講読と討論 Farming and Food
- 12 講読と討論 Honours
- 13 講読と討論 Haig gets His Way
- 14 講読と討論 New Appointment (オンライン授業)
- 15 講読と討論 Arthur Henderson and Neville Chamberlain

成績評価基準

平常点 50%
レポート 50%

教科書(参考書)

John Grigg Lloyd George The People's Champion 1902-1911
プリントで配布する。

授業概要並びに到達目標

20世紀初頭のイギリス現代史についての専門書を読む。
イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてディスカッションする。
google classroom で連絡を行う。
John Grigg Lloyd George The People's Champion 1902-1911を分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
疑問点をあげ、ディスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める。
辞書をひき、自分で読解する訓練なので AI は使わないこと。

授業計画

- 1 introduction 授業の仕方 ウェールズとロイド・ジョージ
- 2 Background 19世紀末から20世紀初頭のロイド・ジョージ
- 3 講読と討論 Last Steps to Power
- 4 講読と討論 Extreme danger
- 5 講読と討論 War Cabinet
- 6 講読と討論 Conference at Calais
- 7 講読と討論 Crisis at Sea
- 8 講読と討論 America Comes in
- 9 講読と討論 Nivelle's Nemesis
- 10 講読と討論 Electoral Reform
- 11 講読と討論 Farming and Food
- 12 講読と討論 Honours
- 13 講読と討論 Haig gets His Way
- 14 講読と討論 New Appointment (オンライン授業)
- 15 講読と討論 Arthur Henderson and Neville Chamberlain

成績評価基準

平常点 50%
レポート 50%

教科書(参考書)

John Grigg Lloyd George The People's Champion 1902-191
プリントで配布する。

授業概要並びに到達目標

The focus will be on New Zealand culture. It will be divided into three sections dealing with the History, Language, and Culture of New Zealand.
Students should spend 180 minutes outside of class reading, summarizing, and reviewing the reading material for their next class.
Students will be expected to take an active participation in the

weekly discussions.

授業計画

The whole course will be taught in English only. There will be an assessment every 5th week.

During this course, the students will become acquainted with the History, Language, and Culture of New Zealand (See below for details). Students should be prepared to take an active role in class discussions, debating the relevant issues they have read about. Students will learn to read with a critical eye, as well as form opinions based on sound judgement. Guidance and assistance will be provided throughout the semester.

Generative AI use is permitted under specific conditions. To use AI for warm-up activities, brainstorming, might be permissible but having AI to your write assignments or generate your presentation slides would not be permissible.

Week 1: Orientation

Weeks 2-12: Guidance for Report writing, Reading, Discussing, and Doing the weekly reading worksheets

Week 14: Class will be online via Zoom

Week 15: Feedback

The course is divided into 3 sections with a report for each:

History:

Māori settlement

European discovery

Treaty of Waitangi

British control

Presentation/Discussion/Assignment

Language:

Māori Language revival

New Zealand English: accent

New Zealand English: vocabulary

TV, Film and literature

Presentation/Discussion/Assignment

Culture:

British influence

Māori customs

Sports

Lifestyle

Presentation/Discussion/Assignment.

成績評価基準

・ Assignments: 75%

・ Participation during in-class discussions: 25%

教科書(参考書)

None: All materials will be provided by the lecturer.

前期課程 1期	日本語学研究Ⅰ 日本語学概論
------------	-------------------

早津 恵美子

授業概要並びに到達目標

- 授業概要：日本語の文法構造について概観したあと、具体的な言語現象について考察する。
- 到達目標：日本語の文法現象について「規則・きまり」を受動的に覚えるというのではなく、自らが使用し接する日本語について実態を内省しながら考えることによって、そこにひそむ法則的なものを見いだしていく力を身につける。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語学概論(2026-1)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示等に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom への招待メールを送るので各自でアクセスして準備すること。
- 本授業では、担当教員が許可した場合に限り、生成 AI の利用を許可する。具体的な使用の範囲については、授業中に適宜説明する。

授業計画

- 1) 授業の説明と計画
- 2) 語彙と文法(日本語学の分野)
- 3) 単語・文・文法
- 4) 単語の語彙的な性質と文法的(形態論的)な性質
- 5) 単語の語彙的な性質と文法的(構文論的)な性質
- 6) 文の内部構造(1. 要素の単語の形態的な構造)
- 7) 文の内部構造(2. 構文機能的な構造)
- 8) 文の内部構造(3. 構文意味的な構造)
- 9) 文の内部構造(4. 題述機能的な構造、「は」と「が」)
- 10) 品詞と文の成分
- 11) 品詞の転成
- 12) 小説の文章の分析(1. 要素の単語の形態)
- 13) 小説の文章の分析(2. 文の成分)
- 14) 小説の文章の分析(3. 単文・重文・複文)
※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献(50%)、レポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 1期(集中)	日本語学研究Ⅱ 日本語談話研究
----------------	--------------------

遠山 千佳

授業概要並びに到達目標

(授業概要)

本授業では、談話分析、会話分析の理論と分析を主要テーマとする。具体的には、言語学的観点、語用論、発話行為などから、文より大きい単位である「談話」の理解の仕方を学び、会話のしくみなど会話分析から社会文化的な相互行為の理解の仕方を学ぶ。その上で、実際に収集した会話データを分析し、発表を行う。(到達目標)

1. 談話分析の基本的な理論を理解し、実際の談話を分析できる。
2. 会話文席の基本的な理論を理解し、実際の相互行為を分析できる。
3. 理論や文献講読を通して、研究課題を設定し、実際のデータを分析してまとめることができる。

*生成 AI の使用について

生成 AI について、次のような使い方は認めない。

・課題の理解や整理をするために資料を要約したり翻訳したりする。

・課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章を用いる。

以上について第1回授業ガイダンスで詳しく説明する。

授業計画

- 第1回 授業の概要(剽窃、生成 AI についてを含む)、談話分析(1)語用論、結束性、一貫性
- 第2回 談話分析(2)データ収集
- 第3回 談話分析(3)分析方法
- 第4回 談話分析(4)語用論、ポライトネス理論
- 第5回 談話分析(5)発話行為論
- 第6回 談話分析(6)会話の含意
- 第7回 会話分析(1)会話のしくみ
- 第8回 会話分析(2)聞き手からのフィードバック
- 第9回 談話分析、会話分析のまとめ
- 第10回 【演習】データの分析(1)
- 第11回 【演習】データの分析(2)
- 第12回 【演習】データの分析(3)
- 第13回 研究発表
- 第14回 研究発表
- 第15回 全体のまとめ

成績評価基準

課題 30%

全体の討議及びグループ活動等への参加度 30%

発表 40%

*生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

資料を配布する。

参考図書

デボラ・カメロン(林宅男監訳)(2012)『話し言葉の談話分析』ひつじ書房

山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現－日本語語用論入門』明治書院

高木智世・細田由利・森田笑(2016)『会話分析の基礎』ひつじ書房

前期課程 日本語学研究 Ⅲ 1期 日本語音声学・音韻論

中北 美千子

授業概要並びに到達目標

話し言葉の分析や音声を刺激とした実験に関心のある学生を対象として、音声学および音韻論の基礎知識と、実際に音声信号を分析するための基礎的な技術を身につけてもらうことを目標とする。

人間の音声産出のメカニズム、物理的な信号としての音声の特徴、日本語話者の音声知覚の特性など、日本語の話し言葉の物理的側面と心理的側面について、要点を概説する。また、音響信号分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行う。受講生は各自ノートPC持参のこと(音声分析のフリーソフト Praat が使えるもの)。

◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第1回授業までに履修登録者の NUFS メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。

◆受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整します。

AI 使用の可否については授業時に指示します。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：発声の仕組み
- 第3回：日本語の母音
- 第4回：調音の仕組みと日本語の子音
- 第5回：音声記号
- 第6回：音声と音韻
- 第7回：確認テスト1(母音と子音)
- 第8回：音声信号の特性(PC持参)
- 第9回：音声分析のための基礎知識(母音と子音)(PC持参)
- 第10回：音声分析のための基礎知識(スペクトログラム)(PC持参)
- 第11回：アクセントの型(PC持参)
- 第12回：複合語のアクセント(PC持参)
- 第13回：イントネーション(PC持参)
- 第14回：(オンライン)確認テスト2(アクセントとイントネーション)
- 第15回：まとめ

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する。

確認テスト1・2(50%)

授業貢献度(50%)

教科書(参考書)

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

前期課程 日本語学研究 V 2期 日本語学特論

中北 美千子

授業概要並びに到達目標

日本語の文法現象や語用論的現象が話し言葉においてどのような音声の特徴をもって実現されているかを観察するための多様な視点と手法を学ぶことを目標とする。話し言葉の分析や音声刺激を使った実験に必要な技術の基礎を学び、演習や文献講読を行う。また、音響分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行うので、受講生は各自ノートPC持参のこと(音声分析のフリーソフト Praat が使えるもの)。

◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第1回授業までに履修登録者の NUFS メールに招待を送ります。

第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。

◆受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整します。

AI 使用の可否については授業時に指示します。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
文献購読準備
- 第2回：発話機能・文末表現・文末イントネーション(PC持参)
- 第3回：文献講読(ノイズ・非流暢性)
- 第4回：文献講読(フィラーの役割)
- 第5回：文献講読(フィラーの諸々)
- 第6回：文献講読(その他)
- 第7回：文献講読(話し言葉のデータ収集方法)
- 第8回：話し言葉のデータ収集方法検討
- 第9回：話し言葉のデータ収集準備
- 第10回：話し言葉の分析演習(ピッチ曲線)
- 第11回：話し言葉の分析演習(その他)
- 第12回：分析結果中間報告
- 第13回：分析結果発表
- 第14回：(オンライン)分析についてディスカッション
- 第15回：まとめと振り返り

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する。

分析結果発表(50%)

授業貢献度(50%)

教科書(参考書)

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

前期課程 1期	日本語学研究 VI 日本語文法論
------------	---------------------

早津 恵美子

授業概要並びに到達目標

- 授業概要：語彙と文法(構文論と形態論)とが関わる様々な現象を確認し、語彙と文法をつなぐ要としてのカテゴリカルな意味について詳説し参加者と議論する。
- 到達目標：語彙の研究と教育においても文法の研究と教育においてもカテゴリカルな意味の理解が重要であることを具体的な現象の分析を通じて身につける。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語文法論(2026-1)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom への招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。
- 本授業では、担当教員が許可した場合に限り、生成 AI の利用を許可する。具体的な使用の範囲については、授業中に適宜説明する。

授業計画

内容は以下のような予定である。ただし、参加者との相談によって微調整することがある。

- 1) ガイダンス：授業の説明と計画
 - 2) 単語の語彙的な意味
 - 3) 単語の文法的な意味
 - 4) 単語のカテゴリカルな意味
 - 5) 文法的な意味とカテゴリカルな意味
 - 6) 構文論と形態論
 - 7) 単語の形態論的な性質(命題的)とカテゴリカルな意味
 - 8) 単語の形態論的な性質(陳述的)とカテゴリカルな意味
 - 9) 単語の構文論的な性質とカテゴリカルな意味
 - 10) 単語の多義性とカテゴリカルな意味
 - 11) 語彙的な意味の多側面性とカテゴリカルな意味
 - 12) 単語の類義性とカテゴリカルな意味
 - 13) 単語の多義性とカテゴリカルな意味
 - 14) 複合語とカテゴリカルな意味
- ※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献(50%)、レポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 2期	日本語学研究 VIII 日本語語彙論
------------	-----------------------

早津 恵美子

授業概要並びに到達目標

- 授業概要：単語には語彙的な性質と文法的な性質があり、単語は語彙・文法的な単位である。そのことについて文献を購読し議論するとともに、具体的にいくつかの単語(多義語、類義語)をとりあげて確認する。また参加者の調査・分析、相互の議論によって理解を深める。
- 到達目標：日本語の語彙の性質について内省力や理解力が深まる。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンラインで行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語語彙論(2026-2)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom への招待メールを送るので各自でアクセスして準備すること。
- 本授業では、担当教員が許可した場合に限り、生成 AI の利用を許可する。具体的な使用の範囲については授業中に適宜説明する。

授業計画

- 1) ガイダンス：授業の説明と計画
 - 2) 語彙・文法的な単位としての単語
 - 3) 単語の語彙的な意味と文法的な意味(動詞)
 - 4) 単語の語彙的な意味と文法的な意味(形容詞)
 - 5) 文献1の購読(前半)
 - 6) 文献1の購読(後半)
 - 7) 多義語の分析(1)
 - 8) 多義語の分析(2)
 - 9) 文献2の購読(前半)
 - 10) 文献2の購読(後半)
 - 11) 類義語の分析(1)
 - 12) 類義語の分析(2)
 - 13) 参加者による分析結果の発表と議論(1)
 - 14) 参加者による分析結果の発表と議論(2)
- ※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業中の分担発表と議論への貢献(50%)、学期末のレポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 日本語教育学研究Ⅰ 1期 第二言語習得論

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

I期では、認知的アプローチに基づく第二言語習得研究を概観し、日本語教育研究者としての高度な研究能力養成を目指す。日本語教育の基礎科学として位置付けられる第二言語習得研究と日本語教育実践とのつながりについても受講生と議論して考えていく。

授業では、言語習得観、第一言語の影響、IIOモデル、個人差要因、教室習得研究について扱う。それぞれの分野における研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに、研究手法や教育実践についての示唆を得る。

なお、生成AIについて、例えば、課題回答の作成時に生成AIが出力した文章をそのまま用いるなどのような使い方は認めない。

生成AIを利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前のプロダクトと使用後のプロダクトを合わせて提出する。

以上について授業中に詳しく説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
SLA研究の歴史意義
- 第2回 母語習得に関する2つの理論：原理とパラメーターの
アプローチと用法基盤モデル
- 第3回 SLAにおける第一言語の影響(1)
- 第4回 SLAにおける第一言語の影響(2)
- 第5回 KrashenのモニターモデルからIIOモデルへ
- 第6回 個人差要因 年齢
- 第7回 個人差要因 適性
- 第8回 個人差要因 学習スタイル、学習ストラテジー、ビリーフ
- 第9回 個人差要因 動機づけ
- 第10回 教室におけるSLA(1)文法
- 第11回 教室におけるSLA(2)Focus on form
- 第12回 教室におけるSLA(3)語彙
- 第13回 教室におけるSLA(4)CBIとCLIL
- 第14回 SLA研究の方法
※第14回の講義はZOOMによるオンライン双方向形式で実施します。
- 第15回 まとめと振り返り

成績評価基準

授業参加度(30%)、授業内課題・発表(40%)、レポート(30%)

生成AIが出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成AIを使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

参考書

※特定の教科書は使用しないが、以下の書籍を参考書とする。
小柳かおる(2021)『日本語教師のための新しい言語習得概論(改訂版)』スリーエーネットワーク

鈴木孝明・白畑智彦(2012)『言葉の習得：母語獲得と第二言語習得』くろしお出版

Shawn Loewen(2022)『学びの場での第二言語習得論』佐野富士子、齋藤英敏、長崎陸子他(訳)、開拓社

前期課程 日本語教育学研究Ⅱ 2期 第二言語習得論

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

第二言語習得研究においては多くが「認知」的な研究である。しかし、近年は第二言語習得研究の分野でも社会的転回が提唱され、言語学習の社会的側面を捉えることができるようになった。このような流れの中で、第二言語習得においても非認知的な視点を持った理論、実践、研究が求められている。本講義では、第二言語習得における社会的転回により台頭してきた社会文化的アプローチ、複雑系理論、アイデンティティ、生態学的アプローチなどについて理解を深め、それぞれの領域における研究の展開について議論する。

授業の一部では、論文講読を行う。担当箇所について各自が内容の要点と論点を提示したレジメを作成し、議論する。

なお、生成AIが出力した文章をそのまま用いるなどの使い方は認めない。

生成AIを利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前と使用後のプロダクトを合わせて提出する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
第二言語習得研究における社会的転回
- 第2回 第二言語習得研究における社会的視点
- 第3回 第二言語習得と生態学的アプローチ(1)
- 第4回 第二言語習得と生態学的アプローチ(2)
- 第5回 第二言語習得と生態学的アプローチ(3)
- 第6回 第二言語習得と複雑系理論(1)
- 第7回 第二言語習得と複雑系理論(2)
- 第8回 第二言語習得と複雑系理論(3)
- 第9回 第二言語習得と社会文化的アプローチ(1)
- 第10回 第二言語習得と社会文化的アプローチ(2)
- 第11回 第二言語習得と社会文化的アプローチ(3)
- 第12回 第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(1)
- 第13回 第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(2)
- 第14回 第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(3)
※第14回はZOOMによるオンライン双方向形式で実施します。

第15回 社会的転回後の第二言語習得研究

成績評価基準

授業参加(30%)、授業内課題・発表(40%)、期末レポート(30%)

生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成 AI を使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

参考書

Block, D (2003) The social Turn in Second Language Acquisition
Edinburgh University press.

Atkinson, D. (Ed). (2011) Alternative approaches to second language acquisition. Routledge.

馬場今日子・新多丁(2020)『はじめての第二言語習得論講義：英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

績判定と報告・有用性・波及効果

- 5回 テストを作る (1) テスト方針の決定、テストデザインの決定、テスト細目表、問題案の作成、問題案の検討、実施要項作成
- 6回 パフォーマンステスト (1) タスク(ロールプレイとスピーチ)
- 7回 パフォーマンステスト (2) 評価基準
- 8回 言語能力の指標 CEFR・JF スタンダード
- 9回 関連論文講読 CEFR に関する関連論文
- 10回 関連論文講読 Can-do Statements に関する評価
- 11回 パフォーマンステストの実施と評価
- 12回 テストを作る (2) テストの問題例：文法・語彙・文字のテスト
- 13回 テストを作る (3) テストの問題例：読解テスト・聴解テスト
- 14回 関連論文講読 評価者特性による評価のずれ
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
- 15回 テストを作る (4) テストをテストする

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、課題(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成 AI を使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

教科書なし

参考書：

- ・近藤ブラウン妃美(2012)『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
- ・村上京子他(2013)『テストを作る』スリーエーネットワーク
- ・国際交流基金(2011)『学習を評価する』国際交流基金
- ・野口裕之・大隅敦子(2014)『テストングの基礎理論』研究社

前期課程 1期	日本語教育学研究 III 日本語教育評価法
------------	---------------------------------

近藤 行人

授業概要並びに到達目標**【授業概要】**

日本語学習を評価することは、日本語学習の成果や学習者の成長を何らかの物差しで測ることである。この授業では、教育現場の実務において必要な評価の基礎知識と評価の実際についての様々な問題を取り上げる。学習者の学びを適切に評価するための手法を学び、どうすれば有用性の高い評価ができるのか、その手続きや実際の評価を通して検討し、その手法を修得する。

【到達目標】

日本語教育の評価に関する基礎的な知識を身に付け、実際の教育現場における評価を実施することができるようになる。

【準備学習】

講師から課される課題の取り組みなど、授業外でも他の履修者と協働して準備するなどの学習が求められる。

なお、生成 AI を利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前のプロダクトと使用後のプロダクトを合わせて提出する。

以上について授業中に詳しく説明する。

授業計画

- 1回 オリエンテーション 評価のイメージ
- 2回 教育評価についての基礎知識 (1) 診断的評価、形成的評価、総括的評価、目標基準テスト・集団準拠テスト、相対的評価・絶対的評価
- 3回 教育評価についての基礎知識 (2) コミュニケーション能力
- 4回 教育評価についての基礎知識 (3) シラバスの役割・成

前期課程 2期	日本語教育学研究 IV 日本語教育評価法
------------	--------------------------------

近藤 行人

授業概要並びに到達目標**【概要】**

II期では、対話や協働を扱う評価や社会文化的アプローチによる評価、教室を離れた評価などの様々な「新しい評価」とされる文献を講読する。講読する文献は基本的には講師が選ぶが、受講者の希望等により、取り上げる内容を調整し、興味関心に沿った論文を講読することもある。

【準備学習】

発表準備等や、取り上げる論文を読むため、毎回1～2時間程

度の準備を要する。受講者が準備する資料に基づいて教室活動を行うので、分担内容に責任を持つようにすること。

なお、生成 AI について、例えば、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章をそのまま用いるなどのような使い方は認めない。

生成 AI を利用した場合は、何にどのように使用したか、使用前のプロダクトと使用後のプロダクトを合わせて提出する。

以上について授業中に詳しく説明する。

授業計画

- 1 回 オリエンテーション
- 2 回 文献講読「アセスメントの歴史と最近の動向」
- 3 回 文献講読「CEFRにおける評価とアセスメント」
- 4 回 文献講読「ピアラーニングとアセスメント」
- 5 回 文献講読「ポートフォリオアセスメント」(1)
- 6 回 文献講読「ポートフォリオアセスメント」(2)
- 7 回 文献講読「ジャーナルアプローチとアセスメント」
- 8 回 文献講読「CEFR-CV における仲介」
- 9 回 文献講読「CEFR-CV における仲介を扱った研究論文」
- 10 回 文献講読「対話的アセスメントの実践研究」(1)
- 11 回 文献講読「対話的アセスメントの実践研究」(2)
- 12 回 文献講読「外国人とのやりとりの経験は日本人の言語使用の意識を変えるか」
- 13 回 文献講読「学生の評価観を理解する」
- 14 回 文献講読「学習につながる自己評価－「生活のための日本語」教育の可能性－」
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
- 15 回 まとめ 各自の研究の発表(調査、結果)、相互フィードバック

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、担当箇所の発表(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。また、生成 AI を使用した場合は、使用状況について必ず報告すること。このルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

教科書なし

参考書

- ・佐藤慎二・熊谷由里他(2010)『アセスメントと日本語教育 新し評価の理論と実践』くろしお出版
- ・宇佐美洋(編)(2015)『「評価」を持って街に出よう「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』くろしお出版

前期課程 1 期 日本語教育学研究 V 日本語教育実践研究

近藤 有美

授業概要並びに到達目標

本授業では、近年教育全般で注目を集めている「対話」に焦点を当て、ことばの教育における「対話」の重要性について、その本質を理解することを目指す。そのため、本授業では、「対話」に焦点を当てた教育の論考を講読し、それらをもとにクラスでディスカッションを行う。

課題として論文を読み、Google Classroom に「疑問点」「ディスカッションしたい内容」等を授業前にアップロードしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容についても目を通し、授業でディスカッションできるよう準備しておくことが求められる。

論文講読、ディスカッション内容の検討等、180分程度の事前準備を必要とする授業である。

※生成 AI の利用については、第 1 週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

〈授業形態〉

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

第 1 回 コースのオリエンテーション／教育観に関するディスカッション

第 2 回 第 1 章：なぜ今対話なのか 〈内容理解〉

第 3 回 第 1 章：なぜ今対話なのか 〈クラスディスカッション〉

第 4 回 第 1 章：なぜ今対話なのか 〈まとめ〉

第 5 回 第 2 章：対話のためのテーマとは何か 〈内容理解〉

第 6 回 第 2 章：対話のためのテーマとは何か 〈クラスディスカッション〉

第 7 回 第 2 章：対話のためのテーマとは何か 〈まとめ〉

第 8 回 第 3 章：対話をデザインする 〈内容理解〉

第 9 回 第 3 章：対話をデザインする 〈クラスディスカッション〉

第10回 第 3 章：対話をデザインする 〈まとめ〉

第11回 第 4 章：対話をするこことばの市民へ 〈内容理解〉

第12回 第 4 章：対話をするこことばの市民へ 〈クラスディスカッション〉

第13回 第 4 章：対話をするこことばの市民へ 〈まとめ〉

第14回 〈オンライン〉著者との対話セッション

第15回 クラスディスカッション「学習者主体と言語教育」／まとめ

成績評価基準

論文講読課題(20%)、発表(30%)、ディスカッションへの参加・貢献(30%)、レポート(20%)

教科書(参考書)

細川英雄(2019)『対話をデザインするー伝わるとはどういうことか』ちくま新書

※その他、参考文献に関しては授業内で紹介する。

前期課程 2期	日本語教育学研究 VI 日本語教育実践研究
------------	--------------------------

近藤 有美

授業概要並びに到達目標

〈授業概要・到達目標〉

2019年の入管法の改正、日本語教育推進に関する法律の公布・施行以降、日本語教育を取り巻く環境は大きく変化している。その後のパンデミックが国内外の日本語教育に与えた影響も大きい。また、機械翻訳など人工知能のめざましい発展は、言語教育のみならず教育全体に「学びの意義」を問いかけているようにも思われる。このような変化の中、言語教育は、「何のために教えるのか」を考える必要に迫られている。本授業では、「ことばの教育は何を目指すのか」に焦点をあてた論考を講読し、「何のために教えるのか」をクラス全体で議論する。最終的に、各自が自分の目指す日本語教育について言語化できることを目標とする。

※生成 AI の利用については、第 1 週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

〈授業形態・準備学習等〉

講読課題として論文を読み、Google Classroom に疑問点、ディスカッションしたい内容等を授業前にアップしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容についても目を通し、授業でのディスカッションに向けて準備しておくこと。これらに180分程度の事前準備を必要とする。

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

- 第1回 コースのオリエンテーション／これまで受けてきた言語教育の振り返り
- 第2回 第1章：言語文化教育のはじまりと革新(内容理解)
- 第3回 第1章：言語文化教育のはじまりと革新(クラスディスカッション)
- 第4回 第2章：文化は教えられるか：見える／見えない文化と相互文化性のダイナミズム(内容理解)
- 第5回 第2章：文化は教えられるか：見える／見えない文化と相互文化性のダイナミズム(クラスディスカッション)
- 第6回 第3章：対話はことばの教育に何をもたらすか：ともに生きる社会における「かかわることば」とその対話環境づくりへ(内容理解)

- 第7回 第3章：対話はことばの教育に何をもたらすか：ともに生きる社会における「かかわることば」とその対話環境づくりへ(クラスディスカッション)
- 第8回 第4章：社会的行為主体としての「私」：日本語教育と日本研究を結ぶもの(内容理解)
- 第9回 第4章：社会的行為主体としての「私」：日本語教育と日本研究を結ぶもの(クラスディスカッション)
- 第10回 第5章：ことばの市民という生き方：市民性形成とことばの教育(内容理解)
- 第11回 第5章：ことばの市民という生き方：市民性形成とことばの教育(クラスディスカッション)
- 第12回 第7章：欧州評議会における言語政策と教育実践の意味(内容理解)
- 第13回 第7章：欧州評議会における言語政策と教育実践の意味(クラスディスカッション)
- 第14回 〈オンライン〉著者との対話セッション
- 第15回 著者との対話セッションを終えて(クラスディスカッション)／総括

成績評価基準

講読課題(20%)、発表(30%)、ディスカッションへの参加・貢献(30%)、レポート(20%)

教科書(参考書)

細川英雄(2022)『対話することばの市民ーCEFRの思想から言語教育の未来へ』ココ出版

※参考文献に関しては、必要に応じて授業で紹介する。

前期課程 2期	日本語教育学研究 VII データ分析法
------------	------------------------

籠宮 隆之

授業概要並びに到達目標

総合研究Ⅱ(量的研究法)に引き続き、文科系の大学院生を対象とした、統計学の授業である。

本講座では、フリーの統計ソフトを用いた統計処理を学ぶ。使用する統計ソフトは「R」または「JASP」を予定しているが、受講生の要望により柔軟に対応する。

さらに、多変量解析を用いたデータ解析手法についても学ぶ。講義科目ではあるが、コンピュータを用いた実習形式を交えて授業を進める予定である。

なお、総合研究Ⅱ(量的研究法)と併せて受講することが望ましい。

また、生成 AI については、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章を用いるなどの使い方は認めない。以上について第1回授業で詳しく説明する。

授業計画

以下の項目について、受講者の進度と関心に合わせ、取捨選択しながら授業を進める。

(15コマ)

1. 総合研究Ⅱ(量的研究法)の復習(記述統計)
2. 総合研究Ⅱ(量的研究法)の復習(統計的検定)
3. 二元配置分散分析
4. 相関係数の有意性検定と統計的検定における効果量
5. 統計ソフト R または JASP の基本的な使い方(プログラム言語の基礎概念を含む)
6. 統計ソフト R または JASP を用いた統計的検定(t 検定)
7. 統計ソフト R または JASP を用いた統計的検定(分散分析と多重比較)
8. 回帰分析の基礎
9. 統計ソフト R または JASP を用いた回帰分析(単回帰分析、重回帰分析、変数選択)
10. 統計ソフト R または JASP を用いた様々な回帰分析(非線形回帰分析)
11. 統計ソフト R または JASP を用いた多変量解析(主成分分析)
12. 統計ソフト R または JASP を用いた多変量解析(因子分析)
13. 統計ソフト R または JASP を用いた多変量解析(判別分析)
14. 受講者自身の研究テーマに則った実習 1(※オンライン形式で開講)
15. 受講者自身の研究テーマに則った実習 2

成績評価基準

受講者各自の研究テーマに則って統計的な分析を行ったレポートにより評価する。

なお、生成 AI が出力した文章・成果物をそのまま用いる行為は一切認めないこのルールに違反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

教科書：

栗原伸一(2021)『入門 統計学(第2版)検定から多変量解析・実験計画・ベイズ統計学まで』、オーム社

参考書：

山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎(2008)『R によるやさしい統計学』、オーム社

金明哲(2007)『R によるデータサイエンスーデータ解析の基礎から最新手法まで』、森北出版

清水優菜・山本光(2020)『研究に役立つ JASP によるデータ分析ー頻度論的統計とベイズ統計を用いてー』、コロナ社

前期課程 日本文化研究Ⅰ 1期 日本文化論

齋藤 絢

授業概要並びに到達目標

【授業概要並びに到達目標】

本講義は国際文化論を手法とし、文化理論の基礎と理論の発展過程について学ぶことを目的とする。特に「文化接触」「文化変

容」の理論については東アジア地域の文化関係を主体に社会的課題点を挙げ、日本と他の国・地域に跨る文化的諸問題について考察をおこなう。

【授業方法】

- ・使用ツール：Google classroom
- ・講義、文献購読、ディスカッションを中心として講義を進めていく。
- ・生成 AI について、次のような使い方は認めない。例えば、課題の理解や整理をするために資料を要約する、課題回答の作成時に生成 AI が出力した文章を用いるなど。

授業計画

第1回 授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景

第2～4回 文化的諸要素に関する概念

- ①文化の概念
- ②文化概念に関する文献講読－1
- ③文化概念に関する文献後続－2

第5回 「ことばと文化」「言語と文化」(3) 文献紹介、ディスカッション 文化の視野を広げる

第6回 文献講読(1) 第2章「国際関係における文化」国際関係における文化：平野健一郎(2000)『国際文化論』東京大学出版会

第7回 文献講読(2) 第3章「文化の変化」

1. 内発的变化と外発的变化
2. 文化進化論

第8回 文献講読(3)

3. 文化変容論
- 第4章「文化の接触と変容ー文化触変」
1. アカルチュレーション研究の登場

第9回 文献講読(4)

2. 外来文化要素の伝播と選択
3. 文化運搬者

第10回 講義「日本の近代化と異文化接触」

第11回 プレゼンテーションに向けて(1)
日本文化をテーマとし、文化触変についてプレゼンテーションをおこなう(報告+ディスカッション)
プレゼンテーションの趣旨：文化に対する複眼的な視野と知識を共有し、日本社会・日本文化に対する思考を深めていくためのグループ内ディスカッション、また全体のディスカッションの活性化を目指したい。

第12回 「主要文献の収集状況の確認、テーマの具体化」

考察ポイントについてのディスカッション

第13回 「PPT、配布資料の準備、質疑応答の準備」

第14回 「プレゼンテーション(1)」(オンライン)
報告時間：30分、論点の整理とディスカッションの準備(10分)、ディスカッション：40分、フィードバック：10分

第15回 「プレゼンテーション(2)」全体まとめ
報告時間：30分、論点の整理とディスカッションの準備(10分)、ディスカッション：30分、フィードバック：10分

成績評価基準

課題20%、文献講読20%、プレゼンテーション30%、レポート30%

注意：本授業では、生成 AI の利用を全面的に禁止する。したがってこのルールに違反した場合（例えば課題や小レポートの回答作成で利用したり、生成 AI の生成物をそのまま提出したりした場合は、単位の不認定等、適切な措置を取る。

教科書(参考書)

授業内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 2期 日本文化研究 II 日本文化論

齋藤 絢

授業概要並びに到達目標

地理的に日本と朝鮮半島の歴史的関係は深く、日韓関係、日朝関係には常に変化が伴う。特に現代社会での課題の多くに近代に生じた政治的・社会的・文化的問題が関係しており、個と集団の狭間にある多元的な文化的課題を解決することは容易ではない。本講義では日本と朝鮮半島を主体とする東アジアの文化関係を取り上げ、日韓の社会的課題点を捉え、考察の手法・知識を習得することを目標とする。とりわけ日韓大衆文化に関する両国の文化政策と文化交流の現場を中心に、どのように両国が文化的関係性を構築してきたのかを考察する。講義では日本語・韓国語文献の収集と講読をおこない、ディスカッションを通じて受講者間の考察の視点を学んでいく。

注意：生成 AI の利用を全面的に禁止する。

授業計画

各週学習テーマ

- 第1回 授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景
- 第2回 文化の理論、日韓文化関係
- 第3回 大衆社会と文化1－大衆文化(講義)
- 第4回 大衆社会と文化2－映像の視聴(1)
- 第5回 大衆社会と文化3－映像の視聴(2)
- 第6回 大衆文化論に関する文献講読：学習者1
文化論／異文化接触／大衆文化を中心とした学術分野のなかで学習者の研究テーマに関連した文献を選択し、文献紹介・ディスカッションのテーマ共有を中心に授業を展開する。
- 第7回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第8回 大衆文化論に関する文献講読：学習者2
- 第9回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第10回 大衆文化論に関する文献講読：学習者3
- 第11回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第12回 大衆文化論に関する文献講読：学習者4
- 第13回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第14回 日韓文化関係についてディスカッション－戦後の日韓

関係と文化政策、日流・韓流(オンライン)

第15回 全体のまとめ

成績評価基準

各回授業参加への積極性…30%

文献講読(文献紹介、小発表の質、議論の質)…40%

レポート…30%

注意：本授業では、生成 AI の利用を全面的に禁止する。したがってこのルールに違反した場合（例えば課題や小レポートの回答作成で利用したり、生成 AI の生成物をそのまま提出したりした場合は、単位の不認定等、適切な措置を取る。

教科書(参考書)

講義内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 1期 日本文化研究 III 日本文学研究

エリス 俊子

授業概要並びに到達目標

文学を読む

文学とは何か。文学言語とは？

文学を読むとはどのような体験か。文学を批評するとはどのような行為か。

文学をめぐる基本的な問いについて、考える。

主に近代日本文学を中心に、具体的なテキスト分析を行う。

希望があれば、映画や美術など、文学以外の表現芸術についても触れる。

文学をまったく読んだことのない人、文学に詳しい人、共に歓迎します。予備知識は不要。

多様なバックグラウンドと関心をもつ参加者が一緒に読むことによってさまざまな発見があると思います。

*授業の発表やレポート作成にあたり、生成 AI を使用することは全面的に禁止する。

[準備学習] 授業で指定された作品を読み、各自のコメントをまとめる。(180分/週)

授業計画

参加学生と相談の上、適宜変更する。

- 1 導入
- 2 文学言語について
- 3 文学の読み方
- 4 俳句
- 5 和歌
- 6 近代詩

- 7 小説
- 8 批評の方法 (1)
- 9 批評の方法 (2)
- 10 比較文学比較文化へのアプローチ
- 11 文学と美術
- 12 文学と映画
- 13 作品分析：分担発表
- 14 ディスカッション：ジャンルの違いと批評について(オンライン)
- 15 小プレゼンテーション：各自の研究課題に結びつけて

成績評価基準

授業参加・期末レポートなどの総合評価

授業での発表及び期末レポート作成に際して AI が出力した文章や成果物を用いることを一切認めない。このルールに反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

適宜指示する。

前期課程 2期 日本文化研究Ⅳ 日本文学研究

エリス 俊子

授業概要並びに到達目標

第1期は文学およびその隣接領域についてさまざまなアプローチからの批評の仕方をとりあげたが、今学期は、言語芸術としての詩のことばを関心の中心に据え、細かいテキスト分析を行う予定である。詩的言語の可能性や詩的表現と歴史状況とのかかわりなど、一篇の詩からどのような声が聞こえてくるか、そこからどのような世界観、人間観が見えてくるか、意見を交わしながら丁寧にテキスト読み進める。予備知識は必要ない。受講者の関心によって他ジャンルのものを扱う希望があれば、それぞれの研究課題を考慮しつつ、適宜スケジュールに組み込む。

授業は対面形式で行うが、第14週のみオンラインで行う。

*授業の発表やレポート作成にあたり、生成 AI を使用することは全面的に禁止する。

[準備学習] 指示されたテキスト読み、あらかじめコメントを用意して授業でのディスカッションに備える。(180分/週)

授業計画

1. 導入：詩とは何か
2. 私の研究関心 (1)
3. 私の研究関心 (2)
4. 日本語近代詩の読み方
5. 共同テキスト分析—身体への違和感と格闘する詩人
6. 共同テキスト分析—社会への違和感と格闘する詩人
7. 共同テキスト分析—ことばにならない思いを叫びつづける

詩人

8. 共同テキスト分析— 声を出しつづける詩人
9. 共同テキスト分析— 声を失ってゆく詩人
10. 研究発表 (1)
11. 研究発表 (2)
12. 研究の方法—さまざまな分析の仕方
13. 研究の方法—論文の書き方
14. 個別指導(課題を持ち寄り、オンラインでのディスカッション形式)
15. 振り返り／総合討論

成績評価基準

授業参加とレポートの総合評価

授業での発表及び期末レポート作成に際して AI が出力した文章や成果物を用いることを一切認めない。このルールに反した場合は、単位の不認定等、適切な措置をとる。

教科書(参考書)

適宜指示する。

前期課程 1期 グローバルスタディーズ研究Ⅱ 国際マクロ経済とグローバルビジネス

複数教員制

真家 陽一、林 慶雲

授業概要並びに到達目標

日本経済のグローバル化が進展する中、国際マクロ経済およびグローバルビジネスを学ぶ重要性が高まっている状況を踏まえ、マクロ・ミクロの両面から国際マクロ経済およびグローバルビジネスに関する理解を深めることを目指す。

前半の講義では、国際マクロ経済学について学んでいく。具体的には、日本経済との結びつきが強いいくつかの国・地域をピックアップし、その国の経済事情やビジネス慣行、代表的な企業のグローバル経営についてケーススタディを行う。後半の講義では、世界第2位の経済大国であり、日本との経済関係も緊密な「中国」とのビジネスを中心に、ケーススタディを行う。本講義は学生の主体的かつ積極的な参加を強く求めるため、履修前に経済・ビジネスに関する十分な知識を習得済みであることが望ましい。今年度は原則として対面による授業を実施する。ただし、第14回はオンラインとする。

授業計画

- 1回 オリエンテーション(林、真家)
- 2回 アメリカの経済事情(林)
- 3回 Southwest Airline の企業経営(林)
- 4回 Walt Disney の企業経営(林)
- 5回 Starbucks の企業経営(林)
- 6回 ASEAN の経済事情(林)
- 7回 インドの経済事情(林)
- 8回 オーストラリアの経済事情(林)
- 9回 ケーススタディ①(概論、自動車)(真家)
- 10回 ケーススタディ②(電機)(真家)

- 11回 ケーススタディ③(化学、医薬)(真家)
 12回 ケーススタディ④(卸売・小売①スーパー・コンビニ)(真家)
 13回 ケーススタディ⑤(卸売・小売②アパレル・生活用品)(真家)
 14回 ケーススタディ⑥(食料品)(真家)
 15回 課題演習と後半の授業のまとめ(真家)

成績評価基準

前半の講義は、毎回の講義で簡単な感想文を書いてもらい、前期のレポートを提出することを求める。感想文及びレポートに基づいて評価する。

後半の講義は、毎回の講義に基づく学生からと発表と討論への取り組み状況および課題演習などによって総合的に評価する。生成 AI の利用については、別途指示する。

教科書(参考書)

前後半の講義とも、教科書は使用せず、プリントを配布する。

前期課程 グローバルスタディーズ研究 IV 1期(集中) 公共政策とガバナンス

平山 恵

授業概要並びに到達目標

公共政策の理論に関する文献購読を行いながら、学生に身近な課題についての政策策定手法の模擬演習を行う。

公共政策関連の専門知識を得るとともに、政策的思考を行うことができる能力を得ることを目的とする。

生成 AI の使用については、授業内で適宜指示する。

授業計画

1. 「公共政策」とは何か
2. 国際公共政策
3. 演習：理念設定
- 4～5. 政策の決定
6. 演習：現状把握
7. 課題別政策：安全保障
- 8～9. 政策の決定
10. 演習：未来予測
11. 安全保障
12. 地球環境
13. 演習：方策設定
14. 学生の発表
15. 総括

成績評価基準

輪読分担当及び討論を通じた知識理解 40%、政策手法演習 40%、政策分析発表および他の学生へのコメント 20%

教科書(参考書)

庄司真理子、宮脇昇、玉井雅隆 編著『新グローバル公共政策』
 晃洋書房 2021

前期課程 グローバルスタディーズ研究 V 1期(集中) 国際社会と国際法

山形 英郎

授業概要並びに到達目標

国際社会の平和と安全を維持するために国際連合が設立された。国際連合憲章は、武力行使を禁止し、集団安全保障体制を導入し、国際平和を維持する制度を構築した。しかし、現実には、国連創設以来武力行使の事例は枚挙にいとまがない。国際法の基本原則である武力行使禁止原則を中心に、国連安全保障体制について理解し、現実に生起している武力紛争について国連憲章を正しく適用することができる能力を身につける。その上で、国際法を通して国際社会の実態を分析することができるようになることを目標とする。

毎回、参加者との対話を通じて授業を進めていく。講義を行うが、受講する学生から随時質問を受け付け、回答を行う。疑問点を残さないよう授業を進めていきたい。

授業計画

01. 国際法の基礎を学び、国連集団安全保障体制を概観する。
02. 国際連盟の集団安全保障体制を理解し問題点を分析する。
03. 国際法上の基本原則である武力行使禁止原則を解剖する。
04. 武力行使禁止原則の例外である自衛権について検討する。
05. 個別的自衛権と集団的自衛権発動の要件を比較検討する。
06. 主権平等から導き出される不干渉原則を理解し運用する。
07. 国連憲章第6章における平和的紛争解決制度を概観する。
08. 国連安保理及び総会における決定手続きを十分理解する。
09. 冷戦期における安保理麻痺に対する対処方法を研究する。
10. 平和維持活動が第6章半の措置と呼ばれる理由はなにか。
11. 安全保障理事会が制裁措置を執るのはどのような場合か。
12. 安全保障理事会が軍事的強制措置を執るための要件とは。
13. 軍をもたない国連が軍事的強制措置を執るにはどうする。
14. 非軍事的強制措置の実態を検証し法的問題点を洗い出す。
15. 以上の検討を踏まえ、ウクライナ紛争を法的に分析する。

成績評価基準

国際法に関する基礎的な知識を得ていれば(C)。その知識を具体的な事例に適用できれば(B)。国家間あるいは研究者の間で意見が相違する点を理解した上で、自己の見解を提示できれば(A)。レポートから判断する。生成 AI をレポート作成に利用すれば失格とする。自分の言葉で作成すること。

教科書(参考書)

David Harris and Sandesh Sivakumaran ed., Cases and Materials on International Law 8th ed., Sweet & Maxwell (2015). ただし購入の必要はない。

参考書として、松井芳郎『武力行使禁止原則の歴史と現状』日本評論社(2018)、山形英郎編『国際法入門』(第3版)法律文化社(2021年)。

前期課程 グローバルスタディーズ研究 VI 2期(集中) 開発とグローバルイシュー

佐藤 都喜子

授業概要並びに到達目標

授業概要：

社会開発に係るグローバル・イシューについて議論する。特に今日の主要課題の一つであるグローバル格差とジェンダーの問題に注目する。国際協力に関心あるひとのみならず、途上国・中進国から来る外国人と接する機会の多い多文化共生の活動に携わる方々にも資する内容である。

授業では、長年国際協力の現場で働いた講師の経験をもとに、臨場感ある授業を進める。また、ゲスト・スピーカーとして、プラン・インターナショナルの理事長であり、元国連人口基金東京事務所長であった池上清子氏を迎える予定である。

到達目標：

グローバルイシューに関する現状を踏まえた上で、地球上の80%以上が途上国・中進国に居住すると言われる今日において、広い視野で世界情勢を見つつ、グローバルシティズンの一員としての自身の見識を高めることをめざす。

授業計画

・授業方法：

対面授業(14回のみ、オンライン授業)、講義、抄読を中心に進めながら、適宜、テーマに沿った事例をもとにグループ討議を行う。

生成 AI の利用については、自身が取り組むテーマや文献に関する情報収集の用途のみであること。それ以外の利用は不可。たとえば、課題の理解や整理をするために資料を要約する・翻訳する、課題やレポート作成時に生成 AI が出力した文章を用いること。利用の際には、信頼のおける複数の情報源を用いて確認すること。

・授業計画：

- 第1回 オリエンテーション、開発問題概観、開発のアクター(ODA、二国間援助、NGO・NPO)
- 第2回 開発のアクター(国際機関)、様々な開発論とその変遷
- 第3回 参加型アプローチ、参加型アプローチの事例研究：何が間違いだったのか？
- 第4回 日本の国際協力の視点、人間の安全保障
- 第5回 動画：いま国際協力に何が求められているのか？
- 第6回 グローバリゼーション、貧困と格差：アフリカ、東南アジアの事例
- 第7回 グローバリゼーションの事例研究：マレーシアの零細農民
- 第8回 友松：序章、1章
- 第9回 友松：2～3章
- 第10回 友松：4～5章
- 第11回 友松：6～7章
- 第12回 ジェンダー、ジェンダーの分析手法、事例研究：バングラデシの農村女性の健康
- 第13回 ジェンダーと開発、WID から GAD への変遷、事例

研究：ヨルダン女性のエンパワメント(黎明期：動画、活躍期：パワポで説明)

第14回 ゲスト・スピーカー(池上清子氏)

第15回 ジェンダー・公衆衛生・リプロダクティブヘルスの事例研究：さてどうしようか？ 現場とともに…

成績評価基準

- ・授業内のディスカッション参加度(50点)
- ・プレゼンテーションの内容(50点)

なお、生成 AI が出力した文章や成果物をそのまま用いる行為は一切認めない。このルールに違反した場合は、単位の不認定等適切な措置をとる。

教科書(参考書)

・教科書：

友松夕香(2025)『グローバル格差を生きる人びと―「国際協力」のディストピア』岩波新書

・その他の必要資料は授業で配布

・参考図書：

勝俣誠(1993)『アフリカは本当に貧しいのか』朝日新聞社

西川潤ら(2011)『開発を問い直す』日本評論社

北野収(2017)『国際協力の誕生』創生社

紀谷昌彦、山形辰史(2019)『私たちが国際協力する理由』日本評論社

(字数制限のため、参考図書の副題省略)

前期課程 ワールドヒューマニティズ研究 I 1期 グローバルヒストリー研究

鈴木 茂

授業概要並びに到達目標

新しいマイノリティ論によって注目を集めている Justin Gest (ジャスティン・ゲスト) の Majority Minority (New York: Oxford University Press, 2022) を輪読します。

米州(ニューヨーク、トリニダード・トバゴ)、中東(バーレーン)。インド洋(モーリシャス)、東南アジア(シンガポール)、太平洋(ハワイ)のうちから選んだ章を読み、日本との比較を意識して、マイノリティー論のグローバルな展開を理解することが目標です。

合わせて、学術論文の形式、文体、語彙に慣れることも目標とします。

生成 AI の利用については、授業時に指示します。

授業計画

具体的な事例とし挙げられている米州(ニューヨーク、トリニダード・トバゴ)、中東(バーレーン)。インド洋(モーリシャス)、東南アジア(シンガポール)、太平洋(ハワイ)から受講者と相談して決めます。毎回、受講者に内容の要約を中心とする報告を

お願いし、討論を行います。

- 第1回 インTRODクシヨ(講義)
 第2回 報告と討論1
 第3回 報告と討論2
 第4回 報告と討論3
 第5回 報告と討論4
 第6回 報告と討論5
 第7回 報告と討論6
 第8回 報告と討論7
 第9回 報告と討論8
 第10回 報告と討論9
 第11回 報告と討論10
 第12回 報告と討論11
 第13回 報告と討論12
 第14回 報告と討論13(オンライン)
 第15回 まとめ

成績評価基準

平常点で評価します。

教科書(参考書)

Justin Gest, Majority Minority (New York: Oxford University Press, 2022).

こちらで用意します。

参考書: ジャスティン・ゲスト『新たなマイノリティの誕生: 声を奪われた白人労働者たち』弘文堂、2019年

前期課程 ワールドヒューマニティズ研究 II 1期(集中) 多言語多文化研究

奈良 雅美

授業概要並びに到達目標

グローバル化の拡大と深化とともに変容を続ける世界において、多様な文化と言語の人々があるいは多様な主体が影響を及ぼし合っている。この授業では、これらの事象を重層的で動的な関係性として捉え、「多文化社会」をより深く理解できるよう、分析視点を広げる。

コースの前半は、国際文化論、国際社会論の視点から、「多文化社会」を位置付けて解説する。後半では、日本の多文化社会をジェンダーの視点から捉え、グローバル化の中で、多文化共生がジェンダー平等とどう融合しうるのであるかを考える。授業の目標は、第一に「多言語・多文化」に係る事象を俯瞰して理解する力を養うこと、第二に、多言語・多文化の社会の諸課題をジェンダーの視点で理解できるようになることである。

授業計画

- 1 授業の概要、進め方、授業意図のバックグラウンドの説明など
- 2 国際文化論からの考察①文化とはなにか
- 3 国際文化論からの考察②グローバル化の中の文化
- 4 国際文化論からの考察③文化の変化

- 5 国際文化論からの考察④文化の接触と変容
 - 6 国際文化論からの考察⑤文化の受容と抵抗
 - 7 国際文化論からの考察⑥人の国際移動
 - 8 ジェンダーとはなにか
 - 9 ジェンダーと多文化共生①ジェンダー平等との関連性
 - 10 ジェンダーと多文化共生②対立あるいは変容
 - 11 ジェンダーと多文化共生③複合差別
 - 12 事例: 日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む(教科書指定『そうしてサンパギータは神戸にいる』より)
 - 13 事例: 日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む(同上)
 - 14 事例: 日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む(同上)
 - 15 全体の振り返りとディスカッション
- *授業の進行状況により順番を入れ替えたり、内容を変更する場合もある。
- *生成 AI の使用は自由。(言うまでもないが、使用にともなう責任はすべて各自が負う)

成績評価基準

平常点40%(ディスカッションでの意見、対話の状況から)
 レポート60%(最終回で課題を提示する)

教科書(参考書)

教科書

奈良雅美『そうしてサンパギータは神戸にいる』金木犀舎、2025年

参考文献

平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年
 関根政美『エスニシティの政治学』名古屋大学出版会、1994年
 辻村みよ子・大沢真里編『ジェンダー平等と多文化共生』東北大学出版会、2010年

前期課程 ワールドヒューマニティズ研究 III 2期 宗教・民族・エスニシティ

高村 美也子

授業概要並びに到達目標

この授業では、エスノグラフィーおよび人類学の手法を用いて、世界の宗教、民族、エスニシティの概念を学び、アフリカおよびヨーロッパを中心とした各地域の社会の実態を学ぶ。

15回の講義を通し、世界で起こっている社会の現状と問題を発見し、それをどのように捉えていくかを考察する。

受講生は、世界で起こっている民族問題について、日ごろから着目しておく。

講義、ディスカッション、映像視聴、講読および発表、レポート執筆を実施する。

発表およびレポートに関しては、各受講生が注目している国内外問わず、地域民族の課題について執筆する。

第14回はオンラインで実施。

AI の使用に関して、発表用には使用不可。授業中の確認事項においては使用可能。

授業計画

- 1 講義内容の説明と計画
- 2 世界の民族とエスニシティ
- 3 国家、国民、民族
- 4 世界の言語
- 5 世界の宗教 1 文明と 3 大宗教
- 6 世界の宗教 2 人類学で扱われる宗教
- 7 民族の土着信仰、慣習
- 8 大航海時代から現在の人の移動
- 9 ディアスポラの人びとの暮らし
- 10 宗教・民族・エスニシティ(発表) ①
- 11 宗教・民族・エスニシティ(発表) ②
- 12 宗教・民族・エスニシティ(発表) ③
- 13 宗教・民族・エスニシティ(発表) ④
- 14 移住先での宗教実践 オンライン
- 15 宗教・民族・エスニシティ(発表) ⑤

成績評価基準

課題・レポート 40%
平常点(各講義課題への対応状況) 60%

教科書(参考書)

なし 随時配布

前期課程 2期	ワールドヒューマニティズ研究Ⅳ 世界文化と表象
------------	----------------------------

長畑 明利

授業概要並びに到達目標

- ・英語圏のモダニズムとその後の革新的な文学(innovative literature)に見られる翻訳と外国語の使用について考察する。
- ・到達目標は、①英語圏のモダニズムとその後の革新的な文学(innovative literature)について解説ができること、②革新的な文学に見られる翻訳と外国語使用の諸例について解説ができること、また、その意味について考えを述べるができること、③革新的文学および関連文献の英語に習熟することである。
- ・各回の授業は講義と担当者による報告および議論により進める。担当者はリーディング課題について、作品・作者紹介、翻訳と外国語使用についての考察、自分なりの論点を含む報告を行い、質問に答える。その際、必要に応じて、ハンドアウトまたはスライドを用意する。担当者以外の受講者はリーディング課題を読んだ上で授業に出席し、議論に加わる。

授業計画

- ・導入に続く14回の授業で以下のトピックとテキストを扱う計画である。和訳のあるものについては、英語テキストに加え、

和訳も参考にする。第14回の授業はオンラインで実施する。

- 第1回 導入
- 第2回 Modernism について
- 第3回 Ezra Pound による Bertrand de Born、Bernart de Ventadorn の詩の翻訳
- 第4回 Ezra Pound, Cathay
- 第5回 Ezra Pound, Awoi no Uye
- 第6回 Ezra Pound, “Canto I”; “Canto IV”
- 第7回 T. S. Eliot, The Waste Land
- 第8回 Basil Bunting, “Chomei at Toyama”
- 第9回 Gary Snyder, “Miyazawa Kenji” (The Back Country)
- 第10回 Kenneth Rexroth, The Love Poems of Marichiko
- 第11回 Rosemarie Waldrop, A Key into the Language of America
- 第12回 Caroline Bergvall, “Via”
- 第13回 Theresa Hak kyung Cha, Dictée
- 第14回 Yoko Tawada, “St. George and the Translator”
- 第15回 最終発表

(*) 扱うトピックまたはテキストを変更することがある。

成績評価基準

授業点60%、期末レポート40%。60点以上を合格とする。5回以上欠席した場合、単位取得の意思がないものとする。AI 使用については第1回目の授業時に説明する。

教科書(参考書)

教科書：自主教材

参考書：

- ・Baker, Mona, ed. Critical Readings in Translation Studies. New York: Routledge, 2010.
- ・Venuti, Lawrence, ed. The Translation Studies Reader, 2nd ed. New York: Routledge, 2004.
- ・Yao, Steven G. Translation and the Languages of modernism: Gender, “Politics,” Language. New York: Palgrave, 2002.
- ・その他、授業中に紹介する。

前期課程 1期	ワールドヒューマニティズ研究Ⅴ 世界文学と批評
------------	----------------------------

木村 茂雄

授業概要並びに到達目標

世界の英語文学の解釈や批評について学びます。カリブ、アフリカ、インドなど、旧大英帝国植民地の作家による英語文学(いわゆるポストコロニアル文学)や、日系アメリカ人作家の短編小説を取り上げます。これらの作品を、歴史、社会、文化、人種・民族、ジェンダーなど、さまざまな視点から検討することにより、文学作品だけではなく、広い意味での文化的・社会的なテキストを解釈し、批評する力を身につけることを目標にします。受講生は、授業で取り上げるテキストを丁寧に予習して

授業に臨みます。授業はゼミ形式で、作品の内容、解釈、疑問点などについて話し合っていきます。

*この授業における発表やレポートの作成等に生成 AI を利用することは全面的に禁止します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
第2回 Jean Rhys, “The Day They Burned the Books”
第3回 V.S. Naipaul, “The Baker’s Story” ①
第4回 V.S. Naipaul, “The Baker’s Story” ②
第5回 Ngugi wa Thiong’o, “A Meeting in the Dark” ①
第6回 Ngugi wa Thiong’o, “A Meeting in the Dark” ②
第7回 Abioseh Nicol, “The Truly Married Man” ①
第8回 Abioseh Nicol, “The Truly Married Man” ②
第9回 Saadat Hasan Manto, “Toba Tek Singh” ①
第10回 Saadat Hasan Manto, “Toba Tek Singh” ②
第11回 Hisaye Yamamoto, “The Streaming Tears”
第12回 Violet Harada, “The Shell Gatherer”
第13回 Dean Takehara, “Counting Song” ①
第14回 (オンライン) Dean Takehara, “Counting Song” ②
第15回 まとめ、学期末レポートの準備

成績評価基準

発表など授業への取り組み 60%、学期末レポート 40%

教科書(参考書)

教材はプリントで配布します。参考書は適宜授業で示します。

前期課程 2期	ワールドヒューマニティズ研究 VI トランスレーション研究
------------	----------------------------------

甲斐 清高

授業概要並びに到達目標

「文芸翻訳の理論と実践」

この授業は、翻訳という行為にともなう諸問題を検討しながら、英語で書かれた文学作品を日本語に翻訳する実践を通して、実践的な翻訳力を身につけていくことを目的とする。単に英文を日本語で解釈するのではなく、実際の「翻訳」とはどのようなものかを意識的に考察していく。文芸翻訳の特殊性を理解するために、他のジャンルのテキストも翻訳の題材とする。授業中、および課外で、文学作品の翻訳を進めていき、最終的にレポートを添えて翻訳作品を提出する。

受講者は、毎週与えられる翻訳課題を完成させて、次の授業にのぞまなければならない。

授業は、対面で行うが、資料の配布や課題の提出等は、Google Classroom から行う。

第14週は、Zoom を使ってオンラインでの授業となる。

本授業における生成 AI の使用の可否および範囲については、授業内で別途指示する。

授業計画

- 第1週 インTRODクシヨ：翻訳とは何か
第2週 直訳と意訳
第3週 辞書やその他のツールの活用
第4週 語句の意味と翻訳
第5週 起点テキストの種類、翻訳の目的
第6週 翻訳実践(省略)
第7週 翻訳実践(品詞の転換)
第8週 翻訳実践(順送りと逆送り)
第9週 翻訳実践(複雑な文への対応)
第10週 翻訳実践(話法)
第11週 翻訳実践(無生物主語、態)
第12週 翻訳実践(文化の違い)
第13週 翻訳実践(表記の問題)
第14週 翻訳実践(推敲)[オンライン]
第15週 まとめ

成績評価基準

授業内での取り組み40%、翻訳作品とレポート60%。

教科書(参考書)

プリント配布。

前期課程 1期	情報コミュニケーション研究 I ジャーナリズム・メディア論
------------	----------------------------------

鶴本 花織

授業概要並びに到達目標

映画・広告・漫画などのビジュアルテキストを研究資料としてどう扱うべきかが特に20世紀後半以降に学問的に議論された。その結果として考案された分析方法を「記号学分析」と呼ぶが、この授業では、記号学分析の手法を教授するとともに、フェミニズム映画理論の中でとりわけ開発が進んだ精神分析的映画理論に特化して授業を運営する。

ビジュアルテキストを用いて研究を進めることを視野に入れている場合は、この授業を受けると良いだろう。

授業では、映画をネタにした記号学分析の実演を教員が行ったり、教員が選んだ映画をネタにグループ・ディスカッションをしたりする。また、受講生が選んだ映画を用いて個人発表を行い、学習成果を示す。

授業計画

〈導入〉

1. オリエンテーション：記号学分析とは
2. 記号学分析の基礎：ノーノー・ボーイの表象
3. 記号学分析の基礎：ティーン・フリックの表象

〈ホラー映画〉

4. ローラ・マルヴィ「視覚的快楽と物語映画」(1975)について
5. バーバラ・クリード「Horror and the Archaic Mother : Alien」
6. ブラッハ・L・エッティンガー『Matrixial Gaze』(1995)に

- ついて／事例映画：『羊たちの沈黙』(1991)
- 〈現代家族〉
7. 『ジョーカー』2019の記号学分析
 8. 『パラサイト半地下の家族』2019のディスカッション
- 〈戦争映画〉
9. 反戦映画に関するディスカッション／事例映画：『西部戦線異状なし』2022
- 〈救世主としての女性〉
10. 『プロミシング・ヤング・ウーマン』2020
 11. 『ラプリー・ボーン』2009
 12. 学生お薦め作品
 13. 学生お薦め作品
 14. 学生お薦め作品(オンライン)
 15. 学生お薦め作品

本授業では、生成 AI の利用を全面的には禁止しない。ただし、レポートや課題の作成において生成 AI を使用する場合は、参考・補助的な利用に限る。また、使用した場合には、利用箇所および利用方法を明記しなさい。生成 AI が作成した文章をそのまま提出物として使用することは認めない。提出物の内容についての最終的な責任は受講者本人にある。不適切な利用が確認された場合は、不正行為として扱うことがある。

成績評価基準

グループ・ディスカッションおよび個人発表。

教科書(参考書)

クラスルームにデジタル版を挙げる。

前期課程 2期	情報コミュニケーション研究 II 情報システムと AI
------------	--------------------------------

大野 欽司

授業概要並びに到達目標

AI は、あらゆる分野で革命的な変化をもたらしています。本科目は AI 技術の基礎と活用の習得を目的とします。2025 年からアカデミアに無料提供されている JMP Statistical Discovery によるデータサイエンスを最初に学習します。引き続き、AI 開発に必要な Python 言語と Python Libraries による programming を習得します。さらに、深層学習による画像 AI、機械学習による教師あり学習、機械学習による教師なし学習、説明可能 AI の習得を目指します。

生成 AI の利用については全面的に可とします。バンプコーディングによるプログラミング技術や、生成 AI によるプログラムエラー検出手法を習得し将来にわたり生成 AI を積極的に活用してください。生成 AI は生産性をあげるために学生時代に習得すべき必須の技術です。

授業計画

- 第 1 回 演習環境設定
- ・ JMP 環境設定、Python 環境設定、Google

- Colaboratory 環境設定
- 第 2 回 JMP を使ったデータサイエンス /Data science with JMP 1
- ・ Supervised learning(決定木解析、ロジスティック回帰)
- 第 3 回 JMP を使ったデータサイエンス /Data science with JMP 2
- ・ Unsupervised learning (主成分分析、k-means 分析、階層的クラスタ分析)
- 第 4 回 パイソンプログラミング /Python programming 1
- ・ 変数、演算、リスト、タプル、辞書
- 第 5 回 パイソンプログラミング /Python programming 2
- ・ 制御構造、関数
- 第 6 回 パイソンプログラミング /Python programming 3
- ・ Python libraries (pandas, seaborn)
- 第 7 回 パイソンプログラミング /Python programming 4
- ・ Python libraries (numpy, matplotlib)
- 第 8 回 ニューラルネットワーク /Neural network 1
- ・ 活性化関数・損失関数・最適化関数
- 第 9 回 ニューラルネットワーク /Neural network 2
- ・ Tensorflow/keras による文字認識モデル構築
- 第 10 回 教師あり学習 /Supervised learning 1
- ・ Scikit learn による線形回帰と決定木
- 第 11 回 教師あり学習 /Supervised learning 2
- ・ Scikit learn によるロジスティック回帰とサポートベクターマシン
- 第 12 回 教師あり学習 /Supervised learning 3
- ・ Scikit learn によるランダムフォレストと勾配ブースティング
- 第 13 回 教師なし学習 /Unsupervised learning 1
- ・ Scikit learn による主成分分析
- 第 14 回 教師なし学習 /Unsupervised learning 2 (オンライン開講)
- ・ Scikit learn による k-means 分析、階層的クラスタ分析
- 第 15 回 説明可能 AI/Explainable AI (XAI)
- ・ permutation importance, SHAP, LIME による特徴量評価

成績評価基準

受講態度(出席、発言、質問等) (40%)、毎回の演習課題(60%)で総合的に評価する。

教科書(参考書)

なし

前期課程 情報コミュニケーション研究Ⅳ 2期 スピーチ・プレゼンテーション

Alessandro G. Gerevini

授業概要並びに到達目標

魅力的なスピーチやプレゼンテーションの力を身につける科目です。日本語、あるいは英語によるスピーチ・プレゼンテーションを実践的な形で指導します。話し方、姿勢、ジェスチャー、観客への視線、間の取り方、服装などのノン・バーバル・コミュニケーションと、発声・滑舌、話の速度、話の流れの中で協調すべきところなどのバーバル・コミュニケーションの両者に関するスキルアップを目指します。演劇学校などで用いられる実習も取り入れる予定ですので、学生の積極的な参加が期待されます。

- ・準備学習時間：180分
- ・履修者の自己紹介の指導から始まる予定ですので、初回まで数分程度のスピーチを準備してください。
- ・授業実施方法：第1?13週間及び最終回の第15週間の授業は対面で行います。しかし第14週間はオンラインで行う予定です。
- ・生成 AI の利用については、限定的に可とします。

授業計画

初回の後、特に優れたスピーチを例として扱いながら、重要なポイントや構成パターンを徹底的に分析します。即興のスピーチを練習する目的でも、履修者全員にウタ・ハーゲン氏の、観客への視線の大切さを学ぶ実習をしてもらう。そして各自で準備したスピーチやプレゼンテーションを発表してもらう。その内容に関しては特に決まりはなく、参加予定のスピーチコンテストの原稿でも、他の授業中に発表する予定のプレゼンテーションでもどれでも結構です。使用言語は日本語もしくは英語、どちらでも可能です。各自のプレゼンテーションのテーマについての指導はしないものの、その内容が観客に理解されているか、また魅力的な形で届けられているかを確認します。履修者数によって、授業計画全体の微調整もあり得る。

- 第1回 コース・オリエンテーション、学生の自己紹介
- 第2回 国内外のスピーチ・プレゼンテーション観賞とその分析①
- 第3回 国内外のスピーチ・プレゼンテーション観賞とその分析②
- 第4回 ウタ・ハーゲン氏の実習①
- 第5回 ウタ・ハーゲン氏の実習②
- 第6回 インプロビゼーション(即興)の実習
- 第7回 プリーフィング(グループ別指導)
- 第8回 学生のスピーチ・プレゼンテーション1(グループA)
- 第9回 学生のスピーチ・プレゼンテーション1(グループB)
- 第10回 学生のスピーチ・プレゼンテーション1(グループC)
- 第11回 プリーフィング(個人指導)
- 第12回 学生のスピーチ・プレゼンテーション2(個人A)
- 第13回 学生のスピーチ・プレゼンテーション2(個人B)

第14回 (オンライン方式)

学生のスピーチ・プレゼンテーション2(個人C)

第15回 まとめ

成績評価基準

授業参加における積極的な態度 40%

スピーチ・プレゼンテーションの練習 60%

教科書(参考書)

教科書は使用しません。

必要に応じて教員がプリントを配付します。

参考書：ウタ・ハーゲン著、シカ・マッケンジー訳『“役を生きる”演技レッスン—リスペクト・フォー・アクティング』フィルムアート社、2010

前期課程 情報コミュニケーション研究Ⅴ 2期 英語通訳スキル

浅野 輝子

授業概要並びに到達目標

国際社会で活躍できる通訳 基礎知識からトレーニング法まで

- 1：このクラスは、通訳の基礎理論を習得した後、逐次、同時通訳ができるまでの能力を養成することを目的とした通訳コースである。
- 2：名古屋外国語大学主催で毎年開催している「全国学生通訳コンテスト」のスク립トをまとめた「通訳ワークブック」をテキストに、多文化社会の現場での逐次通訳スキルを音声教材を用いて指導する。
- 3：国際化が進むにつれて、異文化コミュニケーターとしての通訳の需要は年々高まってきている。このコース終了後、学生が国際会議などのボランティア通訳、ガイド通訳エスコート通訳として活躍できるようになる事。

基本は日進キャンパスのE30同時通訳室にて対面で行いますが、14回目の授業はオンライン(Zoom)で行います。

尚、AIの利用については、第一週のオリエンテーションで説明する。

授業計画

- 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション
- 第2回 1-1. 人工知能とテクノロジー
- 第3回 1-2. どのように医学は変化を遂げているか?
- 第4回 1-3. 芸術はどのように影響されるか?
- 第5回 1-4. 人工知能が与える政治システムへの影響
- 第6回 2-1. 用語の整理—元号とは
- 第7回 2-2. 平成の幕開け(1989年1月8日)
- 第8回 2-3. バブルの崩壊(平成3年)
- 第9回 2-5. 地下鉄サリン事件(平成9年)
- 第10回 3-1. 用語の整理・パンデミックの歴史
- 第11回 3-2. Covid-19の始まり

- 第12回 3-3. 「ステイホーム」へ変化した生活スタイル
 第13回 3-4. 医療現場とその諸問題
 第14回 3-5. 「世界保健機関(WHO)」の役割(オンライン)
 第15回 総まとめ

成績評価基準

授業中の通訳訓練および態度、宿題の評価を全体の40%、通訳実技を60%とする。

教科書(参考書)

「キーワードで現代を伝える 通訳ワークブック2」浅野輝子
 他、名古屋外国語大学出版会

- 第14回 翻訳の仕事：中国映画(ドラマ)字幕翻訳(オンライン)
 第15回 まとめ(レポート)

成績評価基準

授業への貢献度(40%)、発表(30%)、レポート(30%)

教科書(参考書)

教科書：使用しない(資料を配付する)

参考書：

- ・高田裕子・毛燕『日中・中日通訳トレーニングブック』大修館書店
- ・窪田守弘・楊紅雲他『映画でチャイニーズ』南雲堂フェニックス出版
- ・楊紅雲『帝國的銀幕—十五年戦争と日本映画』中国電影出版社

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 VI 中国語通訳スキル

楊 紅雲

授業概要並びに到達目標

授業概要：

本講義は、中国語通訳に必要な理論知識の習得と実践的技術、技能の養成を目的とする。具体的には、日中ビジネス、法律法規、医薬医療、観光案内、健康美容、映像文芸など諸分野において担当教員が長年経験してきた通訳の事例を紹介し、解説する。講義内容に合わせて実践的通訳トレーニングを行う予定、学生には関連する専門用語の事前学習及びロールプレイ、ディスカッションへの積極的な参加を求める。なお、この科目は中国語を母語とする学生を受講対象としている。

第14週目は、大学の方針によりオンライン授業とする(Google Classroom)。

生成AIの利用については、全面的に禁止する。成績評価の面からも公平性が保てないからである。

到達目標：

- (1)中国語通訳スキルの基礎知識を習得すること。
- (2)日中通訳に必要な技術、技能を訓練すること。
- (3)中国語⇄日本語の変換力を鍛えること。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(概説)
 第2回 中国語通訳基礎(1)：通訳者としての教養
 第3回 中国語通訳基礎(2)：逐次通訳・同時通訳
 第4回 通訳の技術(1)：商談(会議・セミナー)通訳
 第5回 通訳の技術(2)：工場(製造ライン・見学)通訳
 第6回 通訳の技術(3)：レセプション(展示会)通訳
 第7回 通訳の技術(4)：司法(捜査・弁護・法廷)通訳
 第8回 通訳の技術(5)：観光(案内・ショッピング)通訳
 第9回 通訳の技術(6)：医療(医薬・診療)通訳
 第10回 通訳の技術(7)：美容(コスメ・施術)通訳
 第11回 通訳の技術(8)：映像(ロケ探し・製作現場)通訳
 第12回 発表(1)：模擬通訳ロールプレイ
 第13回 発表(2)：模擬通訳ロールプレイ

英語・英語教育コース（英語教授法（TESOL）プログラム）

【 専門教育科目 】

MA 1期	英語教育法研究Ⅰ Second Language Acquisition
----------	---

佐藤 雄大

授業概要並びに到達目標

Second Language Acquisition (SLA) represents a particular way of conceptualizing language and language learning. This course aims to critically examine this perspective from multiple angles in order to deepen our understanding of language learning and teaching, and to develop a richer, more comprehensive view of language. In particular, the course places special emphasis on reconceptualizing SLA from the perspectives of sociocultural theory and the plurilingual and pluricultural approach as articulated in the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR). The use of AI will be explained in the class.

授業計画

1. Introduction: Course Objectives and Key Questions about Language
2. The Development of Second Language Acquisition Research: Historical Background and Theoretical Perspectives
3. Key Concepts in Second Language Acquisition (1): Input, Output, and Interaction
4. Key Concepts in Second Language Acquisition (2): Noticing, Interlanguage, and a Sociocultural Perspective (Overview)
5. The Underlying Assumptions of SLA Research: What is Individual Competence?
6. Reconsidering Individual Competence: Is Language an Individual Ability?
7. Vygotskian Theory (1): The Zone of Proximal Development and the Social Nature of Learning
8. Vygotskian Theory (2): Inner Speech, Everyday vs. Scientific Concepts, and Pseudoconcepts
9. Reconceptualizing Second Language Acquisition from a Vygotskian Perspective
10. The CEFR's View of Language: From Four Skills to Reception, Production, Interaction, and Mediation
11. What is Plurilingualism and Pluriculturalism? A New Framework for Language Education
12. Reconceptualizing Second Language Acquisition from a Plurilingual/Pluricultural Perspective
13. The Concept of Mediation and Its Pedagogical Implications
14. Rethinking Language Education: Questioning Ableism in Language Learning
15. Conclusion: Redefining Language and Learning

成績評価基準

Three written assignments (reports): 60%

Group discussions and presentations: 30%

Class participation: 10%

教科書(参考書)

Materials will be distributed as needed.

MA 2期	英語教育法研究Ⅱ Second Language Teaching
----------	--------------------------------------

佐藤 雄大

授業概要並びに到達目標

In this course, we will explore what it means to teach languages other than one's mother tongue. Through examining questions such as "What is a non-native language?" and "What does it mean to teach a language?", we will critically reflect on language education. Drawing on the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR), we will deepen our understanding of key concepts such as plurilingualism and pluriculturalism, the action-oriented approach, and mediation, and consider their implications for language teaching.

授業計画

1. Introduction
2. What is "language" ?
3. Reflecting on your school language learning experiences
4. CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)
5. Action-Oriented Approach
6. Practicing the Action-Oriented Approach
7. Group Presentations
8. Micro-Teaching Plan (1)
9. Micro-Teaching Plan (2)
10. Presentation of Teaching Plans
11. Revision of Teaching Plans
12. Micro-Teaching (1)
13. Micro-Teaching (2)
14. Micro-Teaching (3)
15. Reflection

成績評価基準

Micro-Teaching Plan and Micro-Teaching: 40%

Group discussions and presentations: 30%

Reflective report: 20%

Class participation: 10%

教科書(参考書)

Materials will be distributed as needed.

Duane Kindt

授業概要並びに到達目標

MDCD reviews concepts, procedures, & approaches in materials development, implementation, & evaluation with emphasis on classroom dynamics.

Modules include:

- (1) MatDev basics, (2) Perspectives on interaction & learning,
- (3) Recursive tools & procedures, (4) Freedom & constraints,
- (5) Developing materials, (6) Sharing session, & (7) Reflection report.

Participants gain experience using tools & techniques such as conversation cards, strategies, models, recursive practice, recordings, transcriptions, & follow-ups.

Online discussion & feedback is included in the class hours.

To prepare for each class, students are required to:

- (1) complete weekly reading assignments (2 hours each) & write a reflection log (1 hour).

授業計画

The MDCDs course will be delivered in a monthly session with a combination of Moodle and in-person meetings. Please note that this syllabus is tentative.

Session 1: Intro to materials development and classroom dynamics

1. Example materials series (Me & MD)
2. Considering our freedoms and constraints
3. A complex systems view of course design
4. Plans, materials, and dynamics for AR
5. Reflection assignment #1

Session 2: Understanding the field of MD

1. Review of feedback
2. Basic MD terms
3. Intro to the field of MD
4. Plans, materials, and dynamics for AR
5. Reflection assignment #2

Session 3: Recursive tools and procedures

1. Review of feedback
2. Techniques and materials
3. Plans, materials, and dynamics for the AR
4. Understanding recursive tools and procedures
5. Reflection assignment #3

Session 4: Supporting the interactive classroom

1. Review of feedback
2. Creating an interactive classroom
3. Plans, materials, and dynamics for the AR
4. Final reflection assignment

NOTE: Moodle discussion and feedback (online) are incorporated into class hours.

成績評価基準

- (1) Assignments for four sessions (40%)
- (2) Four class reflections and reactions (40%)
- (3) Change Essay (20%)

In this class, the use of AI for the purposes of language translation or generation is not permitted.

教科書(参考書)

Print materials – including preliminary readings – will be provided by the instructor and available via Google Classroom.

The course may be cancelled due to a small number of participants.

Lesley Ito

授業概要並びに到達目標

This course aims to familiarize students with important principles and several current approaches to teaching young learners through self-study, lectures and discussion. It will also provide students with an opportunity to reflect on different approaches to generate their own principles and consider how to apply them in actual teaching situations.

To prepare for each class, students are required to:

1. Complete assigned readings (3 hours).
2. Make notes in preparation for a class discussion on the main points of the reading - adding examples from their experience as teachers (1 hour).

Generative AI use is not allowed. However, AI or other proofreading tools may be used to proofread or spellcheck your original written work.

授業計画

Session 1

1. Introduction & Considerations for Teaching Young Learners (Class 1-2)
2. Reasons for an Early Start. (Class 3)

Session 2

3. Effective Language Teaching Practices(Class 4)
4. Teaching listening and speaking. (Class 5-6)

Session 3

5. Using Picturebooks in the Young Learner Classroom (Class 7)
6. Teaching Reading and Writing. (Class 8-9)

Session 4

7. Let's try an interactive read-aloud. (Class 10)
8. 21st Century Skills. (Class 11)

9. Reflection and post-course task explanation. (Class 12)

IMPORTANT

Participants must order the textbook, finish reading it, AND consider the contents in relation to their own teaching experience BEFORE the start of the course.

This is an intensive course over 4 days. After each day, written reflections and preparation for the next day are necessary. There is no time to cover the necessary readings DURING the course.

成績評価基準

1. Participation in discussions and group or pair tasks (40%)
2. Reading/preparation (10%) & reflection log completion (20%) = (30%)
3. Post-Course Task: Develop a series of 3 lesson plans reflecting the important principles to teaching young learners. (30%)

教科書(参考書)

Teaching Young Learners English, From Theory to Practice. Kang Shin, J & Crandall, J. Boston, MA: National Geographic Learning, (2014). ISBN 978-1111771379. (This textbook is also available as an e-book. ISBN 9781305959668.)

It is ESSENTIAL that you buy this book early AND finish reading the contents BEFORE the start of the course.

Other materials will be provided by the instructor.

MA 1期	英語教育法研究 V Action Research 1
----------	--------------------------------

佐藤 雄大

授業概要並びに到達目標

Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the “theory and practice of teaching English” to your daily classroom teaching. For example, you will choose your own action research topic based on the problems you face in your classes. Then, you will modify your lesson plan with the help of the adviser. After trying out new ideas, you will report the results in the monthly meeting. Finally, you will make a mid-year presentation in August.

The use of AI will be explained in the class.

授業計画

1. May: Introduction (class 1, 2, 3)
2. May: Making action research plan (class 4, 5, 6)
3. June: Revising action research plan (class 7)
4. June: Monthly report (class 8)
5. July: Revising action research plan (class 9)

6. July: Monthly report (class 10)

7. August: Mid-term presentation (Class 11, 12)

8 August: Mid-term presentation (Class 13, 14, 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

1. Participation in Moodle discussion (20%)
2. Action research plan and monthly reports (40%)
3. Final presentation (40%)

教科書(参考書)

Anne Burns (2010). Doing action research in English language teaching. New York: Routledge.

MA 2期	英語教育法研究 VI Action Research 2
----------	---------------------------------

Kevin Ottoson

授業概要並びに到達目標

Following AR 1, you will continue your action research. Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the “theory and practice of teaching English” to your daily classroom teaching. After trying out new ideas, you will report the results in the monthly meeting. Finally, you will make a final presentation in March.

Generative AI use is permitted under specific conditions. Using AI for warm-up activities, brainstorming, might be permissible but having AI write assignments for you would not be permissible.

授業計画

1. Sep: Revising action research plan (class 1)
2. Sep: Monthly report (class 2)
3. Oct: Revising action research plan (class 3)
4. Oct: Monthly report (class 4)
5. Nov: Revising action research plan (class 5)
6. Nov: Monthly report (class 6)
7. Dec: Revising action research plan (class 7)
8. Dec: Monthly report (class 8)
9. Jan: Revising action research plan (class 9)
10. Jan: Monthly report (class 10)
11. Feb: Revising action research plan (class 11)
12. Feb: Monthly report (class 12)
13. Mar: Final presentation (class 13, 14)
14. Mar: Final presentation (class 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

Generative AI use is permitted under specific conditions. Using AI for warm-up activities, brainstorming, might be permissible but

having AI write assignments for you would not be permissible.

成績評価基準

1. Participation in Moodle discussion (20%)
2. Action research plan and monthly reports (40%)
3. Final presentation (40%)

教科書(参考書)

Anne Burns (2010). Doing action research in English language teaching. Routledge.

MA
1期

英語教育法研究 VII Curriculum Design 1

Duane Kindt

授業概要並びに到達目標

Following Action Research (AR) 1 & 2, you will continue your AR in Curriculum Design (CD) 1. Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the “theory and practice of teaching English” to your daily classroom teaching. Moreover, you are expected to employ mixed methods research collecting both qualitative and quantitative data to increase the reliability of your research. Finally, you will make a mid-year presentation in August.

授業計画

- (1) May: Introduction (classes 1, 2, 3)
- (2) May: Making curriculum design plan (classes 4, 5, 6)
- (3) June: Revising curriculum design plan (class 7)
- (4) June: Monthly report (class 8)
- (5) July: Revising curriculum design plan (class 9)
- (6) July: Monthly report (class 10)
- (7) August: Mid-term presentation (classes 11, 12)
- (8) August: Mid-term presentation (classes 13, 14, 15)

Moodle discussion and feedback (online) are incorporated into class hours.

成績評価基準

- (1) Participation in Moodle discussions (20%)
- (2) Action research plans (sample lesson plans) and monthly reports (40%)
- (3) Mid-year presentation & report based on mixed methods research (40%)

In this class, the use of AI for the purposes of language translation or generation is not permitted.

教科書(参考書)

Burns, A. (2010). Doing action research in English language teaching. Routledge.

MA
2期

英語教育法研究 VIII Curriculum Design 2

佐藤 雄大

授業概要並びに到達目標

Following CD 1, you will continue your action research in Curriculum Design 1. Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the “theory and practice of teaching English” to your daily classroom teaching. Moreover, you are expected to employ mixed methods research collecting and analyzing both qualitative and quantitative data to increase the reliability of your research. Finally, you will give a final presentation in March. The use of AI will be explained in the class.

授業計画

1. Sep: Revising action research plan (class 1)
2. Sep: Monthly report (class 2)
3. Oct: Revising action research plan (class 3)
4. Oct: Monthly report (class 4)
5. Nov: Revising action research plan (class 5)
6. Nov: Monthly report (class 6)
7. Dec: Revising action research plan (class 7)
8. Dec: Monthly report (class 8)
9. Jan: Revising action research plan (class 9)
10. Jan: Monthly report (class 10)
11. Feb: Revising action research plan (class 11)
12. Feb: Monthly report (class 12)
13. Mar: Final presentation (class 13, 14)
14. Mar: Final presentation (class 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

- (1) Participation in Moodle discussions (20%)
- (2) Action research plans (sample lesson plans) and monthly reports (40%)
- (3) Mid-year presentation & report based on mixed methods research (40%)

教科書(参考書)

Burns, A. (2010). Doing action research in English language teaching. New York : Routledge.

MA 1期(集中)	英語教育法研究 IX Learner Autonomy
--------------	--------------------------------

Dominique Vola

授業概要並びに到達目標

This course aims to introduce participants to the importance of learner autonomy in language learning. It will provide theoretical underpinnings on learner autonomy and explore practical approaches to fostering autonomy within and beyond the classroom. After completing this course, participants should be able to:

1. understand the concept of learner autonomy and its importance in language learning
2. understand the key dimensions associated with learner autonomy
3. discuss the roles of teachers in promoting learner autonomy
4. devise practical ways to promote learner autonomy
5. know the basics of advising, and how it fosters learner autonomy

In this class, the use of AI for the purposes of language translation or generation is not permitted.

授業計画

To prepare for the intensive course, students are required to do reading assignments (4 in total) which will be posted on Moodle during the semester. Students are required to:

- 1) do the readings (2.5 hours each),
- 2) write their reflections on the reading and respond to another student's reflection (1.5 hour each).

Each written reflection should include at least 250 words and each response to another student's reflection should include at least 75 words.

The intensive course

- | | |
|----------|---|
| Class 1 | Introductions & Course overview |
| Class 2 | Characteristics of autonomous learners |
| Class 3 | Learner autonomy: why and how |
| Class 4 | Reflections and discussions on learner autonomy and your own contexts |
| Class 5 | Approaches to promote learner autonomy |
| Class 6 | More about approaches and ways to increase learners' control + Integrating the approaches to your own context |
| Class 7 | Promoting learner autonomy beyond the classroom: Learning strategies and resources |
| Class 8 | Designing an intervention / a project to promote learner autonomy in your school |
| Class 9 | Interest and motivation |
| Class 10 | Teacher role: promoting reflection |
| Class 11 | Working on the intervention / the project |
| Class 12 | Presentations of interventions and reflections |
| Class 13 | Introduction to advising |
| Class 14 | Assessing learner autonomy |
| Class 15 | Final activities and reflections |

成績評価基準

- Online written reflections on the readings + responding to another student's post (40%)
- Written reflections after each day of class (20%)
- Class participation (10%)
- Project work (30%)

Any student use of AI-generated content constitutes academic misconduct.

教科書(参考書)

Required Textbook:

Benson, P. (2011). Teaching and Researching Autonomy in Language Learning, 2nd ed.

ISBN: 1408205017 / ISBN-13: 978-1408205013

Other books (which are not required) but will be used throughout the course:

Promoting Reflection on Language Learning: Lessons from a University Setting (2023).

Language Learner Autonomy: Theory, Practice and Research (2017).

MA 2期	英語教育法研究 X Cross-Cultural Communication
----------	---

Kevin Ottoson

授業概要並びに到達目標

This course covers major theories and concepts in cross-cultural communication.

The specific objectives are:

1. To help you to understand how different cultural values can influence everyday communication;
2. To increase your awareness concerning cultural differences;
3. To compare and contrast different culture-based verbal and nonverbal communication styles;
4. To help you to apply cross-cultural communication in your English class.

To prepare for each class, students are required:

1. to complete a reading assignment (two hours)
2. to write a reflection log (one hour)
3. to prepare a training project (three hours)

授業計画

1. Why teach intercultural communication? (Class 1)
2. What is intercultural communication competence? (Class 2)
3. What is culture? (Class 3)
4. Language and Culture (Class 4)
5. Sapir-Whorf Hypotheses (Class 5)

6. Communication styles (Class 6)
7. Stereotypes (Class 7)
8. Gestures (Class 8)
9. Body Language (Class 9)
10. Value Orientation (Class 10)
11. Hofstede's Cultural Dimensions (Class 11)
12. Perceptions (Class 12)
13. Cross-cultural training project (Class 13–15)

Generative AI use is permitted under specific conditions. Using AI for warm-up activities, brainstorming, might be permissible but having AI write assignments for you would not be permissible.

成績評価基準

Class participation (30%)
 Class assignments (20%)
 Reflection logs on Moodle (20%)
 Cross-cultural training project (30%)

教科書(参考書)

Handouts will be provided in class.

MA 2期	英語教育法研究 XII Sociocultural Theory
----------	-------------------------------------

Daniel Hooper

授業概要並びに到達目標

The aim of this course is to provide students with an introduction to sociocultural theory and key concepts that tie the theory to the practice of language learning and teaching. By reading and analyzing relevant literature and reflecting upon students' own life journeys, this course is designed to encourage new perspectives and discoveries about how we both learn and teach.

In this class, the use of AI for the purposes of language translation or generation is not permitted.

To prepare for each class, students are required to:

1. Complete assigned readings (3 hours)
2. Post their reaction to the readings online (and post one response to a classmate's post) (1 hour)

授業計画

1. Course Overview, Fundamental SCT principles (Class 1)
2. Discussing our LLHs (Class 2)
3. Socio Cognitive Conflict, SCT in SLA (Class 3)
4. Zone of Proximal Development and scaffolding (Class 4)
5. Semiotic mediation and affordances (Class 5)
6. Linguaging and the place of L1 (Class 6)
7. Agency and learner identity (Class 7)

8. Private talk and social interaction/collaboration (Class 8)
 9. Socialization/social constructivism (Class 9)
 10. Communities of practice (Class 10)
 11. Pedagogical interactions (Class 11)
 12. Peer teaching and feedback (Class 12)
 13. Presentations/reflections on peer teaching sessions (Class 13)
 14. Evidence based and dialogic reflection (Class 14)
 15. Course reflections and final assignment guidance (Class 15)
- Course schedule subject to change based on class needs
 Online discussion and feedback are incorporated into class hours

成績評価基準

1. Online posting on assigned readings and responses (20%)
2. Language Learning Histories and analysis (5%)
3. Article presentation and discussion leading (20%)
4. Peer teaching and reflective discussion (5%)
5. Final assignment: Reflective essay (50%)

教科書(参考書)

Merrill Swain, Penny Kinnear, & Linda Steinman. Sociocultural Theory in Second Language Education: An Introduction through Narratives (2nd Edition, 2015). Multilingual Matters.
 Other materials will be provided in class.
 The course might be cancelled due to a small number of participants.

MA 1期	英語教育法研究 XIII Introduction to Action Research Methods
----------	---

Kevin Ottoson

授業概要並びに到達目標

Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. In this class, students will apply newly acquired knowledge of the "theory and practice of teaching English" to daily classroom teaching. For example, students will:

- choose an action research topic based on issues faced in class;
- students will modify lesson plans based on their adviser's help;
- report results from modifications in the monthly meeting;
- students will make a mid-year presentation in August.

For class preparation. Students must:

- Complete assigned readings (3 hours)
- Post their reaction to the readings online (and post one response to a classmate's post) (1 hour)

授業計画

1. May: Introduction (class 1, 2, 3)
2. May: Making action research plan (class 4, 5, 6)
3. June: Revising action research plan (class 7)
4. June: Monthly report (class 8)

5. July: Revising action research plan (class 9)
6. July: Monthly report (class 10)
7. August: Mid-term presentation (Class 11, 12)
8. August: Mid-term presentation (Class 13, 14, 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours. Generative AI use is permitted under specific conditions. Using AI for warm-up activities, brainstorming, might be permissible but having AI write assignments for you would not be permissible.

成績評価基準

Class Participation: 20%

Contributions to Moodle: 30%

Homework: 20%

Action Research (Your AR plan and its revisions and presentation of what you learned): 30%

Attendance rate will not be a part of the grade.

教科書(参考書)

Burns, A. (2010). Doing action research in English language teaching. Routledge.

MA 1期(集中)	英語教育法研究Ⅳ Teaching and Learning 2nd Language Vocabulary
--------------	---

Charles Browne

授業概要並びに到達目標

This class will look at the development of Lexical Competence from several points of view. After developing a basic understanding of how vocabulary should be tested, taught and learned, we will then move on to consider several corpus-derived word lists for second language learners that I have developed. We will then review classroom vocabulary teaching and testing techniques based on current research. Finally, we will look at and get hands on practice in using a variety of online tools for testing, teaching and conducting research on second language vocabulary acquisition.

To prepare for each class, students are required:

- (1) to complete a reading assignment (2 hours);
- (2) to write a reflection log (1 hour).

授業計画

This will vary both according to the topic and the needs and interests of the students once we get started. Topics to be covered are as follows:

- Day 1: Vocabulary Lists and the New General Service list Project (Class 1 to 4)
- Day 2: Corpus Linguistics and Online Corpus Tools (Class 5 to 8)
- Day 3: Incidental Vocabulary Learning through Extensive Reading (Class 9 to 12)

Day 4: Tasks for Vocabulary Learning & Online Vocabulary Resources (Class 13 to 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours

Important note regarding use of generative AI: use of generative AI tools is not only allowed, it is encouraged. In fact, many of the tools I have made for teaching and studying and analyzing vocabulary make use of AI. The only thing that is not allowed is for you to completely generate your assignments, using AI and representing it as your own ideas. Other than that use it in any way you feel best.

成績評価基準

1. Participation & Self-evaluation (20%)
2. Reflection log (30%)
3. Reading assignments (20%)
4. Final project (30%)

教科書(参考書)

Required Textbook: Nation, I. S. P. (2022). Learning vocabulary in another language (3rd edition). Cambridge University Press. Other materials will be provided in class.

The course might be cancelled due to a small number of participants.

MA 1期	英語教育法研究Ⅴ Qualitative Research Methods
----------	--

Duane Kindt

授業概要並びに到達目標

Continuing from the 1st-year Intro to Action Research (AR) course, QRMs provides participants with more advanced skills for conducting AR focusing on qualitative research methods within mixed methods designs. Depending on student interest and need, instruments and procedures for gathering qual data will include, among others, (1) questionnaires, (2) interviews/learner talk, and (3) observation/journaling. The course also provides skills in data analysis and presentation in AR designs. Please note that this syllabus is tentative. To prepare for each class, participants are required to: (1) complete weekly reading assignments (two hours each) and (2) write a reflection log (one hour).

授業計画

Session 1: Intros

- (1) Intro to the QRMs course
- (2) Intro to research designs (Griffie, 2018) (Chapter 1)
- (3) Looking at RMs: Long (2017), Douglas (2015), and Kozawa (2017).
- (4) (Re)intro to AR design (Griffie, 2018) (Chapter 5)
- (5) (Re)intro to (1) MA TESOL Ref Docs, (2) 7 steps, (3) Ques-

tionnaires, and (4) the Lit Rev, proposals, and design maps
(6) Assignments

Session 2: Questionnaires

- (1) Sharing proposals, research design maps
- (2) Intro to Data Collection Instruments (DCI) (Griffiee, 2018) (Chapter 6)
- (3) 7 steps to writing effective questionnaires (Croker & Kindt, 2018)
- (4) Data from questionnaires (Griffiee, 2018) (Chapter 7)
- (5) Sharing questionnaires/interview guides, sample data, and/or preliminary analyses
- (6) Sharing Lit Rev expansions, ref. AR Project Template
- (7) Intro to (1) coding data, (2) frequency, (3) thematic, & (4) CA-informed analyses, and (5) recording interactional data
- (8) Assignments

Session 3: Interviews/learner talk

- (1) Looking at RD plans/maps revisions
- (2) Data from interviews (Griffiee, 2018) (Chapter 8)
- (3) Review of coding data, frequency, and thematic analyses (E&B, 2005)
- (4) Sharing interviews/learner talk, question banks, preliminary codebooks (code lists? coding manual?) + attempts at analyses?
- (5) Brief intro CA-informed qual analysis (E&B, 2005), transcription practice: “favorite”
- (6) Looking at the Making recordings file Questions?
- (7) Sharing expansions of the LR including refs
- (8) Intro to (1) observation, (2) journaling, and (3) thematic analysis
- (9) Assignments

Session 4: Observation and journaling

- (1) Looking at research design plans/maps revisions
- (2) Data from observation (Griffiee, 2018) (Chap 9)
- (3) Data from diaries/journals (Griffiee, 2018) (Chap 10)
- (4) Deeper analyses and written presentation of qual data (including an APA-style table, figure)
- (5) Sharing data (learner talk, interviews, or text-based) + attempts at analysis
- (6) Sharing deepening of the Lit Rev + APA notes
- (7) RMs discussion
- (8) Final assignments

成績評価基準

Session assignments (Moodle) - (4 × 15) 60%

In-class participation (in person) - (4 × 5) 20%

Reflections and reactions (Moodle) - (4 × 5) 20%

In this class, the use of AI for the purposes of language translation or generation is not permitted.

教科書(参考書)

Required:

Griffiee, D. T. (2018). An introduction to second language research methods: Design and data (2nd ed.). PDF available FREE at <http://www.tesl-ej.org/wordpress/books/>

Recommended:

Dörnyei, Z. (2007). Research methods in applied linguistics: Quantitative, qualitative, and mixed methodologies. Oxford UP.

Ellis, R., & Barkhuizen, G. P. (2005). Analysing learner language. Oxford UP.

MA 1期(集中)	英語教育法研究 XVIII Introduction to Language Learning Motivation
--------------	---

Matthew T. Apple

授業概要並びに到達目標

The purpose of this course is to introduce concepts related to language learning motivation and to encourage language instructors or instructors in training to apply motivational research findings to their language teaching and learning contexts. The goals are:

- (1) to develop an understanding of language learning motivation theories,
- (2) to develop the ability to critically analyze and evaluate motivational research findings, and
- (3) to connect motivation theories to particular language teaching contexts.

To prepare for each class session, students are required to:

- (1) to complete a reading assignment (two hours), and
- (2) to write a reflection log (one hour)

In this class, the use of AI for language translation or generation is not permitted.

授業計画

Day 1: August 25th

Course introduction and materials explanation

Exploring motivation: Changing perspectives

Theories of motivation in psychology

Day 2: August 26th

Motivation to learn a foreign language: Social Psychology

Motivation to learn a foreign language: Cognitive theories and classroom reality

Motivation to learn a foreign language: Focus on time, context, and vision

Review of theories and reflection exchange

Day 3: August 27th

Motivational dynamics and currents

Unconscious motivation

Motivation, multilingualism, and languages other than English (LOTEs)

Review of new initiatives and reflection exchange

Day 4: August 28th

Motivation in context: Demotivating influences

Fixed/growth mindsets and the broader sociocultural context

Teacher motivation and student motivation interplay

Presentation of preliminary individual language learning motivation project ideas

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

1. Action log – online responses to readings (40%)
2. Book chapter readings (30%)
3. Final project – design of a motivational intervention lesson plan or a motivational research study plan (30%)

Any student use of AI-generated content constitutes academic misconduct.

教科書(参考書)

Zoltán Dörnyei and Ema Ushioda. (2021). Teaching and researching motivation (3rd Ed.). Routledge. ISBN 978-1-138-54346-1

Other materials will be provided via Moodle.

The course may be canceled in the event of a small number of participants.

MA 1期	英語教育法研究 XIX Introduction to Quantitative Research Methods
----------	--

柴田 直哉

授業概要並びに到達目標

Course Outline

This course introduces quantitative research design and data collection methods in second language learning and teaching.

It covers:

- descriptive statistics
- inferential analyses of relationships and differences
- reporting quantitative findings

To prepare for each class, students are required:

- to complete a reading assignment (2 hours)
- to engage in online discussions (2 hours)
- to make a portfolio of their record of reading (2 hours)

Course Goals

By the end of the course, students are expected to be able to:

- evaluate the strengths and weaknesses of quantitative research studies
- conduct basic statistical tests commonly used in quantitative

research

- write action research reports using quantitative data

授業計画

Day 1: Introduction and Descriptive Statistics

- (1) Introduction to quantitative research (Class 1)
- (2) Introduction to statistical thinking (Class 2)
- (3) Parametric: Mean and standard deviation (Class 3)
- (4) Non-parametric: Median, quartiles, mode, extrema (Class 4)

Day 2: Correlational (associational) research / Analyses of relationships

- (1) What correlation is not (Class 5)
- (2) Correlation coefficients: Pearson product-moment, Spearman's rho (Class 6)
- (3) Reporting correlations (Class 7)

Day 3: (Quasi-)Experimental research / Analyses of differences between two groups

- (1) (Quasi-)Experimental designs (Class 8)
- (2) Student Independent Samples t-test (Class 9)
- (3) Welch and Mann-Whitney U tests (Class 10)
- (4) Student Paired Samples t-test (Class 10)
- (5) Wilcoxon signed-rank test (Class 11)

Day 4: Analysis of differences between more than two groups

- (1) One-way ANOVA (Class 12)
- (2) Friedman test (Class 13)
- (3) Repeated Measures ANOVA (Class 14)
- (4) Kruskal-Wallis test (Class 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

- (1) Online Discussions (20%)
- (2) In-Class Discussions (20%)
- (3) Reading Portfolio (20%)
- (4) Final Project (40%)

*To use AI for warm-up activities, brainstorming, might be permissible but having AI to write a paper for you or generate all your presentation slides for you would not be permissible.

教科書(参考書)

Loerts, H., Lowie, W., & Seton, B. (2020). Essential statistics for applied linguistics: Using R or JASP (2nd ed.). Macmillan International. (Required)

Dörnyei, Z. (2007). Research methods in applied linguistics: Quantitative, qualitative, and mixed methodologies. Oxford University Press. (Recommended)

Other materials will be provided or introduced by the instructor.

名古屋外国語大学

Nagoya University of Foreign Studies

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57
TEL/FAX 0561-75-1740（大学院事務室）
E-mail: injimu_gg@nufs.ac.jp
URL <http://www.nufs.ac.jp/>

